

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(7)

一般地方道紫尾田～牧園線改良工事(横川町赤水地内)
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

HOSHIZUKA

星 塚 遺 跡

所在地 始良郡横川町下ノ星塚

1993年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

序 文

この報告書は、一般地方道紫尾田～牧園線改良工事に先立って、鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した星塚遺跡の緊急発掘調査の記録です。

星塚遺跡は、鹿児島県北部の霧島山西麓、始良郡牧園町と横川町との町境を南流する天降川によって形成された河岸段丘上に位置し、縄文時代の遺跡として知られています。

今回の調査では、旧石器時代や縄文時代各時期のほか、歴史時代の遺物も発見され、多くの新資料を提供してくれました。

本報告書が、南九州の歴史研究及び文化財保護のために一役を担うことができれば幸いです。終わりに、この発掘調査に御協力をくださった栗野土木事務所や横川町教育委員会及び地元の皆様に心から感謝いたします。

平成5年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

所長 大久保 忠 昭

報告書抄録

フリガナ	ほしづかいせき					
書名	星塚遺跡					
副書名	一般地方道紫尾田～牧園線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告					
巻次						
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書					
シリーズ番号	7					
編著者名	新東晃一 中村和美					
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター					
所在地	〒899-56 鹿児島県始良郡始良町平松6252					
発行年月日	1993年3月31日					
フリガナ	ほしづかいせき					
所収遺跡名	星塚遺跡					
フリガナ	あいらぐんよこがわちょうしものほしづか					
所在地	始良郡横川町下ノ星塚					
調査期間	1992.8.4～1992.11.25					
調査面積	1,540㎡					
調査原因	一般地方道改良工事					
出土遺物・遺構等	主な時代	主な遺構	主な時代	主な遺物	出土量	特記
	縄文時代	集石遺構 5基 土壇 2基	旧石器時代 縄文時代 平安時代	細石核・細石刃・台形石器 早期土器（手向山式など） 前期土器（曾畑式・深浦式など） 後期土器（市来式） 晩期土器（黒川式など） 石器（石鏃・石匙など） 土錘・紡錘車・土師器	パンケース 60箱	



付図 星塚遺跡の位置図 (5万分の1)

例 言

1. この報告書は一般地方道紫尾田～牧園線改良工事（横川町赤水地内）に伴い、鹿児島県教育委員会（鹿児島県立埋蔵文化財センター）が行った星塚遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は鹿児島県土木部の依頼を受けて、鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
3. 発掘調査については、横川町教育委員会や栗野土木事務所の協力を得た。
4. 発掘調査及び報告書作成については、鹿児島県文化財保護審議会委員河口貞徳氏、大分市歴史資料館長木村幾多郎氏の指導助言を得た。
5. 本報告書は、上記の方々の指導助言を得て県立埋蔵文化財センターが行い、執筆は新東晃一と中村和美が担当した。
（第Ⅳ章は牛ノ濱修，赤色顔料分析は大久保浩二が担当した。）
6. 出土遺物の整理復元作業等は県立埋蔵文化財センターの整理作業員が行い、遺物の実測，製図，写真撮影，編集については，新東・中村が行った。
7. 本書に用いたレベル数値は海拔絶対高である。本書の遺物番号は各章ごとに通し番号をつけた。
8. 本遺跡の今回調査の出土遺物は県立埋蔵文化財センターが一括して保管し，一部は展示している。

本文目次

第I章 調査の経過	8
第1節 調査に至る経過	8
第2節 調査の組織	8
第3節 調査の経過	8
第II章 遺跡の位置および環境	10
第III章 調査の概要	16
第1節 調査の概要	16
第2節 遺跡の層位	16
第IV章 VI層の調査	17
第1節 調査の概要	17
第2節 出土遺物	17
第V章 IV層の調査	21
第1節 調査の概要	21
第2節 遺構	21
第3節 出土遺物	23
第VI章 III層の調査	37
第1節 調査の概要	37
第2節 遺構	37
第3節 前期の出土遺物	41
第4節 後期の出土遺物	55
第5節 晩期の出土遺物	65
第6節 出土石器	71
第7節 土製品	72
第VII章 II層の調査	78
第1節 調査の概要	78
第2節 出土遺物	78
第VIII章 発掘調査のまとめ	83

挿 図 目 次

付 図	遺跡の位置図	3
第 1 図	周辺の遺跡と位置図	11
第 2 図	遺跡の層位（折り込み）	13~14
第 3 図	遺跡の地形と調査区域	15
第 4 図	VI層遺物出土分布図	18
第 5 図	VI層出土石器実測図（1）	19
第 6 図	VI層出土石器実測図（2）	20
第 7 図	IV層の集石遺構配置図とIV層遺物出土状態	22
第 8 図	集石遺構実測図（1）	23
第 9 図	集石遺構実測図（2）	24
第10図	IV層出土遺物分布図	25~21
第11図	IV層出土遺物実測図（1）	29
第12図	IV層出土遺物実測図（2）	29
第13図	IV層出土遺物実測図（3）	30
第14図	IV層出土遺物実測図（4）	31
第15図	IV層出土遺物実測図（5）	32
第16図	IV層出土遺物実測図（6）	33
第17図	IV層出土遺物実測図（7）	34
第18図	IV層出土遺物実測図（8）	35
第19図	IV層出土遺物実測図（9）（石器）	36
第20図	III層の調査範囲と遺構配置図	37
第21図	III層の遺構実測図	38
第22図	前期土器出土分布図（折り込み）	39~40
第23図	III層（前期）出土土器実測図（1）	43
第24図	III層（前期）出土土器実測図（2）	44
第25図	III層（前期）出土土器実測図（3）	45
第26図	III層（前期）出土土器実測図（4）	46
第27図	III層（前期）出土土器実測図（5）	47
第28図	III層（前期）出土土器実測図（6）	48
第29図	III層（前期）出土土器実測図（7）	49
第30図	III層（前期）出土土器実測図（8）	50
第31図	III層（前期）出土土器実測図（9）	51
第32図	III層（前期）出土土器実測図（10）	52
第33図	III層（後期）遺物出土状態（折り込み）	53~54
第34図	III層（後期）出土土器実測図（1）	66
第35図	III層（後期）出土土器実測図（2）	57
第36図	III層（後期）出土土器実測図（3）	58
第37図	III層（後期）出土土器実測図（4）	59
第38図	III層（後期）出土土器実測図（5）	60
第39図	III層（後期）出土土器実測図（6）	61

第40図	Ⅲ層（後期）出土土器実測図（7）	62
第41図	Ⅲ層（晩期）土器出土状態（折り込み）	63~64
第42図	Ⅲ層（晩期）出土土器実測図（1）	67
第43図	Ⅲ層（晩期）出土土器実測図（2）	68
第44図	Ⅲ層（晩期）出土土器実測図（3）	69
第45図	Ⅲ層（晩期）出土土器実測図（4）	70
第46図	Ⅲ層（晩期）出土石器実測図（1）	73
第47図	Ⅲ層（晩期）出土石器実測図（2）	74
第48図	Ⅲ層（晩期）出土石器実測図（3）	75
第49図	Ⅲ層（晩期）出土石器実測図（4）	76
第50図	Ⅲ層（晩期）出土石器実測図（5）	77
第51図	Ⅱ層遺物出土状態	79
第52図	Ⅱ層出土遺物実測図（1）	80
第53図	Ⅱ層出土遺物実測図（2）	81

表 目 次

附 表	報告書抄録	2
第 1 表	遺跡地名表	12
第 2 表	出土土器観察一覧（1）	86
第 3 表	出土土器観察一覧（2）	87
第 4 表	出土土器観察一覧（3）	88
第 5 表	出土土器観察一覧（4）	89
第 6 表	出土土器観察一覧（5）	90
第 7 表	出土石器法量表	91

図 版 目 次

図版 1	星塚遺跡遠景（南から・航空写真）	93
図版 2	星塚遺跡遠景（西南から）・星塚遺跡の層位	94
図版 3	1. 星塚遺跡の土層遠景・2. 細石器出土状態	95
図版 4	1. 縄文時代前期と早期の調査風景・2. Ⅲ層調査風景	96
図版 5	1. 細石器出土状態・2. 集石 1 号・3. 集石 4 号・4. 集石 1 号・ 5. 集石 2 号・6. 集石 5 号	97
図版 6	1. 土器（56）出土状態・2. 遺物（90）出土状態・3. 土器（60）出土状態・4. Ⅲ層調査 風景・5. Ⅲ層遺物（晩期 8）出土状態・6. 佐々木小学校発掘体験学習風景	98
図版 7	1. VI層細石器（細石核）・2. IV層縄文早期土器（手向山式土器）3. IV層縄文早期石器 前期（56・27・90・93・89・92・91）	99
図版 8	後期土器（60）・Ⅲ層石器（石鏃 3 点・石斧・磨石・礫石 2 点・スクレイパー）	100
図版 9	Ⅲ層石器（石匙 2 点）・晩期土器（8・16）晩期土器・Ⅱ層出土遺物各 2 点	101

第 I 章 調査の経過

第 1 節 調査に至るまでの経過

鹿児島県農政部（農地建設課・加治木耕地事務所）は、始良郡横川町赤水地区において県営特殊農地保全整備事業を計画し、県教育庁文化課が平成元年に分布調査を実施したところ、計画地内に姪原遺跡が所在していることが判明した。そこで県農政部、県教育庁文化課、横川町教育委員会は埋蔵文化財の保護と事業との調整を図るため協議を行った結果、横川町教育委員会は平成 2 年度に国・県の補助を得て確認調査を実施し、遺跡の広がりを確認した。

そして、一般地方道紫尾田～牧園線改良工事が、本地区内に計画されることが判明した。遺跡の取扱いについて県土木部（道路整備課・栗野土木事務所）と県教育庁文化課で協議の結果、平成 4 年度に発掘調査を実施する運びとなった。

第 2 節 調査の組織

発掘調査は、平成 4 年 8 月 4 日(火)から 11 月 25 日(水)の間に実施した。調査は鹿児島県教育委員会の主体で行い、発掘調査は鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。発掘調査の組織は下記の通りである。

調査主体	鹿児島県教育委員会	
調査企画・調整	鹿児島県教育庁文化課	
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター 所長	大久保忠昭
調査企画者	〃 次長兼総務課長	水口 俊雄
	〃 主任文化財主事兼調査課長	戸崎 勝洋
調査担当者	〃 主任文化財主事	新東 晃一
	〃 文化財研究員	中村 和美
調査事務担当者	〃 主 査	下園 勝一
	〃 主 事	中村 和代
発掘調査指導者	鹿児島県文化財保護審議会 委員	河口 貞徳
	大分市歴史資料館 館 長	木村幾多郎

第 3 節 調査の経過

発掘調査は、平成 4 年 8 月 4 日(火)から 11 月 25 日(水)の間に実施した。整理作業及び報告書作業は、発掘調査終了後、平成 4 年 11 月 26 日から平成 5 年 3 月の間に実施した。以下、日誌抄により発掘調査の経過を略述する。

第4節 発掘調査の経過

◎ 8月上旬（8月4日～）

埋蔵文化財センターから道具搬入。プレハブ等の設営。調査区内の除草をし、日除の寒冷紗設営。排土処理の関係で調査区内の西側50mを先行して調査し、東側は排土置場とする。グリッド調査に先駆け、調査区内南側をトレンチ調査、土師器甕や縄文晩期の土器や石匙が出土。北-南方向にA～B、西-東方向に1～8の10mグリッド設定（建設予定の道路の中央線を基準にする）。週末は台風接近のために保安対策をとる。

◎ 8月中旬～下旬

電話・水道工事完了。＜A・B-1区＞Ⅲ・Ⅳ層の調査。Ⅳ層上面で地形図測量。Ⅳ層で前平式土器出土。重機による表土剥ぎ（A・B-2～5区）。下旬は雨多し。

◎ 9月上旬～中旬

長期研修講座受講生（以下、研修生）現場研修。＜A・B-1区＞Ⅳ層で集石1・2号を検出し実測。Ⅵ層の調査、畦原型細石核出土。南壁及び東壁断面実測。＜A・B-2～5区＞Ⅱ・Ⅲ層の調査。

◎ 9月下旬

＜A・B-2区＞Ⅳ層、集石3～5号を検出・実測。＜A・B-3～5区＞Ⅲ層で土壙・焼土検出。研修生指導で井ノ上文化財主事来跡。今までの発掘調査の成果を作業員に説明。

◎ 10月上旬～中旬

所長・次長来跡。栗野土木事務所上原氏来跡。＜B-2区＞南壁実測。＜B-2～5, A・B-5区＞Ⅳ層トレンチ調査。＜A・B-2・3区＞Ⅲ層、地形図測量。ピット検出。焼土断面実測。Ⅳ層の調査。

◎ 10月下旬

＜A-2区＞Ⅳ層の調査。＜B-2～5区＞Ⅳ層以下トレンチ調査。南壁実測。＜A・B-5区＞東壁実測。6区以降を調査するために重機を使用し排土の転換及び表土剥ぎ（A・B-6～8区）。終了後Ⅲ層の調査。整理期間を考慮し、遺物の水洗。横川町長・同町教委社会教育課長福島氏来跡。宮之城町教委社会教育課長視察。研修生現場研修終了。

◎ 11月上旬

＜B-6～8区＞Ⅳ層トレンチ調査。＜A・B-7・8区＞地形図測量。次長・調査課長・中村耕治文化財主事来跡。栗野土木事務所上原氏と農道復旧の件で話し合い。

◎ 11月中旬

＜A・B-6区＞ピット・地形図測量。＜A-8区＞土壙掘り下げ。＜A・B-6区＞Ⅳ層の調査。＜A・B-8区＞深掘り。横川町立佐々木小学校4～6年生発掘体験学習（20日）。

◎ 11月下旬（～11月25日）

＜A・B-6区＞Ⅳ層の調査。＜A・B-7・8区＞Ⅲ層の調査。＜A・B-8区＞東壁実測。＜B-6～8区＞南壁実測。あとかたづけ。調査終了。

第Ⅱ章 遺跡の位置及び環境

星塚遺跡は始良郡横川町下ノ字星塚に所在する。

星塚遺跡のある赤水地区は横川町の最東部にあり、横川町役場から南東へ約6kmのところにある。南流する天降川を挟んで牧園町と接しており、JR霧島西口駅の西側の地域にある。遺跡は、天降川の形成した大きな谷部の台地上に位置している。星塚遺跡はその河川開析から残存している南北に細長い台地上に立地し、南側には一昨年確認調査が行われた姪原遺跡が隣接している。

遺跡のある横川町は、県の北部の鹿児島市から北東約46kmのところであり、東は牧園町、西は薩摩郡薩摩町及び祁答院町・始良町南は隼人町・溝辺町、北は栗野町に接しており、霧島火山群の西麓に位置している。

町の北部と西部の町境の標高400～600mの山地を源とし東流する天降川（金山川）が北東部で南東に流れ、南東部においては牧園町境を南流している。この天降川は中央部で紫尾出川を、西部で万膳川を合流させる。また、南の溝辺町境では久留味川が東流している。

町の面積のうち半数以上が林野で、天降川水系の流域に水田が開かれているが、それ以外は火山灰台地でその丘陵上に畑地が広がる。

安良岳の麓には和同元年（708年）に勧請されたとの伝承が残る安良神社が鎮座しているが、建久8年（1197年）の大隅国田原に島津荘寄郡のうちに横川（河）院の名が見えており、また禰寝文書の天養2年（1145年）の項にも横川院が見え、「横川（河）」の名は鎌倉初期前後の頃から歴史に登場してくる。戦国期には島津氏の勢力範囲のなかに組み入れられる。近世になると本町は桑原郡横川町郷3カ村からなり、江戸時代の寛永17年（1640年）に山ヶ野金山が発見され、一時は佐渡金山をしのぐ産金高を誇ったこともある。また、遺跡周辺の黒葛原台地は江戸時代の初期に牧之原を貫流する金山川に堰を設けて、全長1里に及ぶ用水路を開いて良質の水田地帯としている。

横川町内の遺跡は、昭和40年代の後半までは極めて少なかったが、鹿児島県教育委員会が実施した九州縦貫自動車道に伴う分布調査（昭和47年度）、鹿児島県中世城跡調査（昭和58年度）、テクノポリス建設地域分布調査（昭和60年度）等によって遺跡数は飛躍的に増加した。

「鹿児島県市町村別遺跡地名表」では縄文時代13カ所、弥生時代2カ所、古墳時代20カ所、歴史時代29カ所が知られているが、考古学的な調査は九州縦貫自動車道建設に伴って昭和53～54年に緊急発掘された中尾田遺跡が最初である。当遺跡は縄文時代早期から中世山城までの複合遺跡で、多くの遺物・遺構等が発見されている。その後、昭和60年には横川城跡の発掘調査で城跡の概要の一部が確認され、平成2年には隣接する姪原遺跡（赤水地区）や羽山遺跡（黒葛原地区）の圃場整備事業に伴う発掘調査が実施され、横川町の古代がわずかずつではあるが解明されてきている。

第1表 遺跡地名表

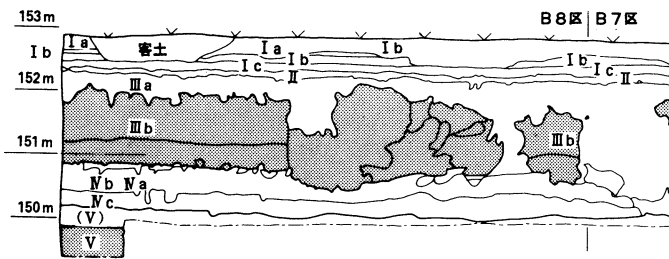
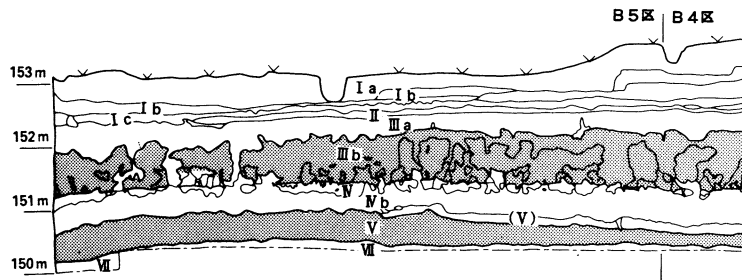
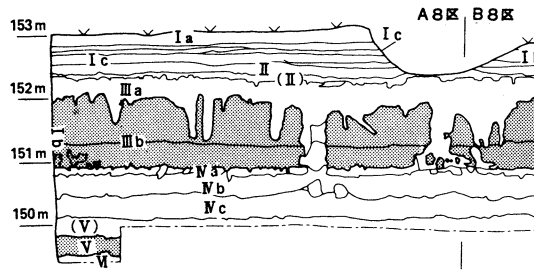
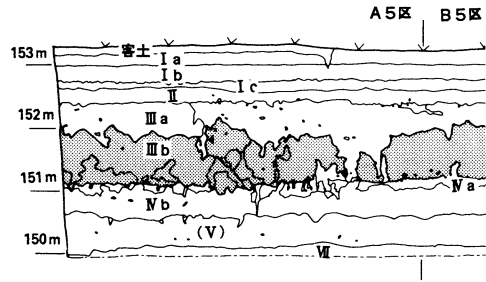
番号	遺跡名	所在地	地形	時代	備考
1	谷ノ口	中ノ谷ノ口1181-1	山頂	縄(中)	阿高式土器・石斧、昭5出土 遺跡破壊
2	北園崩丸	上ノ北園崩丸	山麓	縄(中・前)	石板式・塞ノ神式土器・特製石斧1、破壊遺物散逸、現地発見出来ず地図に示された場所は字五反田(水田)
3	木 浦	上ノ木浦4196-5	台地	縄(中・後)	岩崎上層式・指宿式土器・円磔・間磨石斧・扁平片刃斧・円形石斧・弥生式土器・須恵器(横べ)
4	谷ノ口	中ノ谷ノ口1196-5			
5	中尾田	中ノ中尾田			現況高速道路
6	川北、馬場	中ノ川北馬場687-2			
7	二石田	中ノ二石田長坂上520-6			土師器・須恵器片
8	前川内	下ノ前川内脇ヶ迫2383			弥生土器片・土師器
9	谷ノ口地下式横穴	中ノ谷ノ口1204	斜面北		人骨・土師器
10	谷ノ口横穴群	中ノ谷ノ口1196-5			
11	中尾田の寺跡	中ノ中尾田83			
12	墓 地	中ノ中尾田83		寛慶6年	
13	庚申塔	中ノ川北687-2			
14	観音の瀬戸	中ノ川北949			木象1・釈迦像2・仁王像2
15	石 碑	中ノ城山468-3			北原伊勢之介銘
16	陣之尾	中ノ陣之尾			
17	鳥越城跡	中ノ下尾田132			
18	中尾田城跡	中ノ下尾田95			別称 片城
19	無名城跡	中ノ長坂上5206-1			
20	横川古城跡	上ノ古城			
21	南ヶ迫	上ノ南ヶ迫			別称字都基
22	岩堂観音	下ノ赤水城ヶ崎3862-1			(県)昭37.5
23	横川城跡	中ノ城山468-491			(町)昭37.2
24	真乗院跡	中ノ川北950			"
25	仏壽寺跡	中ノ川北馬場618			"
26	安良神社	上ノ小輪安良164			"
27	徳 源 社	上ノ夢想谷下山1112-2			"
28	木浦権現の跡	上ノ木浦4196-5	台地		"
29	弓削が丘	上ノ正牟田茶門山4338	山頂		"

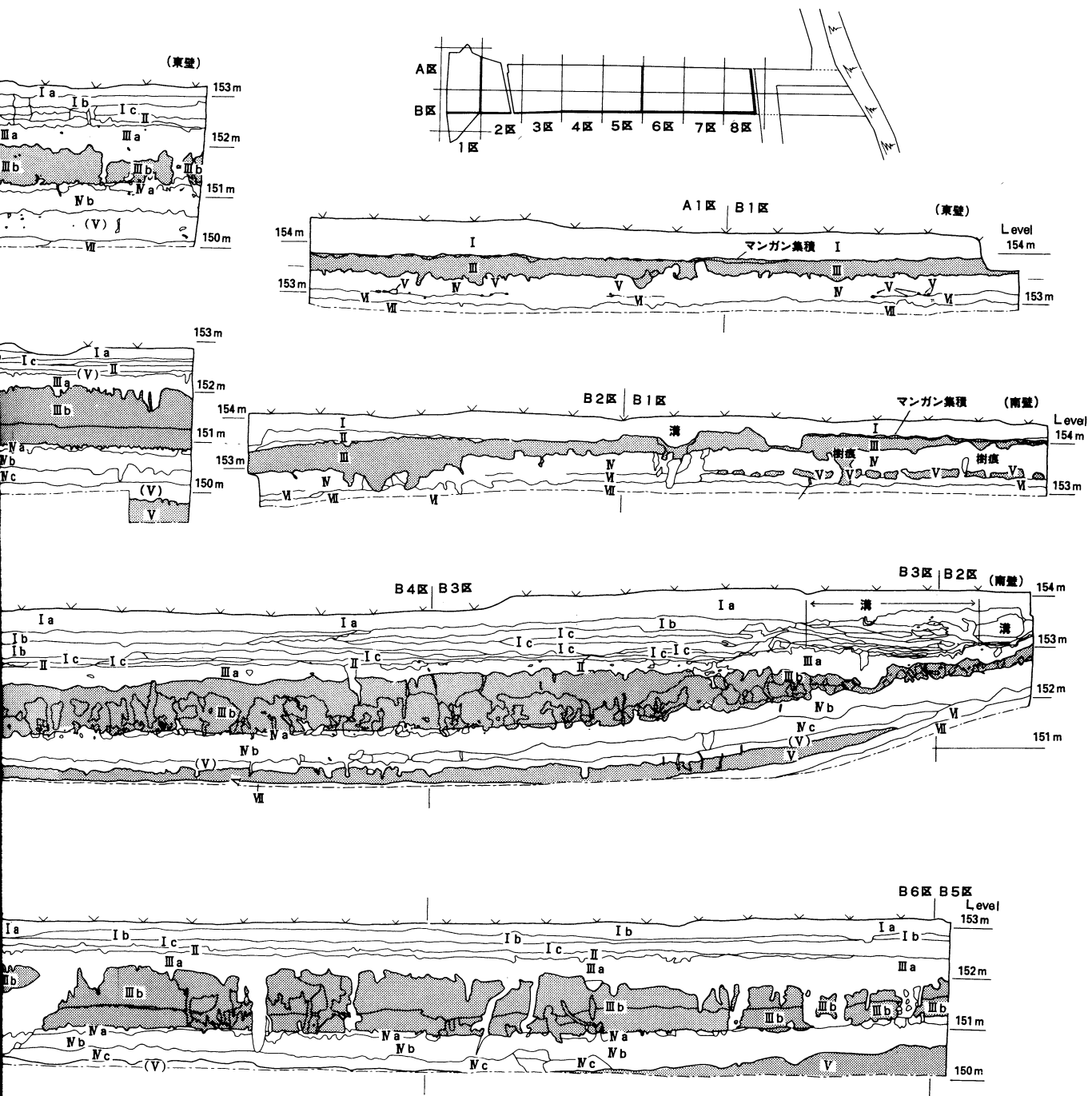
番号	遺跡名	所在地	地形	時代	備考
30	阿勢陀寺の跡	上ノ正牟田阿勢陀原4273	台地		(町)昭37.2
31	腰越神社跡	上ノ下小脇岩元28			"
32	民部塚	中ノ二石田民部塚5346-44			"
33	江ヶ崎	上野江ヶ崎	台地	縄文	土器片
34	浜弓場原	上野浜弓場原	台地	古墳・歴史	土師器
35	浜弓場	上野浜弓場	台地	歴史	青磁
36	池 平	上野池平	台地	縄・古・歴	縄文・成川・土師
37	迫 田	上野迫田	台地	縄文	土器片
38	小園原	上野小園原	台地	古墳・歴史	土師器
39	役所上	上野役所上	台地	縄・古・歴	縄文式・土師器
40	中間原	上野中間原	台地	古墳・歴史	成川式・土師器
41	大久保	上野大久保	台地	古墳	成川式
42	鼓 原	上野鼓原		古墳・歴史	成川式・土師器
43	方木山	上野鼓原	台地	古墳・歴史	土師器
44	大住原	上野大住原		古墳	成川式
45	中 原	上野中原		縄・古・歴	縄文式・土師器・青磁
46	楠木浜弓場	上野楠木浜弓場	台地	古墳・歴史	成川式・土師器
47	米 原	下野米原	台地	古墳・歴史	成川式・土師器
48	袴	下野袴・山住地	台地	縄・古・歴	成川・土師・縄文、二長・須崎
49	崩 平	中野崩平・枯駄	台地	古墳・歴史	土師器等
50	羽 山	中野羽山	台地	古墳・歴史	成川・土師・須恵、テクノ分布調査平成2年調査
51	弓場原	下野弓場原	台地	古墳・歴史	成川・土師
52	笹 原	下野笹原	台地	古墳・歴史	"、平成2年調査
53	羽山2	下野羽山		縄文	テクノ分布調査
54	羽山3	下野羽山		縄文	"
55	中 原	下野中原		縄文・古墳	"
56	前 原	下野前原	丘陵端	古墳	土器片、平成2年分布調査
57	元 境 迫	下野元境迫	丘陵端	古墳	" "
58	多奈ヶ迫	下野多奈ヶ迫	丘陵端	古墳	" "
59	星 塚	下野星塚	台地	旧石器～歴史	平成4年調査

～ 凡 例 ～

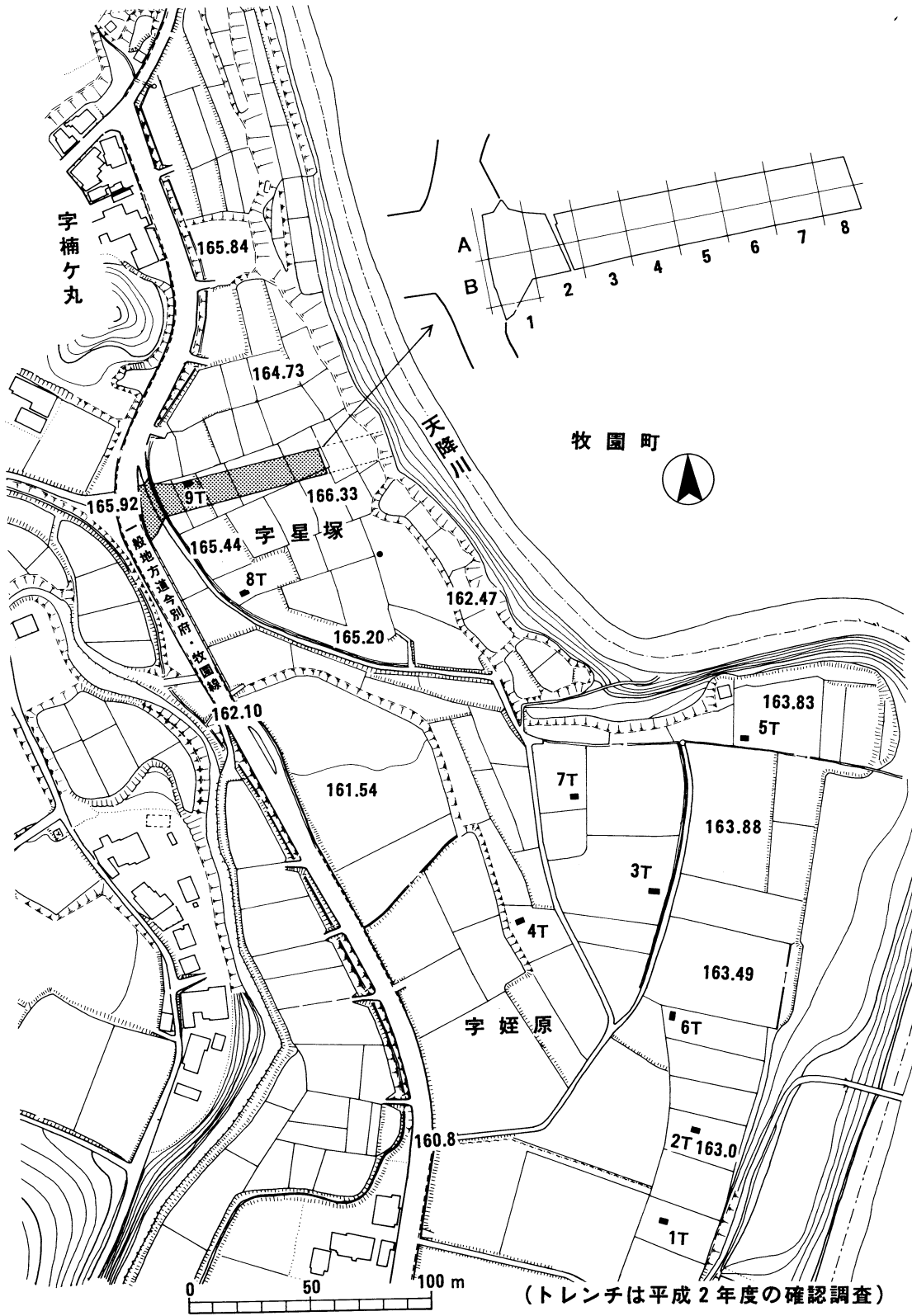
(土層断面 解説)

- I層 耕作土 含軽石
 - I a 現耕作土 (表土)
 - I b 旧耕作土 (旧水田), 混マンガン灰色土
 - I c 旧耕作土, 混マンガン黒灰色土, 軽石の量で1~4に分層
- II層 黑色火山灰土
- III層 アカホヤ火山灰
 - III a 暗黄褐色アカホヤ (腐植アカホヤ)
 - III b 明黄褐色アカホヤ
 - III c 混黒色土アカホヤ
- IV層 (IV a) 黒色土
 - IV b 茶褐色土
 - IV c 灰褐色砂質土
- V層 含明黄褐色パミス (=サツマ) 茶褐色粘質土
- VI層 黒褐色土
- VII層 二次シラス





第2図 遺跡の層位 (1/120)



第3図 遺跡の地形と調査区域

第三章 調査の概要

第1節 調査の概要

発掘調査は道路建設予定地内に10×10mのグリッドを設定して行った。グリッドは計画道路のセンターラインを基準に、北-南方向にA～B区、西-東方向に1～8区を設定した。

発掘調査は、B区列の東端に幅1mのトレンチを設定し、Ⅱ～Ⅲ層の確認調査を実施した。その後、全面調査は、表土は重機によって排土し、Ⅱ層以下を人力で掘り下げた。

Ⅱ層は、A・B4区を中心にA・B1区～A・B8区にかえて、歴史時代の土師器・須恵器・紡錘車・土錘などの遺物が出土した。

Ⅲ層は、縄文時代前期・後期・晩期該当の遺物が出土し、ピットや土坑が検出された。

Ⅱ層、Ⅲ層の調査終了後、再びB区列東端に幅2mのトレンチを設定し、Ⅳ層及びⅥ層の確認調査を実施した。その結果、A・B1区～A・B6区にⅣ層の遺物包含層が検出され、A・B1区～A・B3区にはⅥ層の遺物包含層が検出された。

その後、Ⅳ層の全面調査を実施し、引き続きⅥ層の調査を実施した。

Ⅳ層はA・B1区～A・B3区とA・B5区～A・B6区に縄文時代早期に該当する遺物が出土した。さらにA・B1区～A・B2区には集石遺構が5基検出された。

Ⅵ層では、A・B1区～A・B3区に旧石器時代の細石刃・細石核・剥片などが出土した。

第2節 遺跡の層位

- I層 表土。旧水田で基盤部分にはマンガン分が集積。これが数枚見られ何回も水田形成が行われたことが伺われる。
- Ⅱ層 黒色砂質土層。上部は削平されている。軽石を含むものと含まないものがあり、後者が土師器の包含層である。
- Ⅲ層 明黄茶褐色火山灰層。いわゆるアカホヤ火山灰層でやや暗い2次堆積層（腐植アカホヤ）をⅢa層とする。Ⅲa層は縄文時代前期・後期・晩期の包含層である。Ⅲb層はアカホヤ火山灰の無遺物層でⅢa層より明るく、1.2mほど堆積している。上部は硬質であり、また下部にはブロック状にパミスが見られる。
- Ⅳ層 黒褐色～暗茶褐色粘質土層。縄文時代早期の包含層である。この下層に灰褐色～黒褐色砂質土層が見られる場合がある。
- V層 黒色砂質土層にオレンジ色のパミスを含む土層。パミスは薩摩火山灰層（約11,000B.P. y）。南側はブロック状に残存し、東側にしたがって厚い。
- Ⅵ層 黒褐色粘質土層。旧石器時代の細石器の包含層である。
- Ⅶ層 いわゆるシラス（入戸火砕流）の2次堆積層である。無遺物層。

第Ⅳ章 VI層の調査

第1節 調査の概要

VI層は、V層の薩摩火山灰層の下層で黒褐色粘質土層である。IV層の縄文早期包含層の調査を終えてV層からVI層にかけての下層確認のトレンチ調査を実施したところ、VI層中から細石器が出土した。そのため、VI層の平面調査を実施したところ、AB1区東側～AB2区の傾斜面にかけて細石器の包含層が検出され、下記のような遺物が出土した。

第2節 出土遺物

1～9は細石刃である。細石刃は9点出土した。石材はすべて良質の黒曜石で、完形品が3点、頭部～中間部が2点、中間部が1点、尾部が3点であり、使用痕が認められるものがほとんどである。

10～14は細石核である。細石核は9点出土していて、そのうち5点を図示した。10は哇原型の細石核である。偏平な砂岩礫を2分割して、分割面を細石刃剝離打面とするものである。分割は左側面方向から右側面方向への1回の加撃によって行われ、分割面は調整されることなく、そのまま細石刃剝離作業の打面として利用されている。表皮の自然面は研磨されたかのように光沢がある。11は自然面の残る気泡の少ない良質の黒曜石小礫を素材としたもので、平坦な自然面を打面にし、打面を調整しながら、細石刃剝離が行われている。細石刃剝離面のみを調整し、他の面は最小限調整を施している。12は上牛鼻産の黒曜石の小礫を素材にし、左側面が正面から、右側面は打面方向からの大きな加撃により作出され、その後の細かい調整は施されていない。打面は正面方向からの細かい剝離で調整され、細石刃剝離がなされている。13は良質のアメ色の黒曜石を素材にしている。下端部は欠損している。側面は打面方向からの加撃により作出され、細かい調整は施されていない。打面は正面方向からの細かく丁寧な剝離によって調整されている。14は気泡の少ない良質の偏平な黒曜石を素材にし、左側面は未調整で自然面のままであり、右側面は打面方向からの加撃で調整されている。打面調整は主に正面から実施され、右側面からの調整剝離面も1枚観察される。打面には自然面が残され、背面方向に斜行している。

15は台形様石器である。良質の黒曜石を素材に側縁部両縁に調整を加え、台形状に整形している。刃部には細かい調整が加えられている。台形様石器の形態をもっているが、3層の出土品であり、今後検討を要するものである。

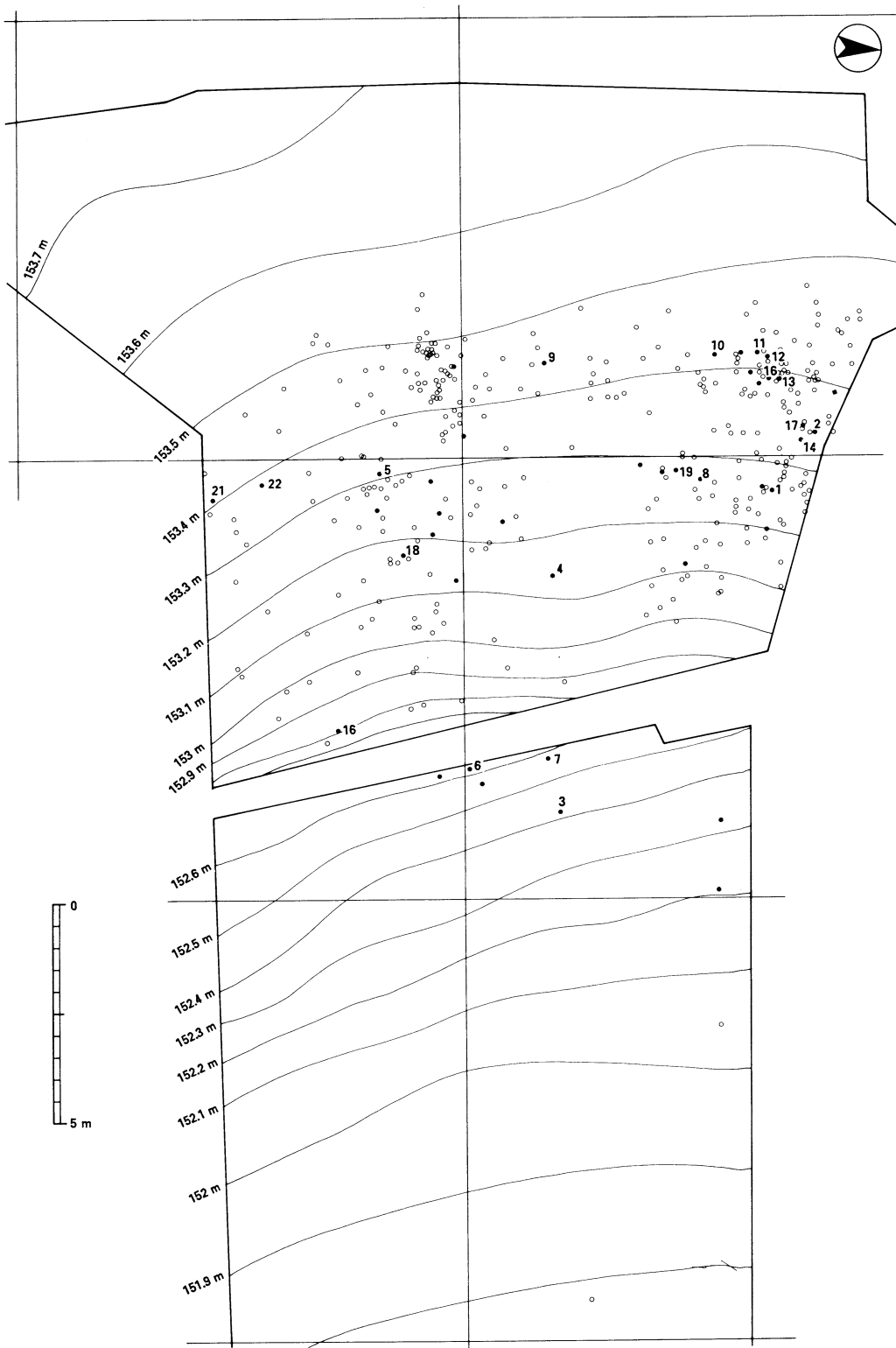
16・17は尖頭器である。16は珪岩を素材にし、交互剝離により全縁周部を調整したものである。

17は上牛鼻産の黒曜石を素材にしたもので、先端部は欠損しているが、側縁部を調整加工したものである。

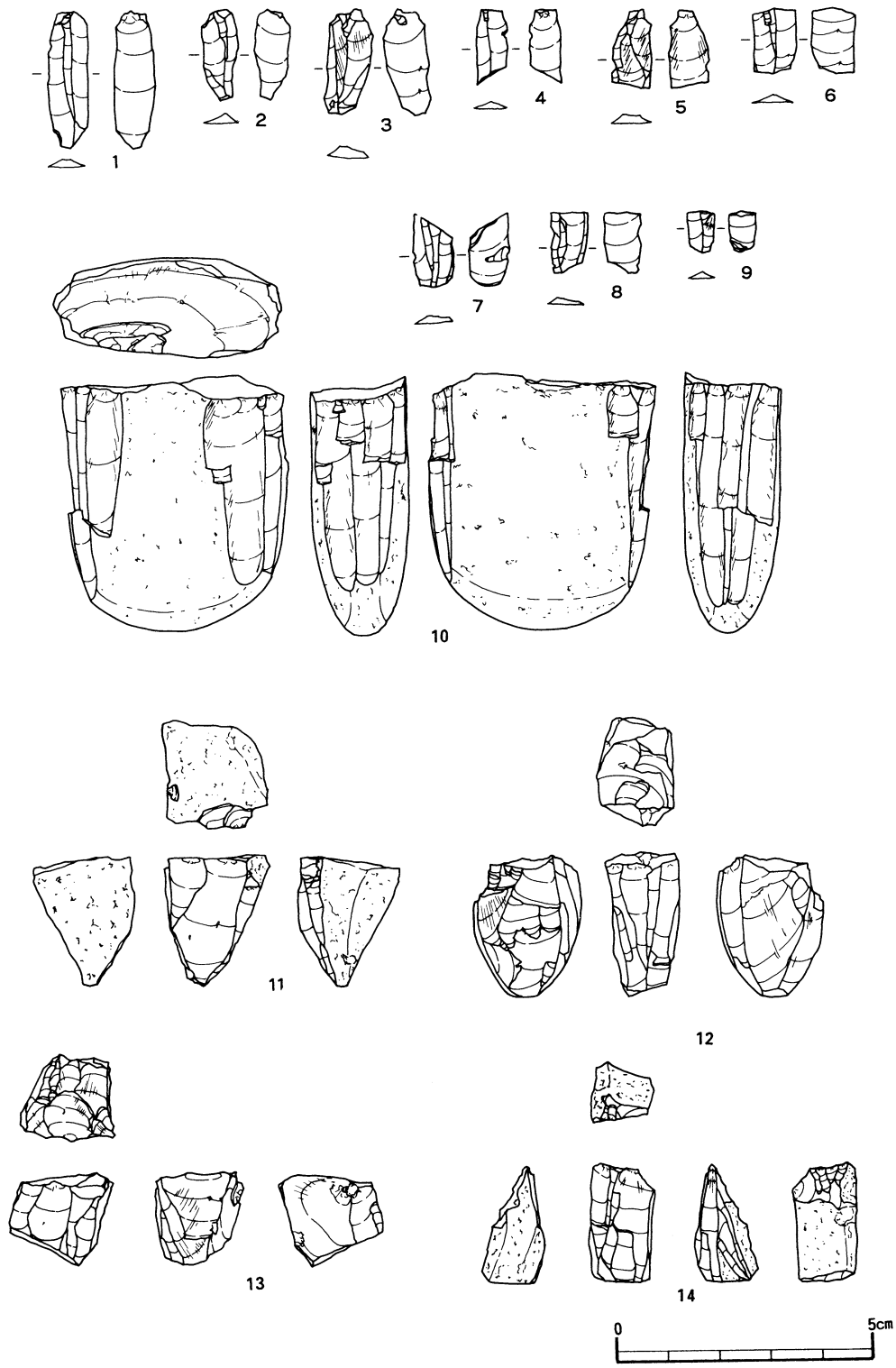
18・19は削器である。どちらも上牛鼻産の黒曜石を素材に用い、片方の側縁部に剝離調整が施されている。

20は日東産の黒曜石を用いた大形剝片である。

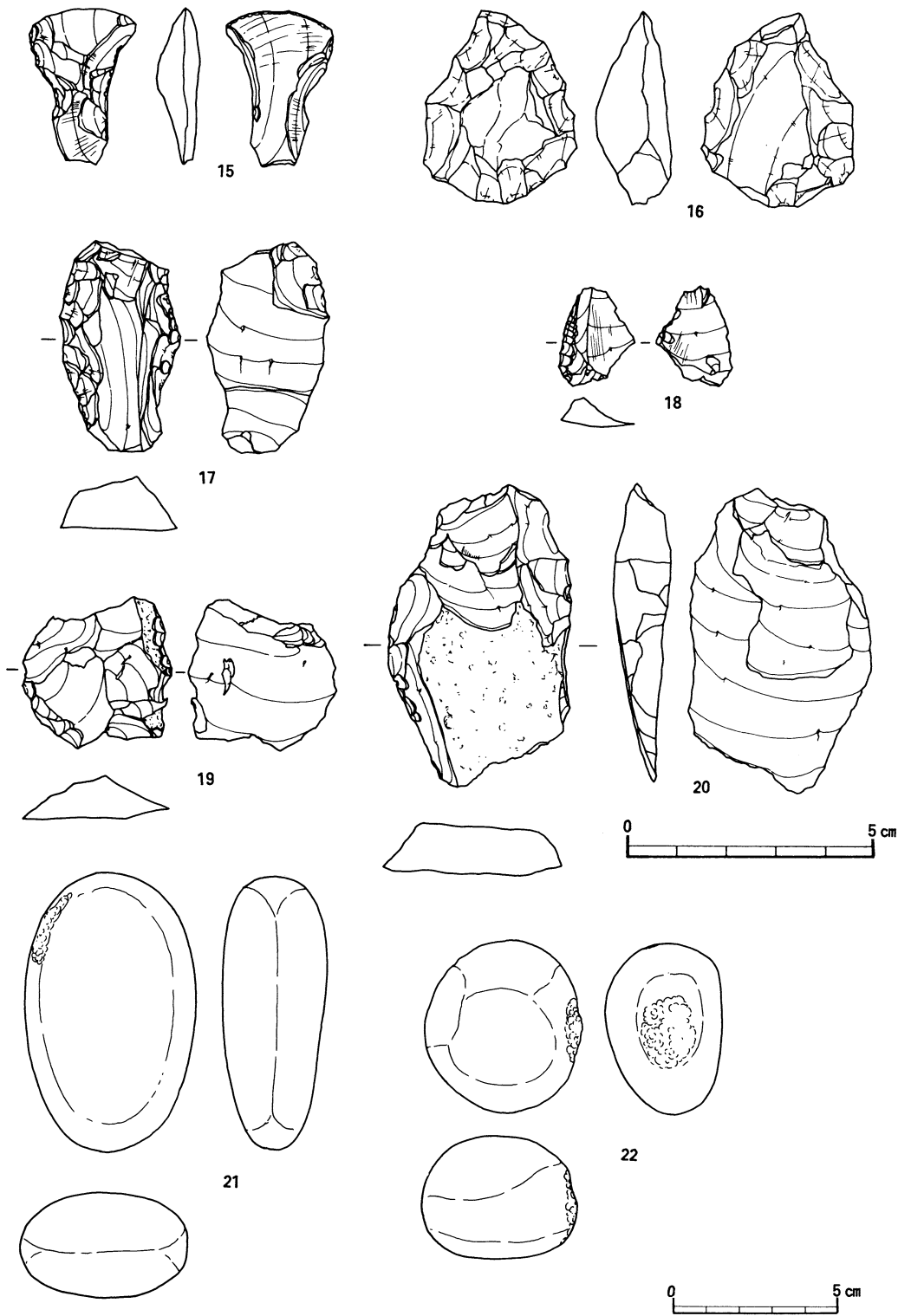
21・22は砂岩製の敲石である。楕円形の川原石を利用し、一面に敲打痕が見られる。



第4図 IV層遺物出土分布図



第5圖 VI層出土石器(1)



第6圖 VI層出土石器(2)

第V章 IV層の調査

第1節 IV層の調査の概要

IV層は、III層の下部のアカホヤ火山灰層とV層（薩摩火山灰）に挟まれた層で、黒褐色～暗茶褐色土層を呈する。III層の調査終了後、B区列東端にB1区から順次幅2mのトレンチを設定して包含層の有無の確認調査をおこなった。その結果、B2区とB6区の2ヶ所を中心に遺物が集中する包含層が確認された。引き続き包含層が確認される範囲については全面調査を実施した。なお、A・B1区～A・B2区には、集石遺構5基が検出された。

第2節 IV層の遺構

IV層からは、5基の集石遺構が検出された。集石は、IV層包含層の最下面でV層（薩摩火山灰層）上面に検出された。集石遺構の時期は、共伴する資料は少ないが、遺物の出土傾向からIII類土器に共伴することが考えられ早期に該当するものと考えられる。

集石遺構は、県道今別府～牧園線から略東方向へ傾斜する地形のほぼ頂部付近に検出されている。集石1号と3号、4号はほぼ纏まって検出されているが、集石2号及び5号は傾斜面のためか散乱している。

1 集石1号（第7図）

集石1号はA2区の県道寄りに検出され、今回調査部分では遺跡の最頂部に位置している。集石1号は直径120cmの円形プランで深さ40cmの掘り込みを呈し、5基の中では最も保存が良好である。集石を構成する石は、総数386個を数える。集石は、掘り込みの下面に沿って比較的大型の石を敷石状に配置し、上面には小礫が投げこまれた典型的な集石の形態を呈する。石材は、角礫も若干みられるが、ほとんどが安山岩や頁岩の円礫の河原石である。

2 集石2号（第8図）

集石2号は、集石1号の南方向約16mの位置のB1区東端に検出されている。集石の石の総数は21個とわずか、しかも掘り込みも検出されず、石も散乱した状態で検出されている。

3 集石3号（第8図）

集石3号は、集石1号の略東方向9mの位置で、2号から北東方向14mに検出された。集石3号は、直径約80cmの円形状に礫石が検出されている。90cm程度の円形プランが想定され、深さ20cm程度の掘り込みが残存する。集石を構成する石は、総数82個を数える。石材は、角礫も若干みられるが、ほとんどが安山岩や頁岩の円礫の河原石である。

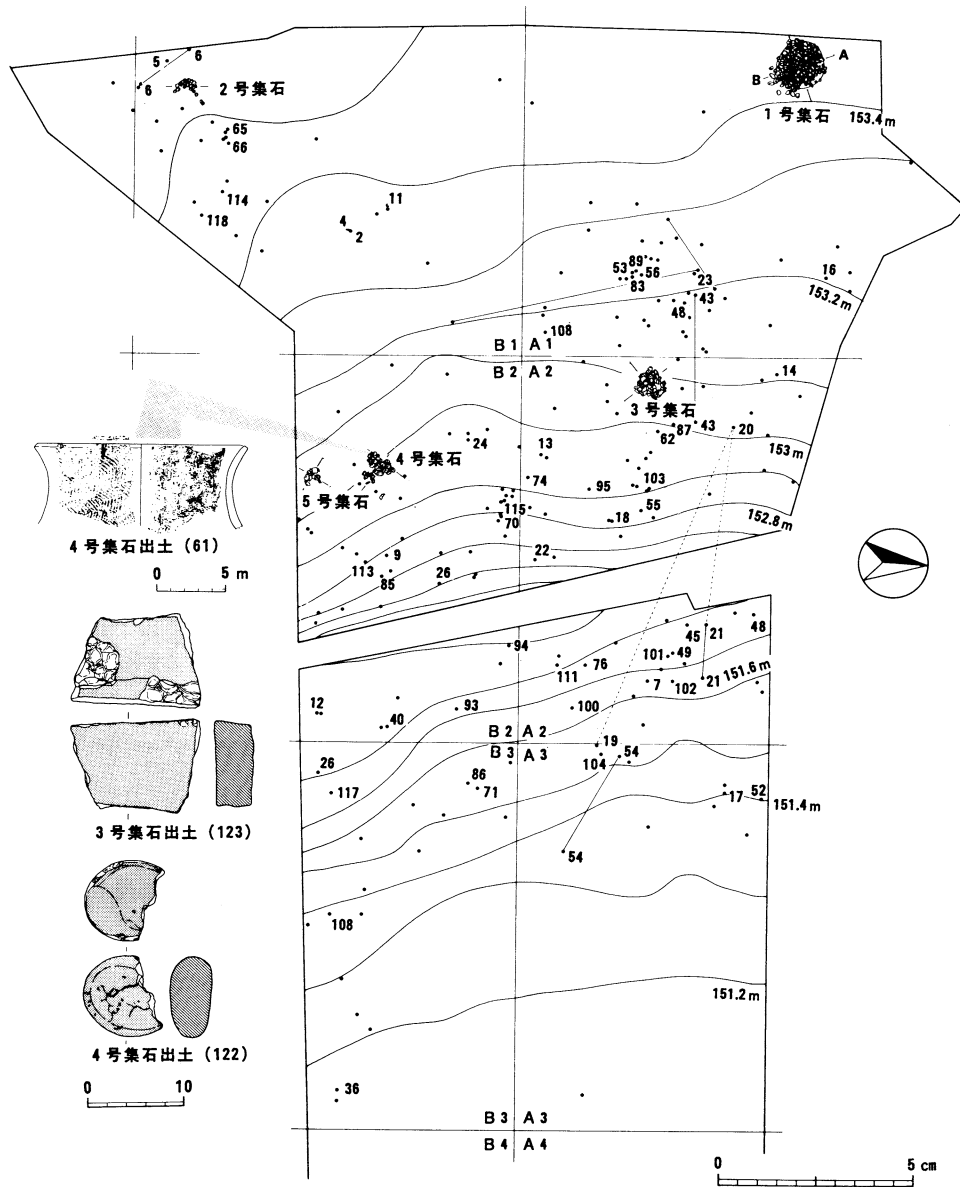
4 集石4号（第8図）

集石4号は、集石3号の畔東方向7mの位置で、2号から北北東方向11mに検出された。集石4号は、直径80cmの略円形状に礫石が検出されている。集石4号は直径90cm程度の円形プラン

ンが想定され、深さ20cm程度の掘り込みが残存する。集石を構成する石は、総数44個を数える。石材は、角礫も若干みられるが、ほとんどが安山岩や頁岩の円礫の河原石である。なお、集石4号の礫上から、山形押型文を施した比較的大型の土器片61が出土している。

5 集石5号 (第8図)

集石5号は、集石4号の東方向2mの位置で、2号から北北東方向11mに検出された。集石5号は、直径50cmの非常に小範囲の略円形状に礫石が検出されている。集石5号は総数わずか



第7図 IV層の集石遺構配置図とIV層遺物出土状態

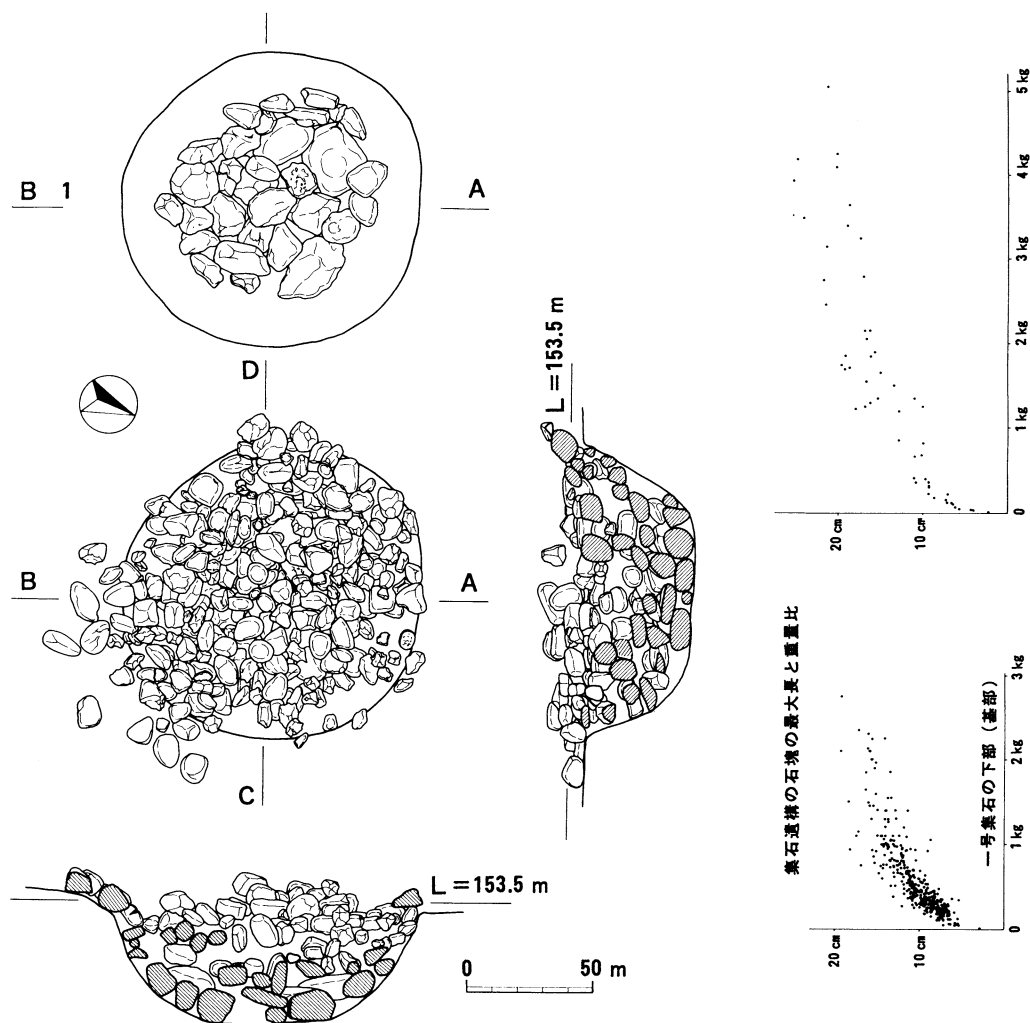
13個を数え、掘り込みも確認されるが、ほとんどが流出したことが考えられる。石材は、角礫も若干みられるが、ほとんどが安山岩や頁岩の円礫の河原石である。

第3節 IV層の出土遺物 (第12図～第20図)

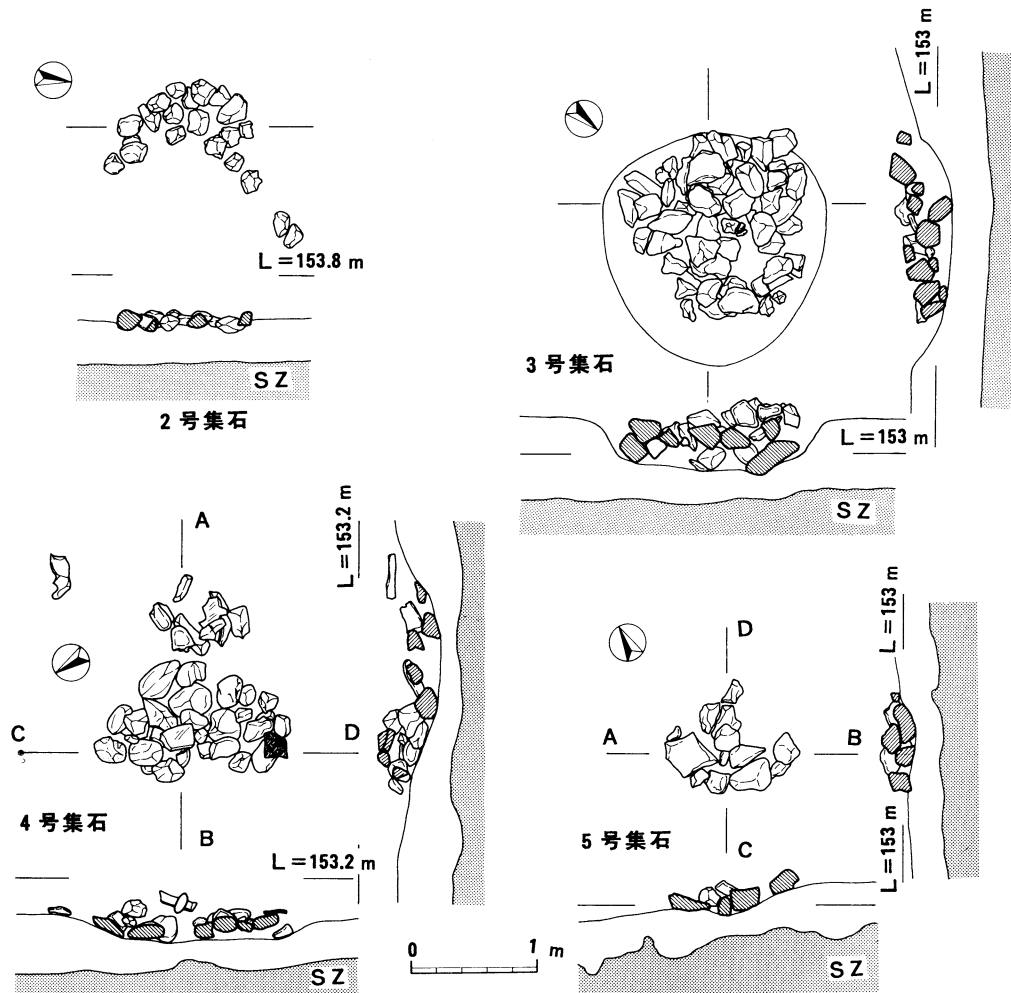
IV層の包含層は、A B 1区～A B 6区に広がる。その中でも、A・B 2区とA・B 6区の二ヶ所を中心として遺物が集中する。

1 土器 (第11図～第18図)

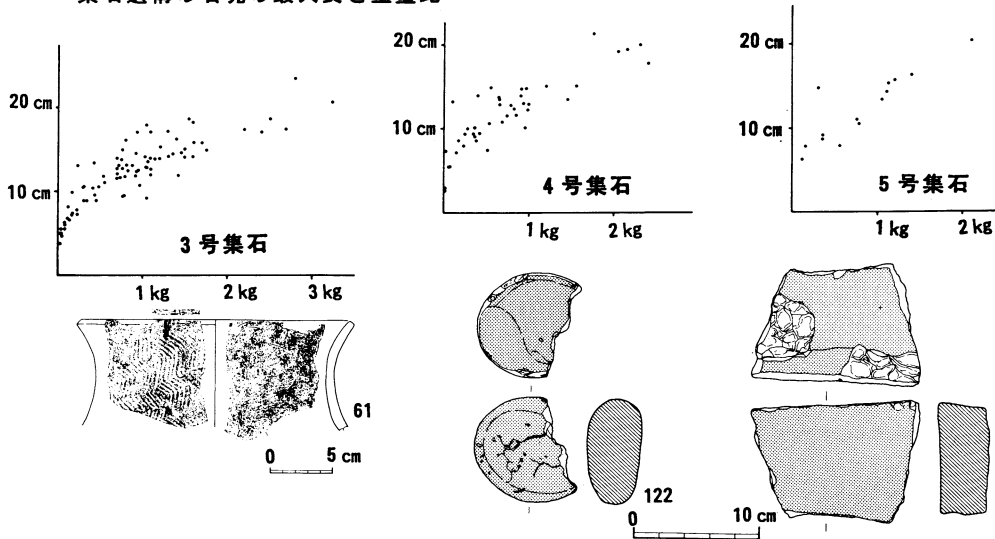
早期の出土土器は、大きくI類～III類に類別される。I類土器は平底の貝殻文系円筒形土器に該当し、II類土器の出土は少量であるが、いわゆる押型文土器に該当する。III類土器は手向



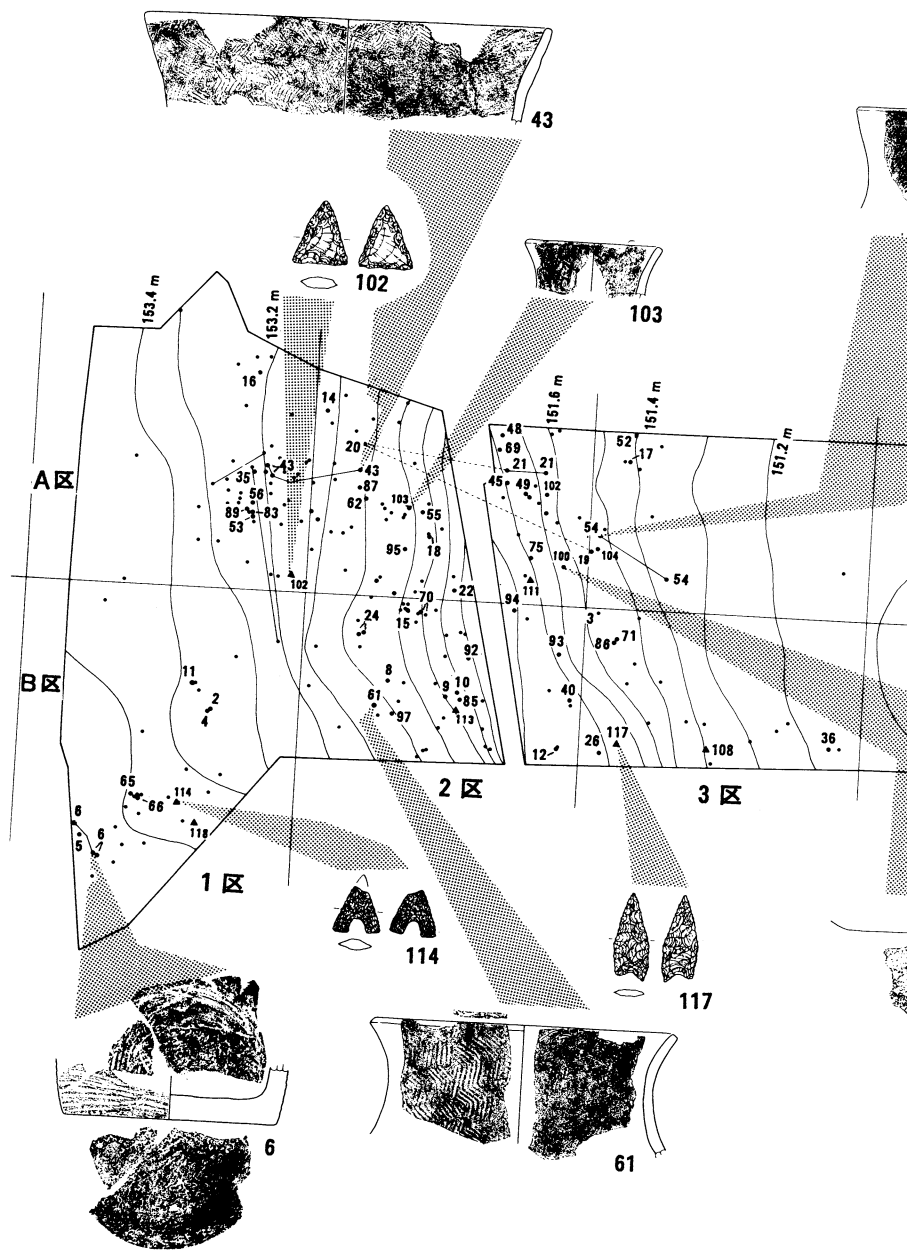
第8図 集石遺構実測図(1)

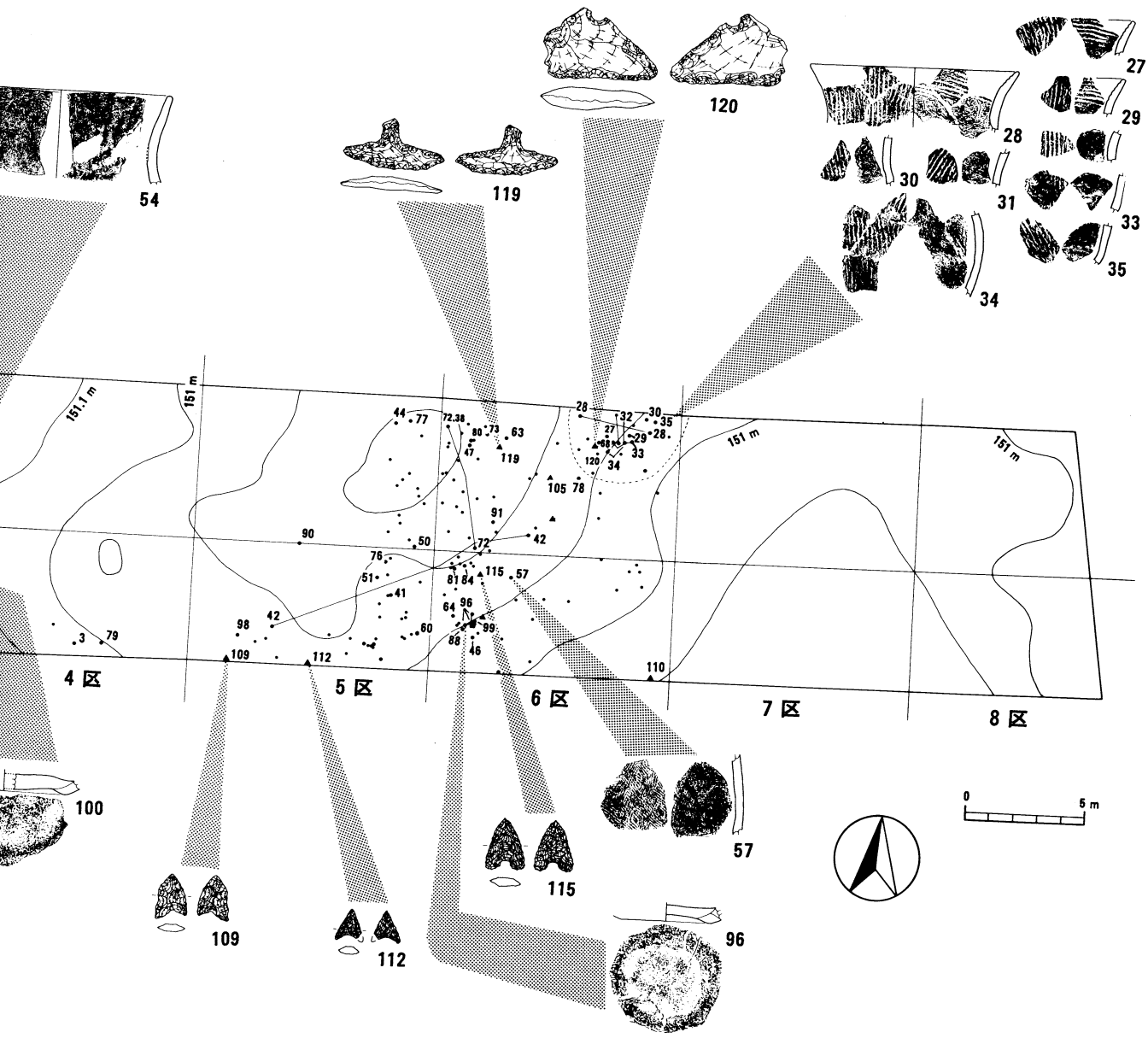


集石遺構の石塊の最大長と重量比



第9図 集石遺構実測図(2)





10图 出土遺物分布図

山式土器に該当する。

1) I 類土器 (第11図—1～6)

口縁部は直上に直行し、口唇部に羽状の貝殻刺突文を巡らす(6)。胴部は円筒を呈し、器厚は1cm内外と厚い。胴部器面には横位から若干斜位の丁寧な条痕を施す。内面は丁寧なナデ整形を施す(2～5)。6は底部片で底径15cmを測る。底部の器厚は1.8cmと厚い。器外面は側面下端まで横位の条痕を施す。

2) II 類土器 (第12図—7～9)

山形の刻目を強く施した押型文を施文するもので、その形態の違いからIII類土器とは区別した。7は口縁部片で若干外反し、内面にも山形文が僅かに残る。器外面には山形押型文が縦位に施文される。8～9は胴部片で、山形文が縦位から斜位に施文される。器厚は0.7～1cmと比較的厚い。

3) III 類土器 (第13図～第18図)

III類土器は、口縁部は大きく外反し、胴部が張って屈曲し、底部は上げ底の平底の器形を呈する。施文文様の組み合わせは各種見られるが、形態状の特徴から一括して取り扱い、a～に細分して説明する。

①III a 類土器 (第13図—10～15) 器外面に凹線文を施文するもので、羽状、弧状、鋸歯状に施す。13・14には、口縁部内面に数本を単位とする条痕文が施される。

②III b 類土器 (第13図—16～21) 器外面に短く丁寧な条痕文を横位に施文するタイプである。16・17の口縁部内面には、押型文土器にみられる条痕原体がみられる。

③III c 類土器 (第13・14図—22～26・37～41) 器外面に変形撚糸文を施文するタイプである。口縁端部はみられないが、24のように口縁外反部分はナデ整形がみられ、それ以下の内面はケズリ整形の仕上げである。

④III d 類土器 (第14図—27～36) 器外面に撚糸文を縦位に施文するタイプである。口縁内面にも横位の撚糸文が施される。27～35は同一固体と考えられる。

⑤III e 類土器 (第14図—42) 器外面に太めの撚糸文を施文するタイプである。

⑥III f 類土器 (第15・16図—43～67) 山形押型文を施文するタイプである。山形押型文は刻目が浅く間延びをしたタイプで縦位に施文される。43のように口縁内面に押型文を施文するものもみられる。また、口唇部平坦面にも同じ山形押型文を施文するものもある。

⑦III g 類土器 (第16図—68) 楕状の施文具で山形文状の文様を横位に施文するタイプで、極めて特殊である。

⑧III h 類土器 (第16・17図—69～91) 山形押型文の施文具を交互に反転し、菱形状の文様を施文するタイプである。

⑨III i 類土器 (第18図—101～104) 無文の土器を一括した。

⑩III j 類土器 (第18図—103) 無文で口縁部は外反し、口径9.7cmを測る。頸部は7.7cmに締まり、形状から壺形土器の口縁部と考えられる。

⑩底部（第18図—92～100） III類土器の底部片を一括した。底部は、いずれも上げ底を呈する。底部側面は、下端まで山形押型文等の文様が施文される。

2 石器（第19図）

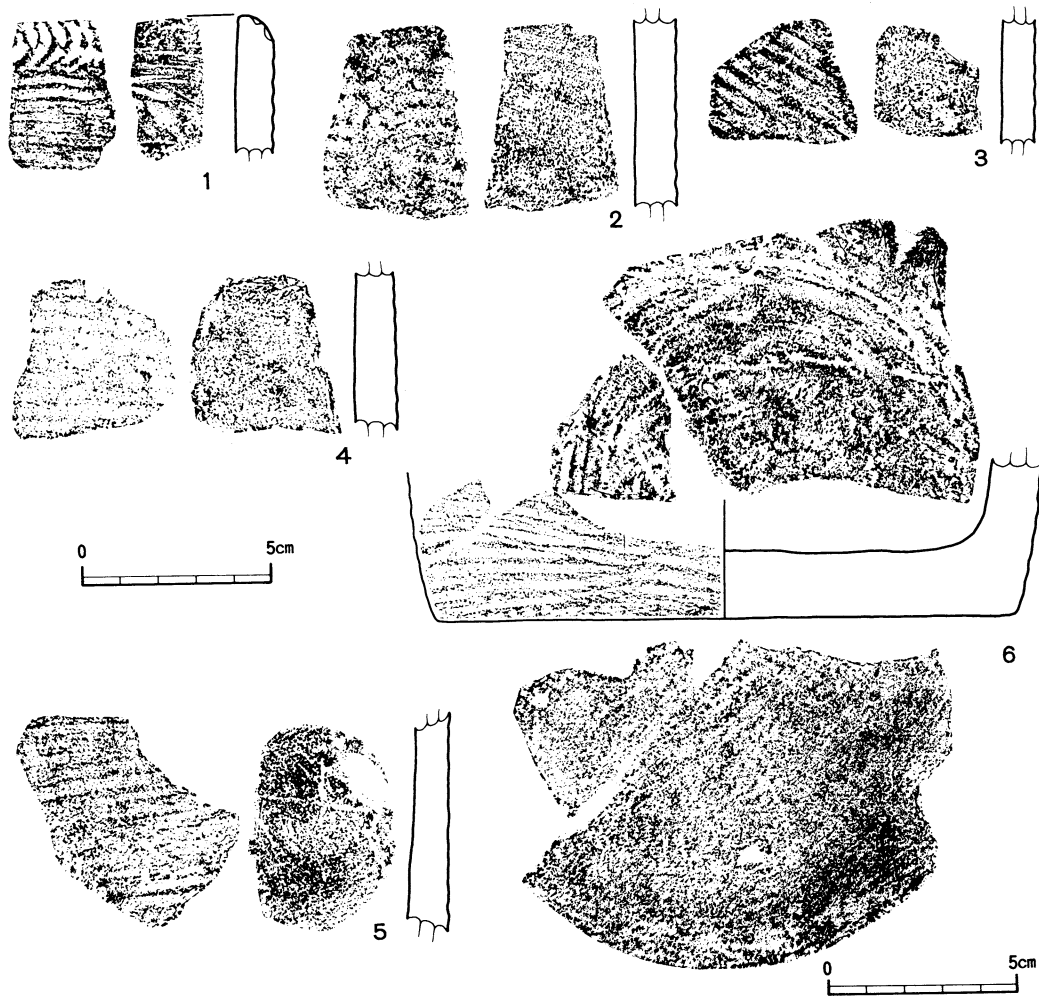
IV層からの出土石器は、石鏃13点、石匙2点、敲石1点、磨石1点、砥石状石器1点と不明石器1点があり、数量的には比較的少ない。ほとんどの石器が土器と共にIV層包含層の出土であるが、磨石と砥石状石器は集石遺構の礫内出土である。

105～117は、いずれも打製の石鏃である。105～107は平基式で、長さ2.5 cm×幅2 cmの三角形を呈する。108～112は基部を僅かに凹めるタイプで、長さ1.2 cmの小型のものから長さ2.5 cm程度の大型のものがある。113～116は、凹基式である。石材は黒曜石5点、チャート3点、タンパク石3点、頁岩と凝灰岩質シルト岩各1点である。

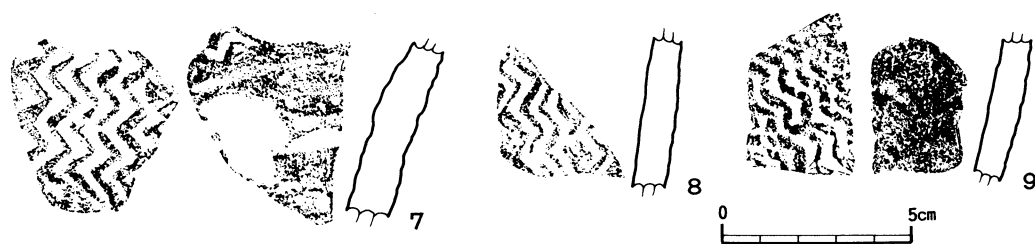
118は、石鏃状の交互剥離がみられるが、形態不明の石器である。石材はたんぱく石。

119・120は、いずれも横形の石匙である。119は、つまみ部は中央にあり、刃部は湾曲している。石材は、頁岩である。120は硅岩質で、つまみ部は幅広く刃部は直線的である。

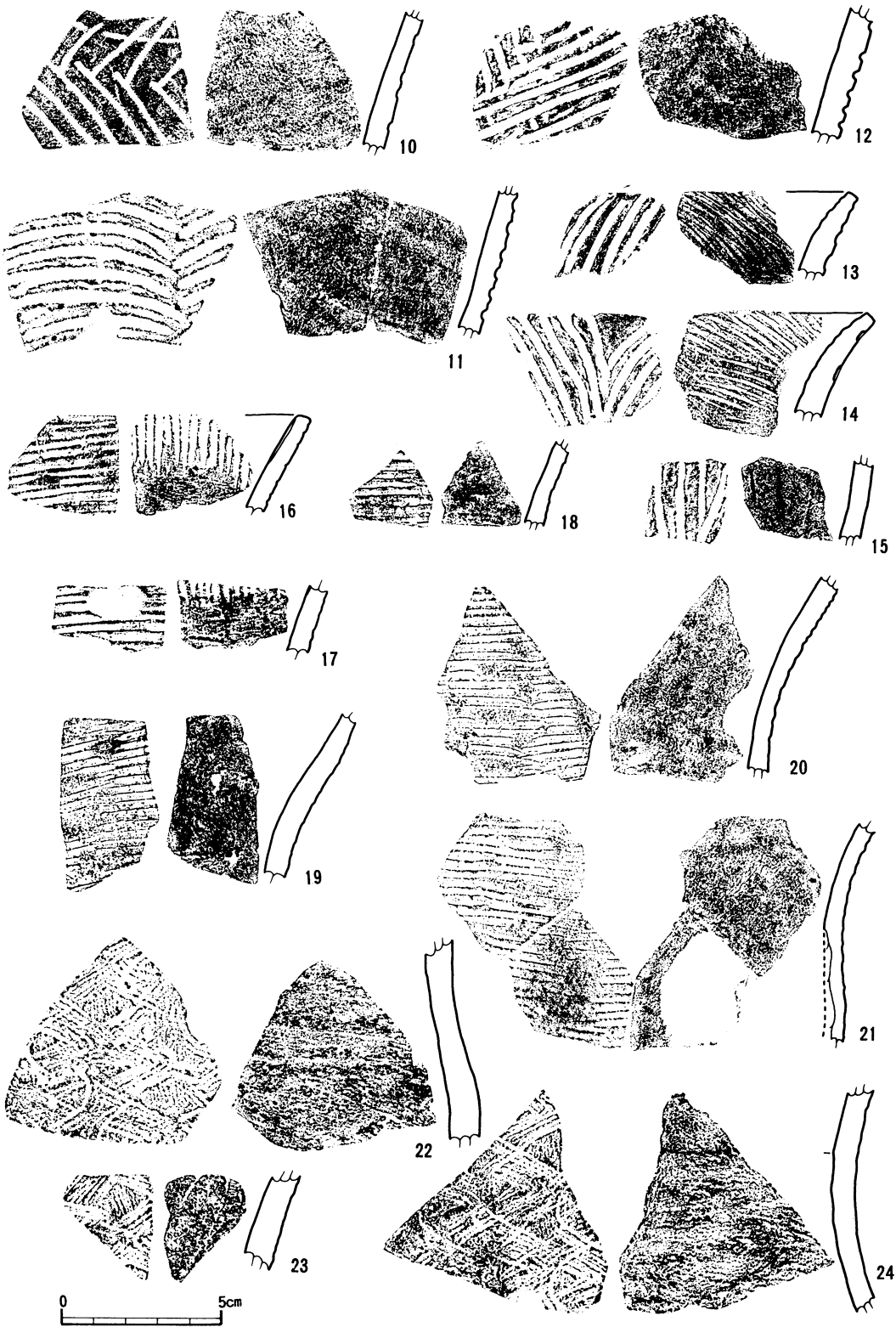
121は、砂岩製の敲石である。側辺の一ヶ所に敲打痕が確認されるが、中央には凹み部分もある。122は、安山岩製の磨石である。平面・側辺とも磨かれているが、側辺には敲打痕も確認される。集石4号の礫内出土である。123は破碎されて全体の形状は不明であるが、安山岩製の砥石状の石器である。表裏とも丁寧に磨かれている。集石3号の礫内出土である。



第11图 IV層出土遺物実測図(1)



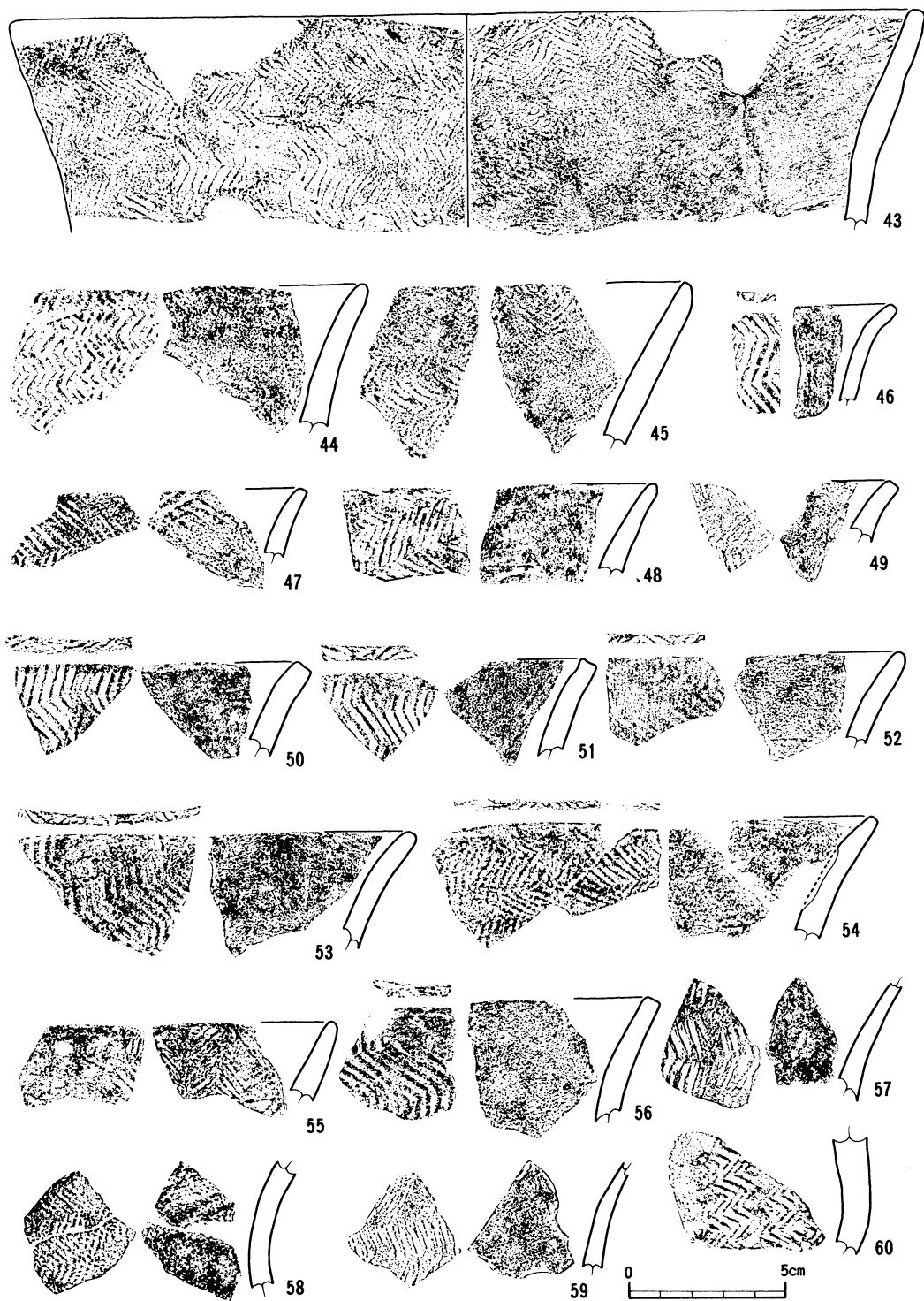
第12图 IV層出土遺物実測図(2)



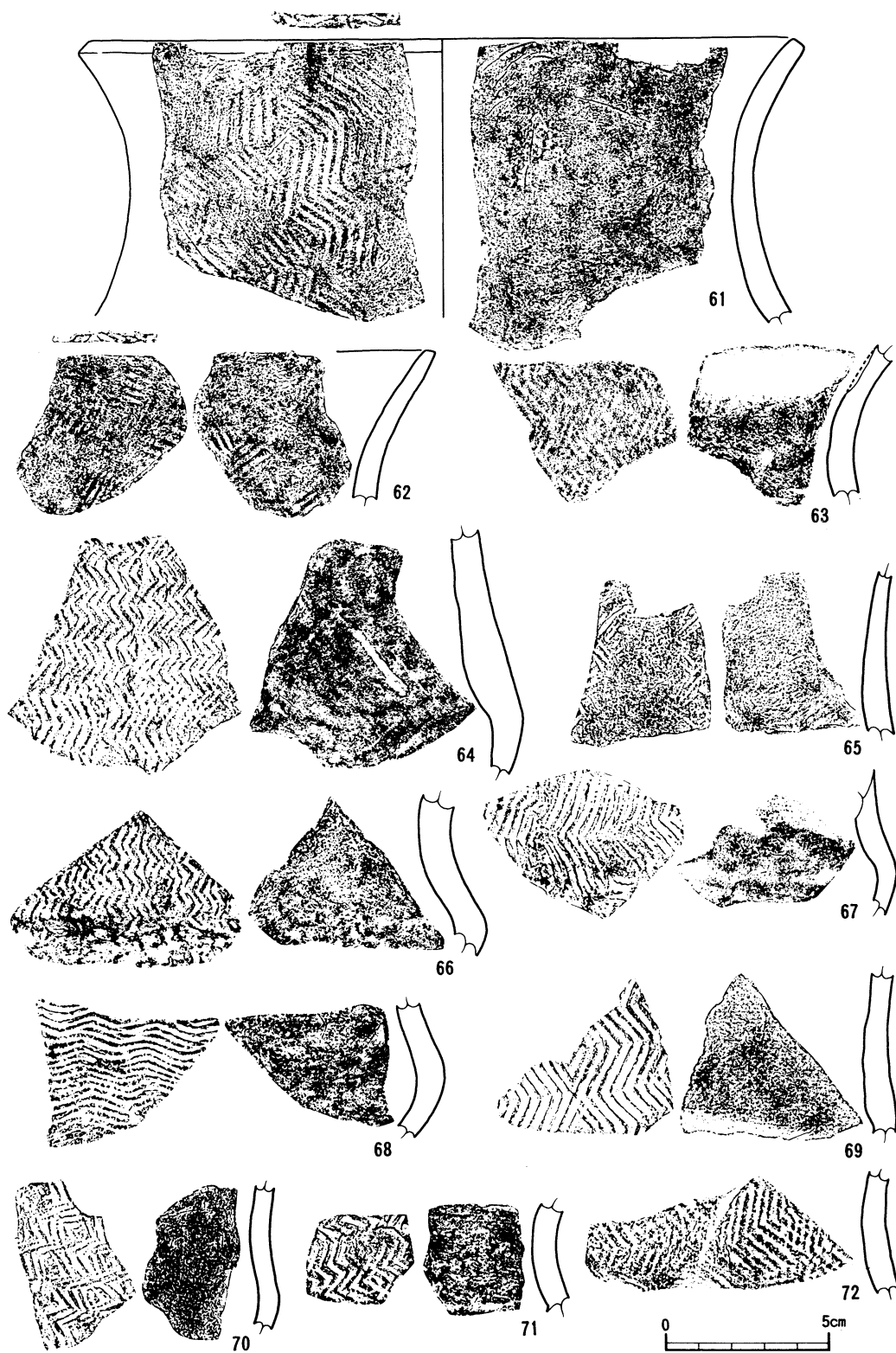
第13图 IV層出土遺物実測図(3)



第14図 IV層出土遺物実測図(4)

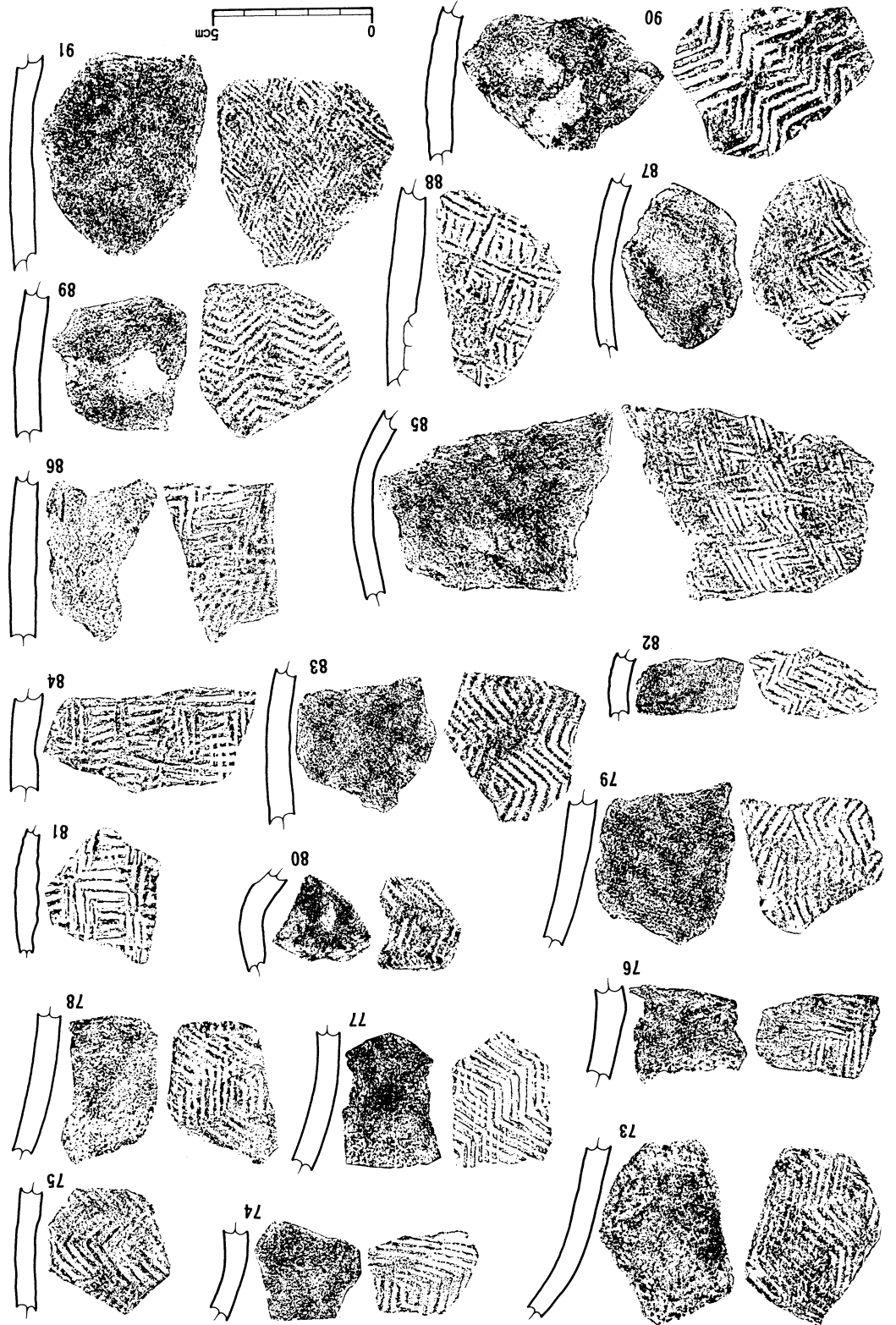


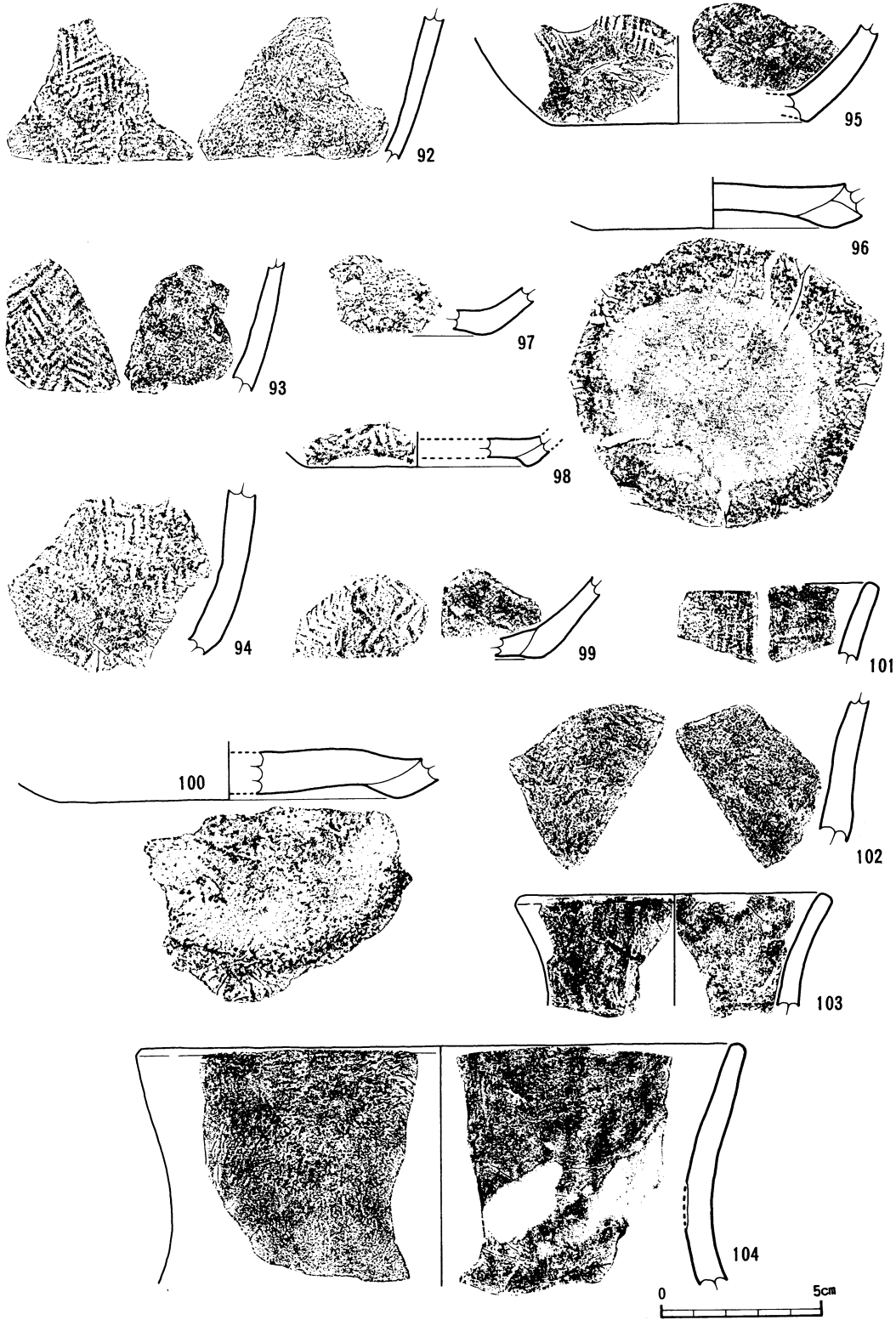
第15图 IV層出土遺物実測図(5)



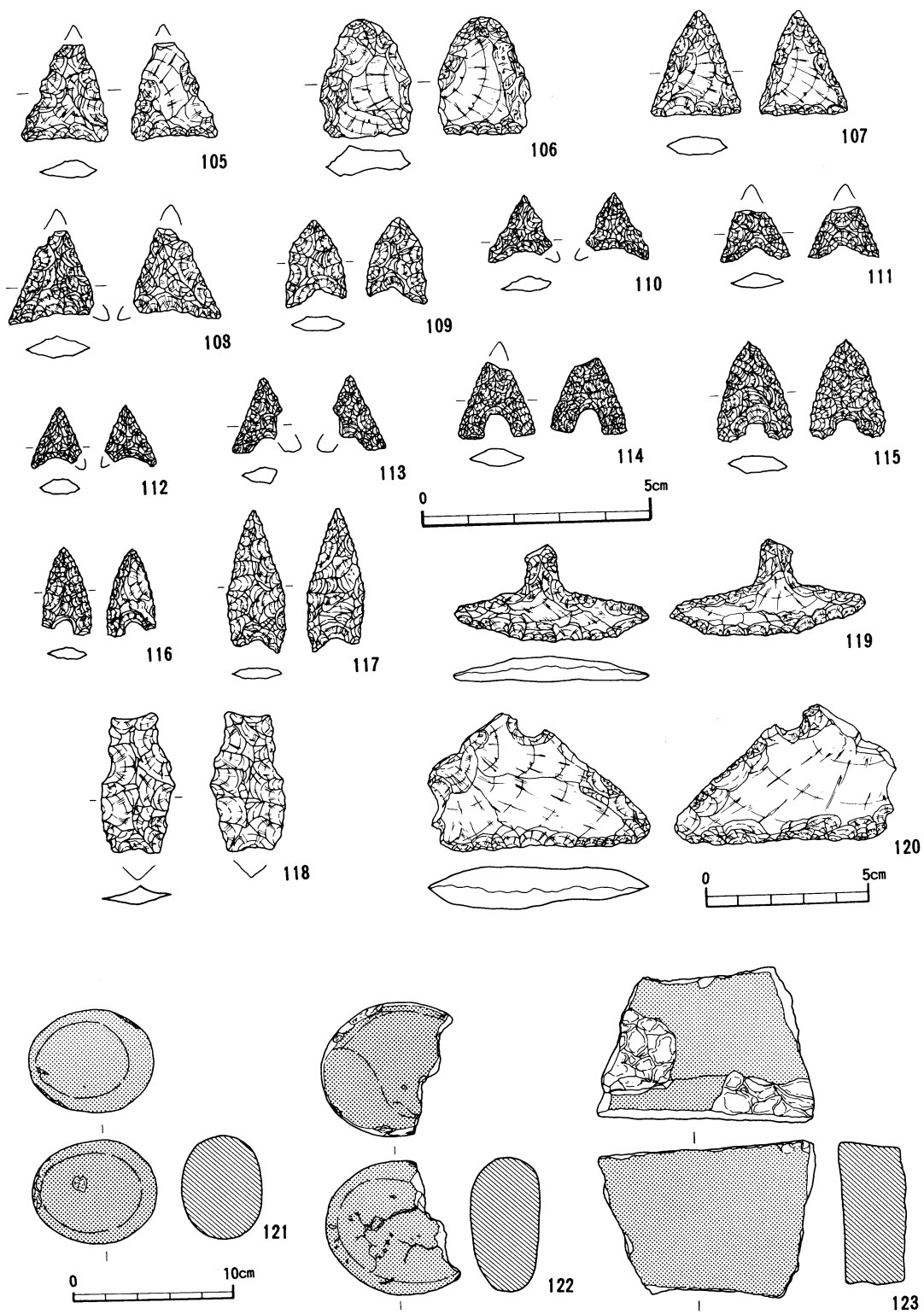
第16图 IV層出土遺物実測図(6)

第17图 IV層出土遺物美測図(7)





第18図 IV層出土遺物実測図(8)



第19图 IV層出土遺物実測図(9) (石器)

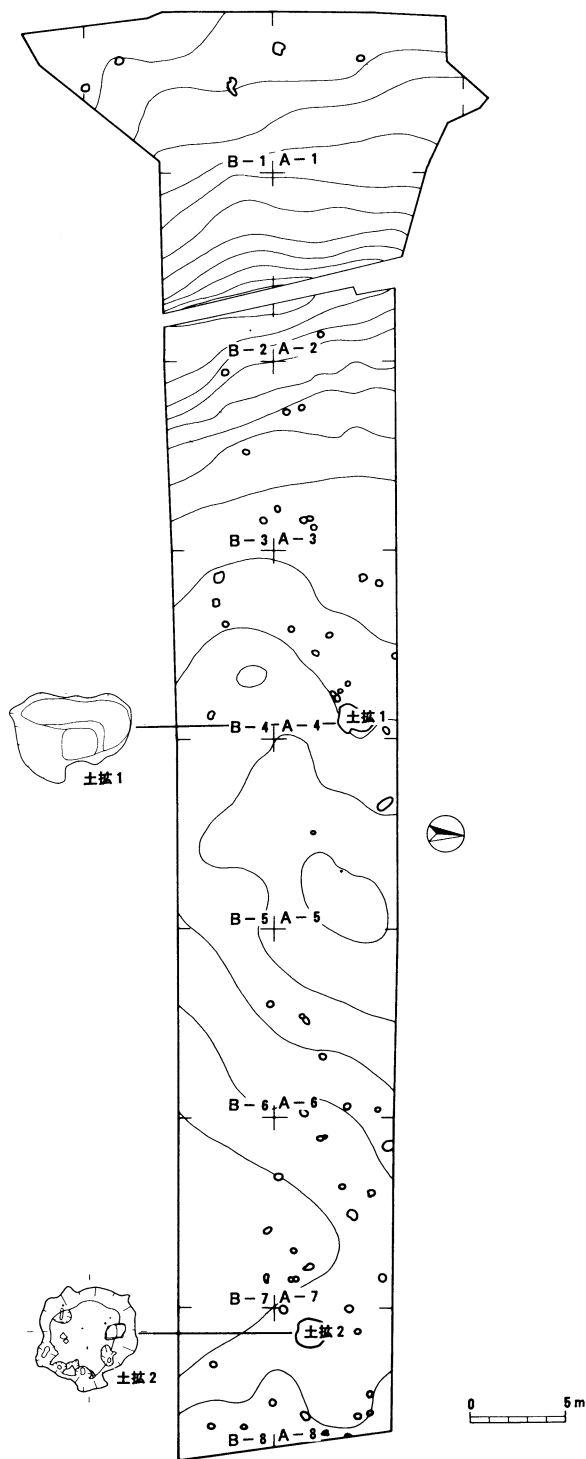
第IV章 Ⅲ層の調査

第1節 調査の概要

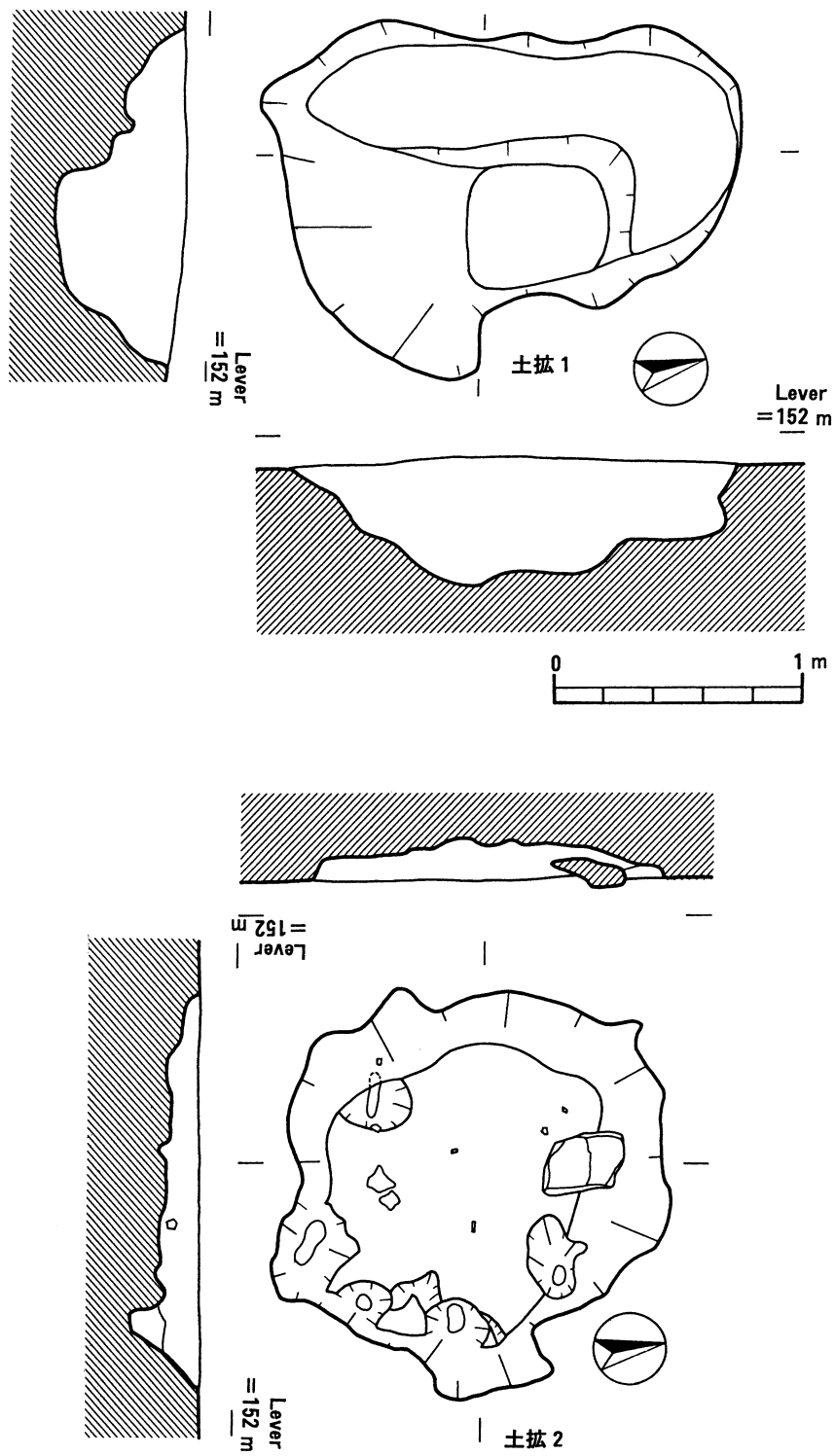
腐植アカホヤ火山灰層からなるⅢ層からは縄文前期・後期・晩期の土器や石器が出土した。これらの遺物の層位的な新古関係は明確につかめなかった。遺構検出作業は遺物出土完了後行ったが、ピット・土坑が検出された。

第2節 遺構

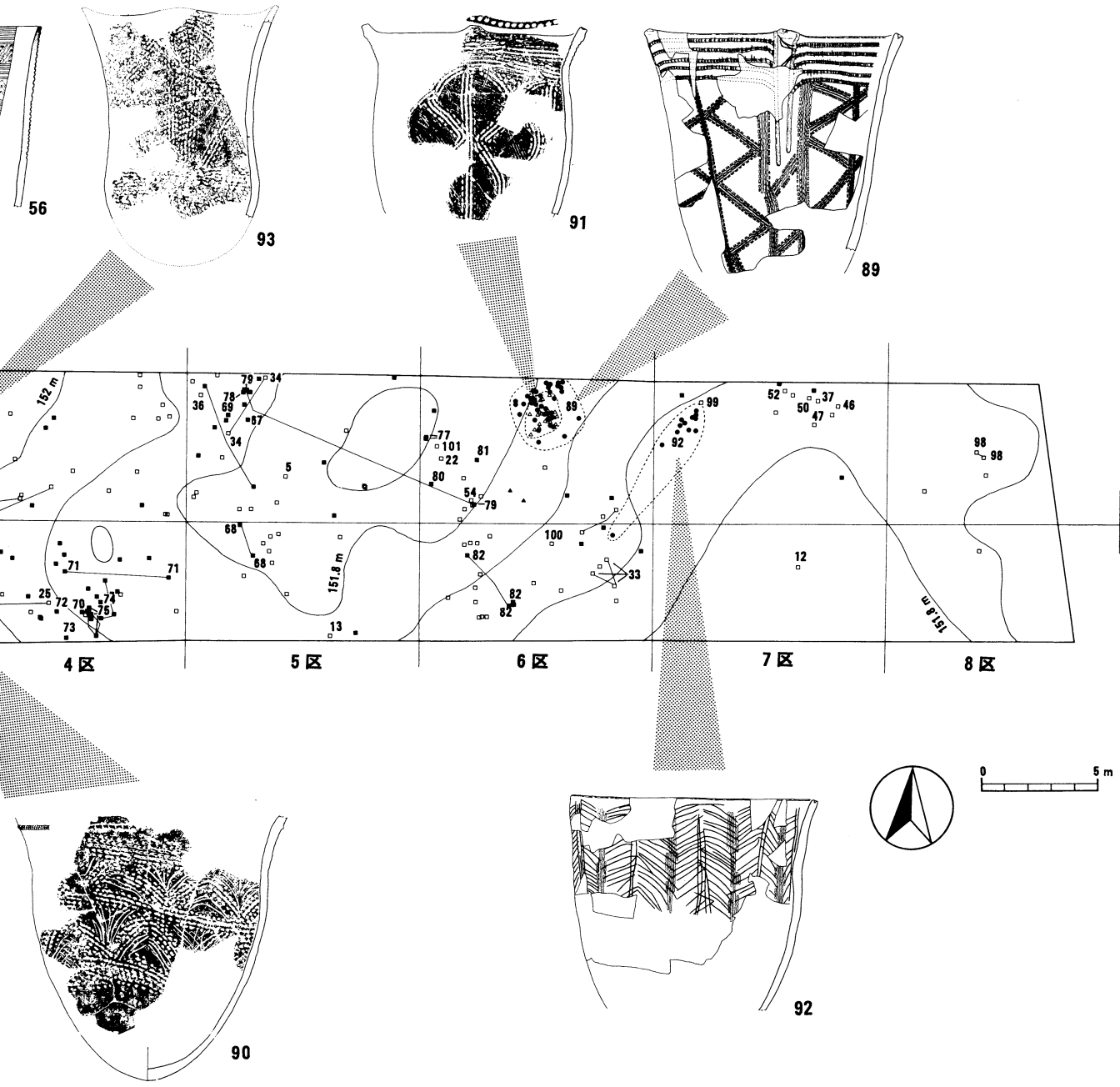
遺構は、ピット・土坑が検出された。A-4区で検出された不定形な土坑は炭化物をまだらに含む硬い暗茶褐色粘質土を埋土とし、断面も不定形である。時期ははっきりしない。A-8区で検出された土坑も不定形であるが、炭化物を含む暗茶褐色土を埋土とし、深さ15cm程を残す。埋土中には30cm程度の石や、市来式土器の口縁などがみられるが、小破片ながら黒色磨研土器の口縁を含んでおり、縄文晩期の一時期のものであると思われる。



第20図 Ⅲ層の調査範囲と遺構配置図



第21図 III層の遺構実測図



第22图 前期土器出土分布图

第3節 前期の出土遺物

Ⅲ層出土の土器は、前期該当の土器と後期該当及び晩期該当の三時期に分かれる。そのため出土土器(1)～出土土器(3)に分けて説明する。

1 出土土器(1)

Ⅲ層出土の前期該当の土器は、大きくⅠ類、Ⅱ類、Ⅲ類土器の三つに分けられる。そして、その三つの土器群は形態も異なるが、出土状態においても大きな違いがみられる。つまり、Ⅰ類とⅡ類土器は調査区全面に散乱した状態で分布し、Ⅲ類土器はほぼ完形に近い形に復元できる状態で個体ごとにまとまって出土している。

1) Ⅰ類土器 (第23図～第25図・第27図—1～55・83～86)

Ⅰ類土器は、沈線文を主体に文様を施文するものであるが、大きく二つに分けられる。短線文で曲線文、弧文、波状文、渦文、複合鋸歯文を描くもの(a類)や、口縁部付近に刺突文を羽状に連続して施文しそれ以下に横位の弧状の短線文連続するもの(b類)である。

第28図—83～86は、Ⅰ類土器に該当する底部片である。83・84の比較的小型の丸底と、85・86の大型の丸底がある。なお、底部面には、文様は施文されない。

①Ⅰa類土器 (第23図・第24図—1～34)

短線文で曲線文、弧文、波状文、渦文、複合鋸歯文を描くものである。

Ⅰa類の1～34は、口縁部から胴部にかけて沈線文で弧文や波状文や複合鋸歯文を描くものである。27は、曲線文を渦巻状に連続して施文する珍しいタイプである。口径17.5cmを測る小型の深鉢である。30はワン状の器形で、口径26.5cm、器厚7mm程度を測る。31～34は、複合鋸歯文を施文するタイプである。器内外面は、丁寧なナデ整形で仕上げる。いずれも胎土は軟質である。1・5は、補修孔が確認される口縁部片である。

②Ⅰb類土器 (第24図・第25図—35～55)

Ⅰb類の35～52は、口縁部上端付近に羽状の刺突文を横位に連続して施すものである。口唇部平坦面に刺突文を施文し、内面には羽状の刺突文を施文するものもある。このタイプは、口縁部の第一文様帯が羽状文の刺突文を施文し(刺突文は横位に三列施す)、それ以下胴部には48・51のように僅かに弧状を呈した短線文を横位に連続して施文する。53～55はその胴部片である。5もこのタイプに属することも考えられる。

2) Ⅱ類土器 (第25図～第27図—56～82・87・88)

Ⅱ類土器はⅠ類土器に文様構成は類似するが、基本的に異なる点は胎土に滑石を混入する点である。Ⅱ類土器も文様構成上、大きく二つに分けられる。口縁部に横位の沈線文を数条巡らし、それ以下に複合鋸歯文や羽状文を連続するもの(a類)と口縁部に羽状の刺突文をあるいは刺突文を数条巡らし、それ以下には短線文を横位にあるいは雷文や複合鋸歯文を連続するもの(b類)に分かれる。

なお、Ⅱ類土器に該当する底部は第28図—87・88で、比較的小型の丸底87と大型の丸底88がみられる。

①Ⅱa類土器（第25図・第26図—56～82）

56は、口縁部はほぼ直行する器形で口径30cm、器厚1cmを測る。底部は丸底を呈することが考えられる。口唇部は平坦面をつくり、斜位の刻目を施す。口縁内面は、無文である。外面の文様は、口縁部上端から4条の横位の沈線文帯を間隔をおいて3段に施文し、その2間には複合鋸歯文を施文する。それ以下は、僅かに弧状を呈した短線文を横位に連続して施文する。胴部中程から底部にかけては無文である。内外面とも丁寧なナデ整形で仕上げる。57～59は、横位の沈線文帯の下には比較的長い短沈線文で羽状文を施す。口縁部はいずれも直行するタイプで、内面はナデ整形である。

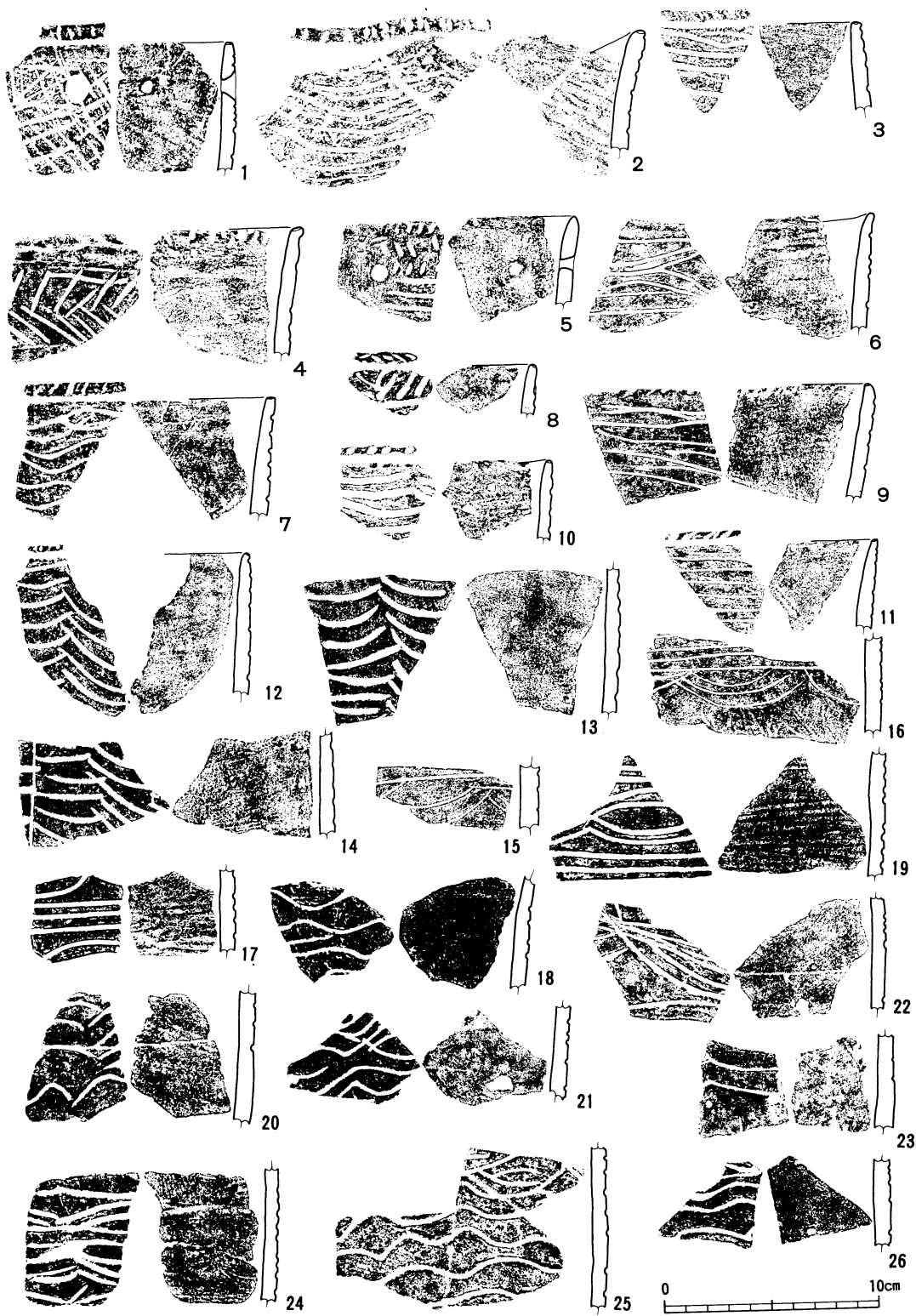
②Ⅱb類土器（第26図—62～82）

62～66・70・71は口縁部片で、刺突文を数条あるいは刺突文を羽状文に巡らし、それ以下には短線文を横位に施文する。67～69は、口縁部上端に3列施文するタイプで、それ以下は比較的長い短線文を横位に施文し、68はそれ以下は羽状文を施す。63～70の口縁部は、口縁端部は若干丸みを持ち、僅かに外反する。口縁内面には、刺突文を1列施文すものと羽状文に施文するものがある。62は口縁部は内傾するタイプである。72・73は口縁部近くの破片であるが、羽状文の刺突文下に三条の沈線文を巡らせさらに羽状文の刺突文を巡らせている。74～76は、羽状文の刺突文の下に比較的長い直線の短線文を巡らせる胴部破片である。77・78は雷文を施文する胴部片である。79～82は横位の沈線文間に複合鋸歯文を巡らせるタイプである。

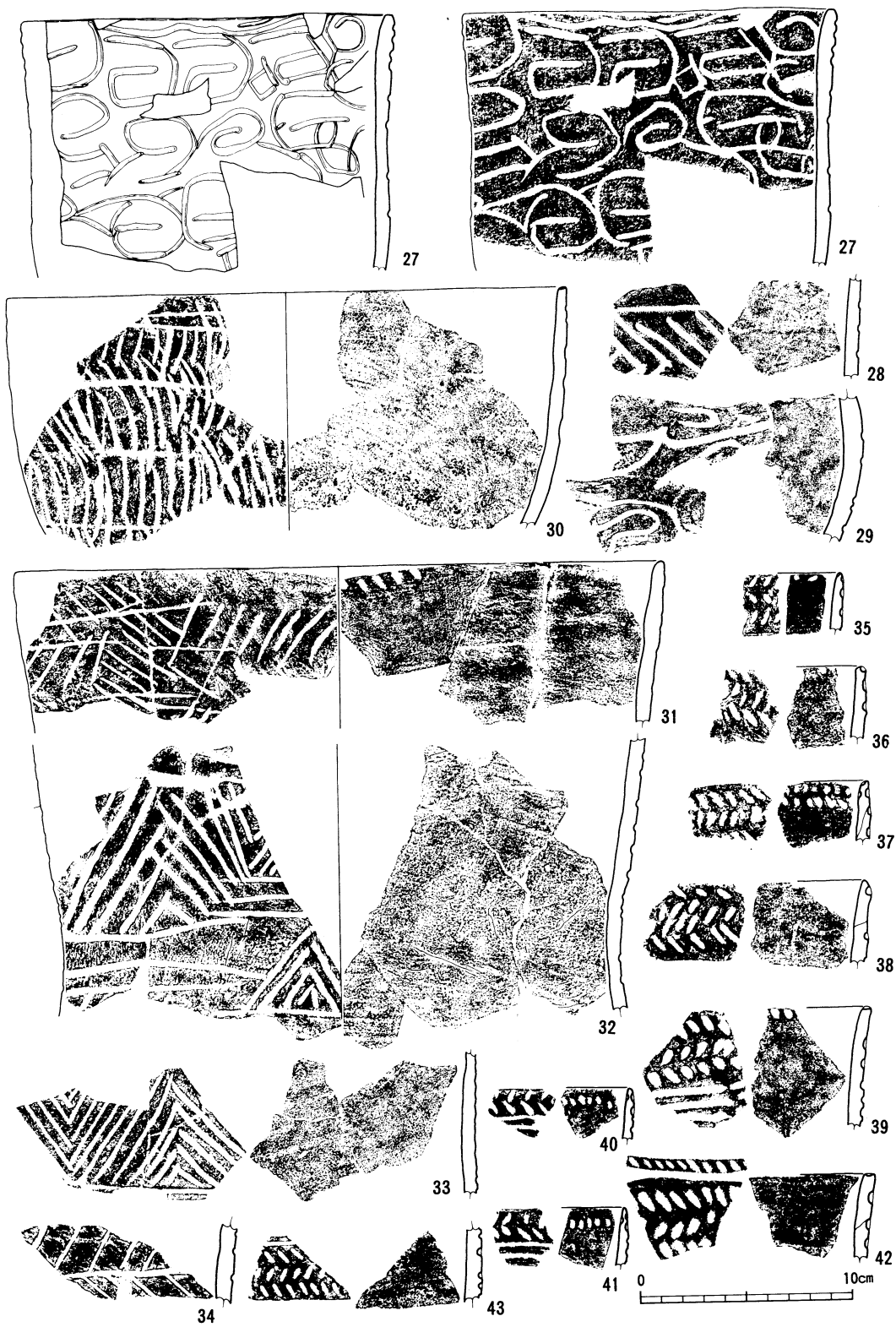
3)Ⅲ類土器（第28図～第32図—89～102）

Ⅲ類土器は、口縁部は外反し、胴部は少し膨らみ、底部は尖底に近い丸底を呈する器形である。器外面には貝殻施文具の押引連点文を共通の文様とし、突帯文や刻目突帯文、沈線文を組み合わせて施文するものである。そのほか95・97のように双交弧文を、100～102のように刺突文を施文するものもある。

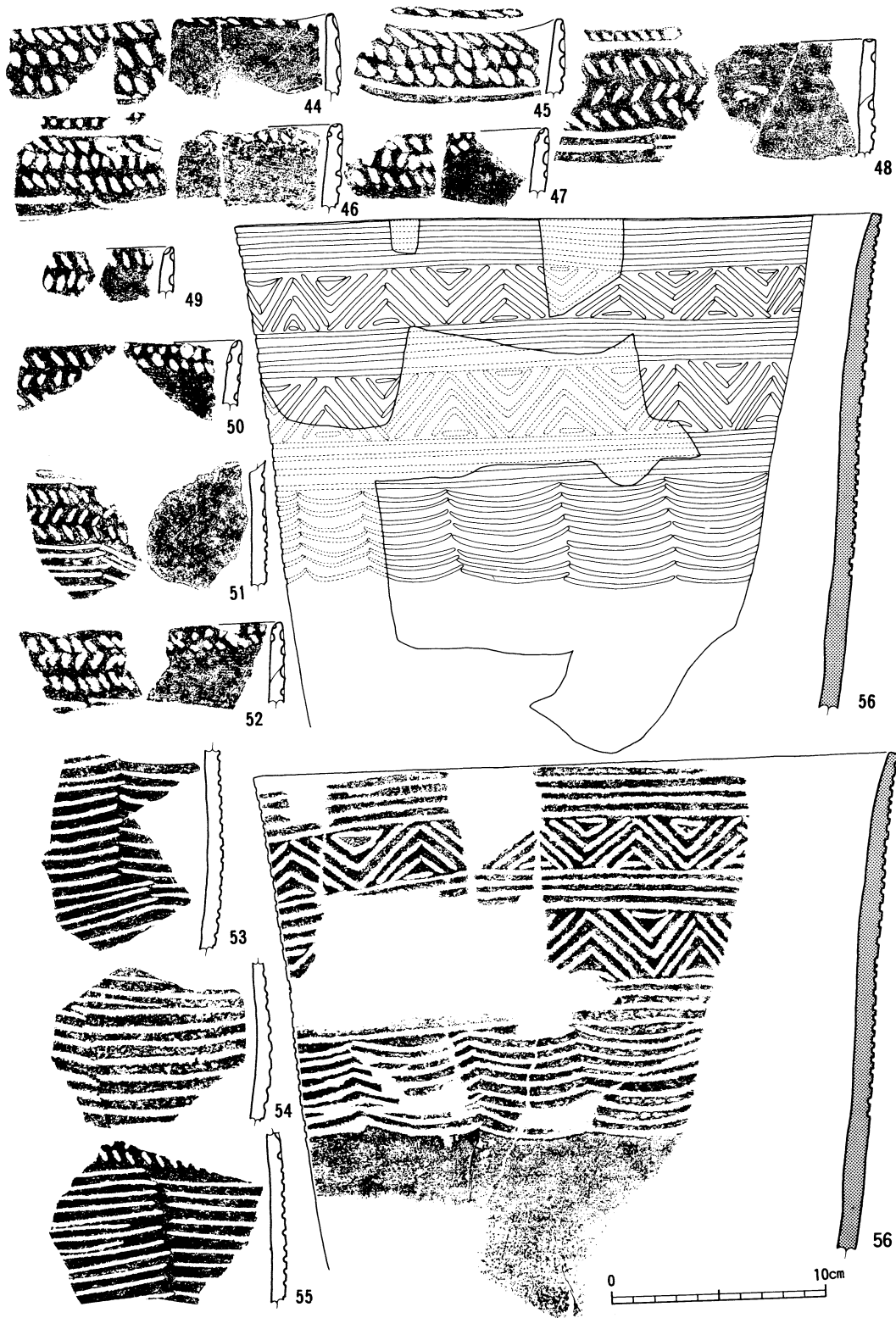
89は、完形に近いもので6A区に集中して出土した。口径33cm、現存高30.5cm、器壁厚は約1cmを測る。底部は丸底気味で、胴部は微妙に膨らみ口縁部は外反する。口縁部は4ヶ所が僅かに肥厚した波状口縁を呈し、肥厚部は杯状のくぼみをもつ。口唇部には刻目を施す。口縁部内面には、貝殻施文具による押引連点文が施文される。口縁部外面の肥厚した波頂部からは二本の突帯文が垂下して貼付される。その間には二本平行状に沈線を鋸歯状に施文する。この垂下突帯文から横位に、五条の突帯文が並行に貼付され、突帯文には刻目が施される。それ以下胴部には、貝殻押引連点文を縦位に施文し、その間には押引連点文で鋸歯状文を施文する。内面と外面の無文部は、貝殻条痕の器面調整痕が残る。



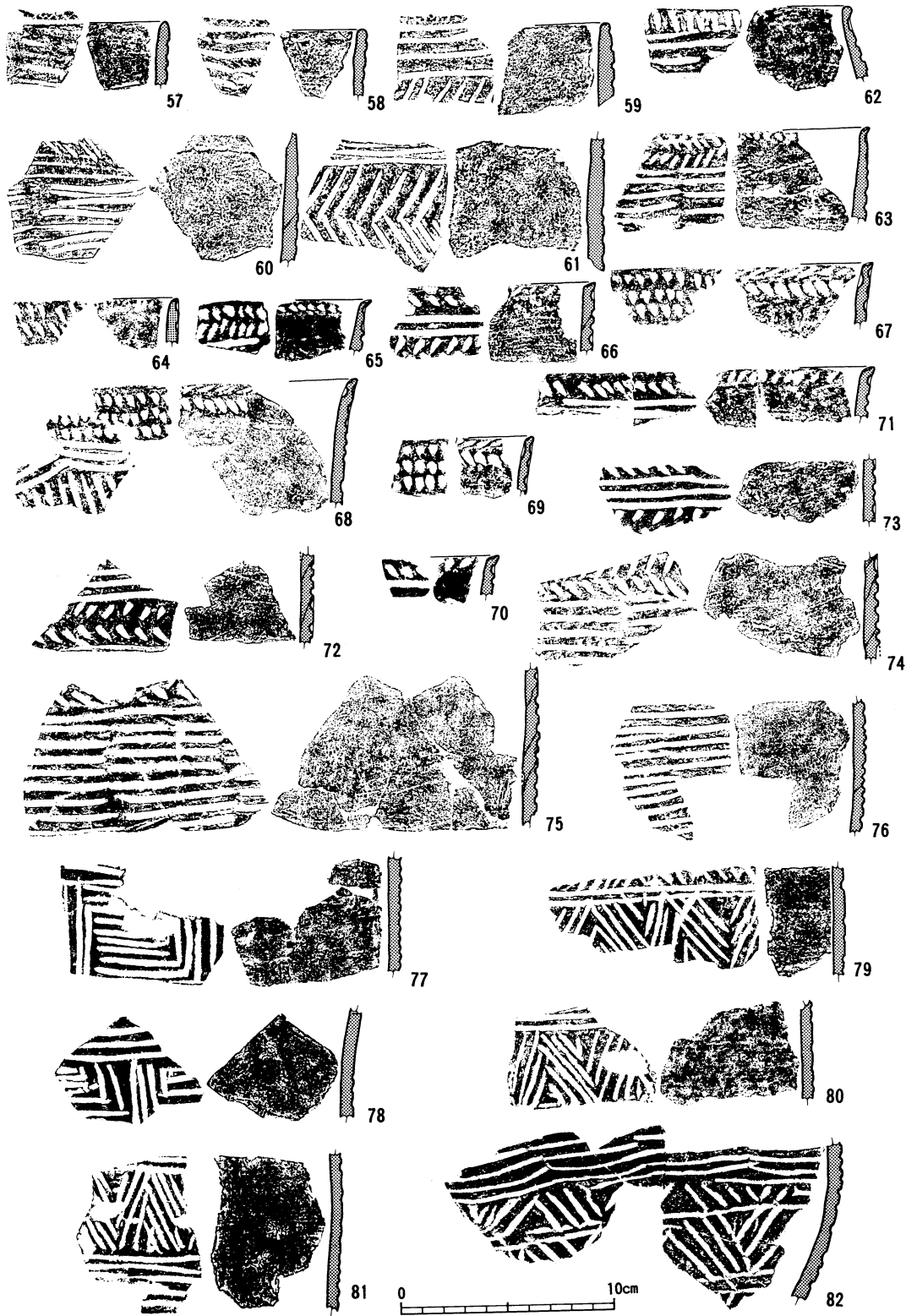
第23图 Ⅲ層（前期）出土土器実測図（1）



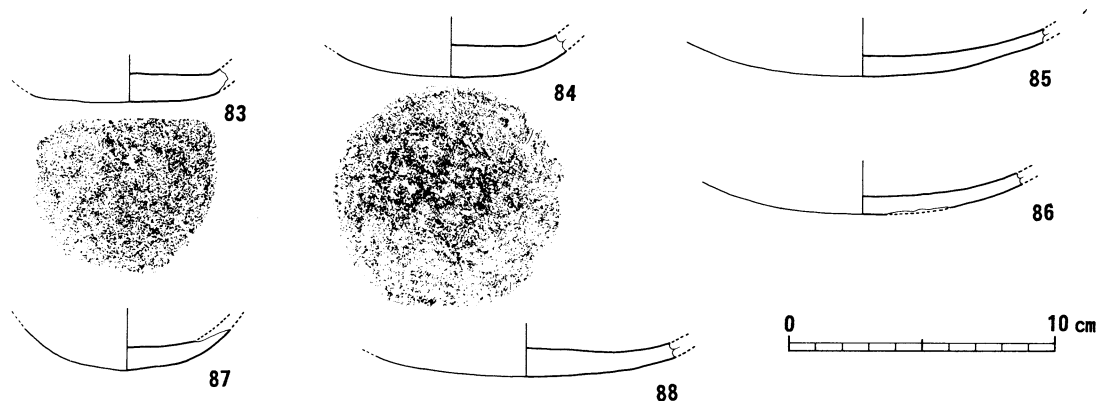
第24図 Ⅲ層（前期）出土土器実測図（2）



第25图 Ⅲ層（前期）出土土器実測図（3）



第26图 III層(前期)出土土器实测图(4)



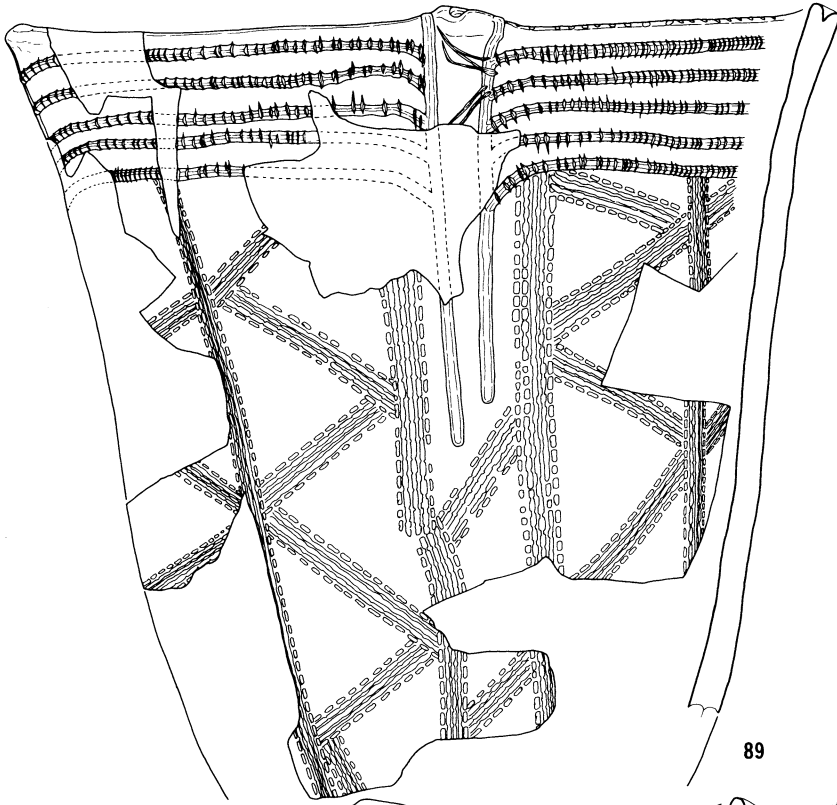
第27図 Ⅲ層（前期）出土土器実測図(5)

90は、これも完形品に近いもので3 B区に集中して出土した。口縁端部は欠損するが現存口径約35cm、現存高34cm、器壁厚は約1 cmを測る。底部は尖底状を呈し、胴部は僅かに膨らみ口縁部は外反する。口縁端部には、一条以上の刻目突帯文が横位に廻る。それ以下は貝殻押引連点文を間隔をおいて横位に巡らせ、その間には貝殻押引連点文を鋸歯状に施文し、その間の無文部には沈線文を描く。胴部下半から尖底状の底部は無文となる。口縁部外面に赤色顔料が付着している。

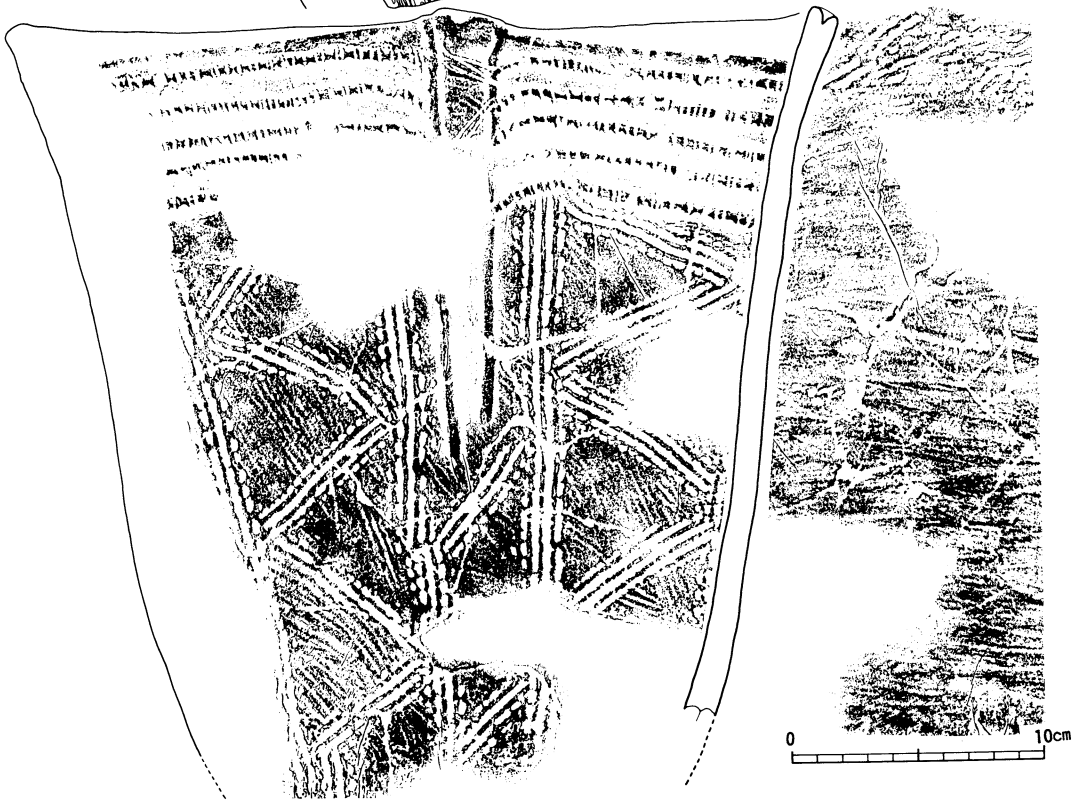
91は、完形品に近いもので6 A区に集中して出土した。底部は欠損するが口径約29cm、現存高25cm、器壁厚は約1 cmを測る。胴部は僅かに膨らみ、口縁部は外反する。口縁部は、4ヶ所に突起状に僅かに肥厚した波状口縁を呈する。口唇部の平坦面には、刺突文を連続して施文される。口縁部内面には、貝殻押引文を横位に施文する。外面の口縁部には貝殻押引文帯を二条横位に廻らせ、頸部から胴部にかけては縦位の貝殻押引文帯を間隔をおいて配し、その間は貝殻押引文を鋸歯文形に施文する。貝殻押引文帯間の無文部は、貝殻条痕の器面調整痕が確認される。

92は、完形品に近いもので7 A区に集中して出土した。底部は欠損するが口径約32cm、現存高27cm、器壁厚は約1 cmを測る。胴部は僅かに膨らみ、口縁部は僅かに外反する。口縁部は水平で、口唇部の平坦面には、刺突文を連続して施文される。口縁部内面には、貝殻押引文を頸部付近まで横位に施文する。外面の施文は、口縁上端から胴部上半まで施文され、胴部下半から底部は無文となる。貝殻押引文帯を間隔をおいて縦位に施文し、その間には沈線で二本～四本の縦位に沈線文を施文し、両側には綾杉状に沈線文を描く。口縁部外面に、赤色顔料が付着している。

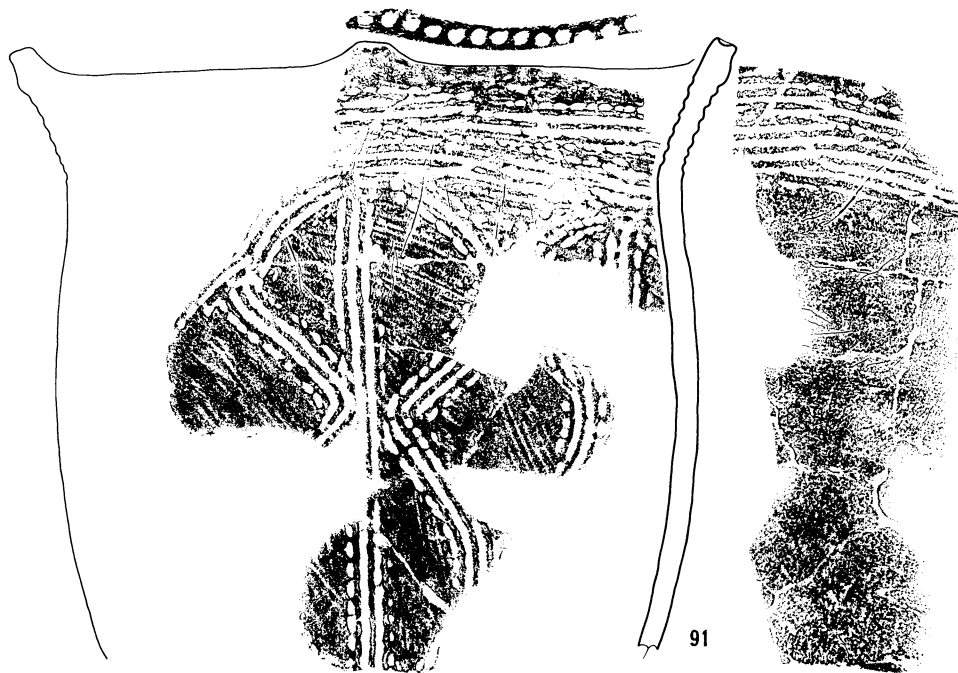
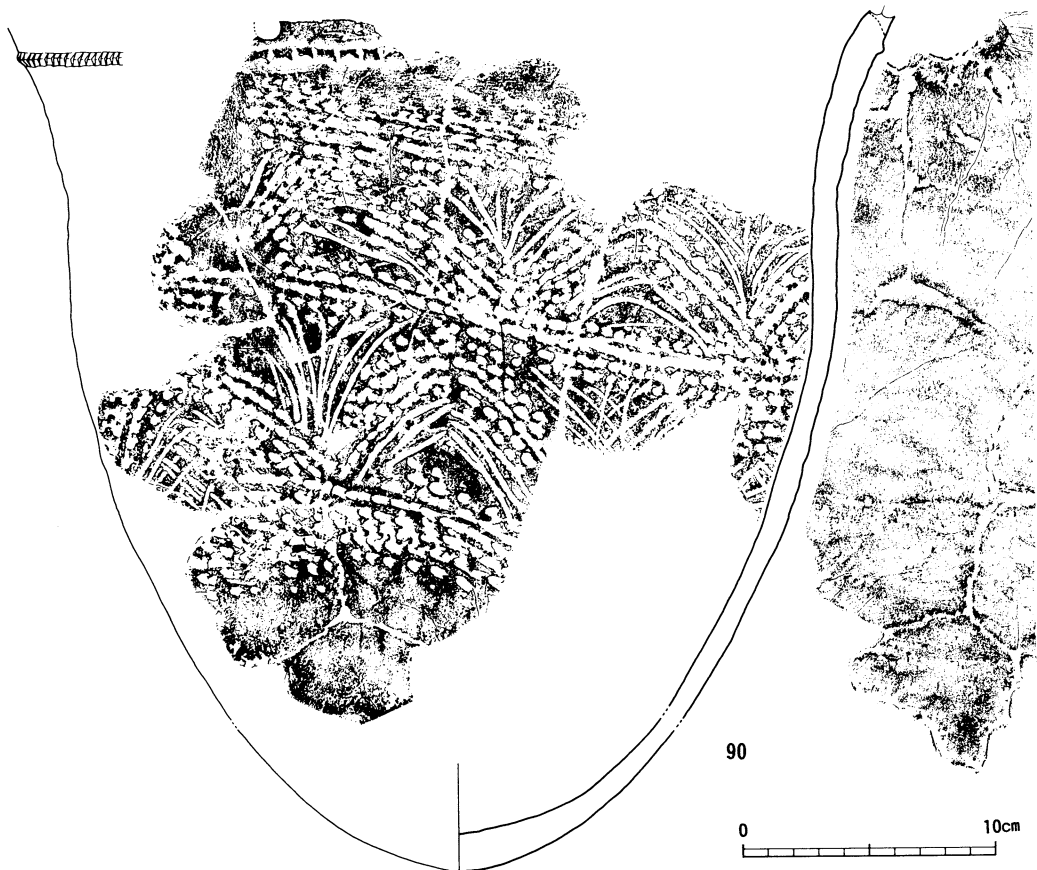
93は、底部は欠損するが完形品に近いもので3 A区～4 A区に集中して出土する。現存口径約26cm、現存高27cm、器壁厚は約9 mmを測る。胴部は僅かに膨らみ、口縁部は大きく外反する。底部は丸底を呈することが考えられる。口縁部は4ヶ所に大きな波状を呈す。口唇部の平坦面には貝殻施文具で刺突文を連続して施文し、口縁部内面は貝殻押引文帯を横位に施文する。外面の施文は、口縁上端から底部付近まで無文となる。貝殻押引文帯を間隔をおいて縦位に施文し、その間には貝殻押引文を鋸歯文形に施文する。貝殻押引文帯間の無文部は、ナデ整形の丁寧な器面調整痕がみられる。



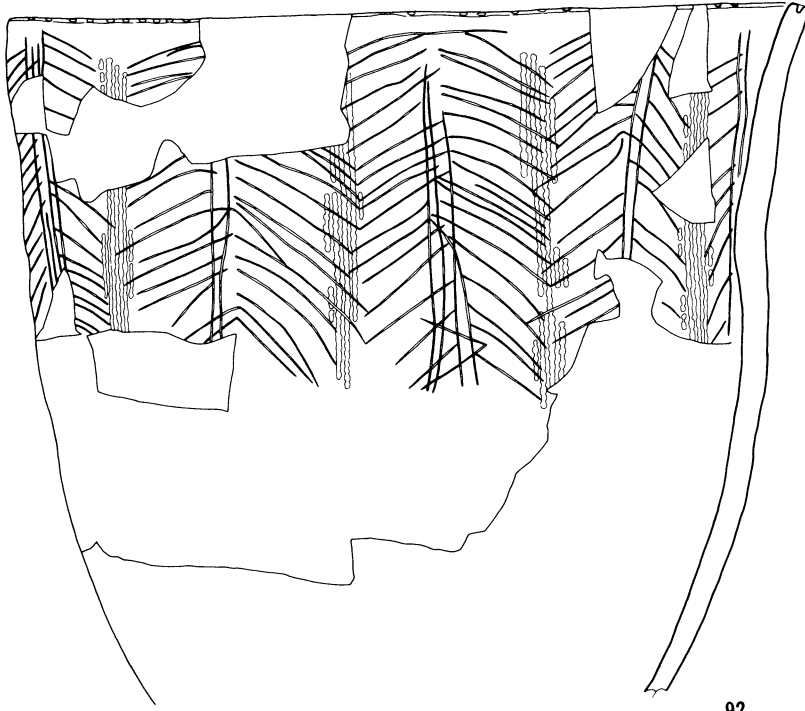
89



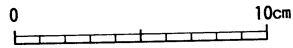
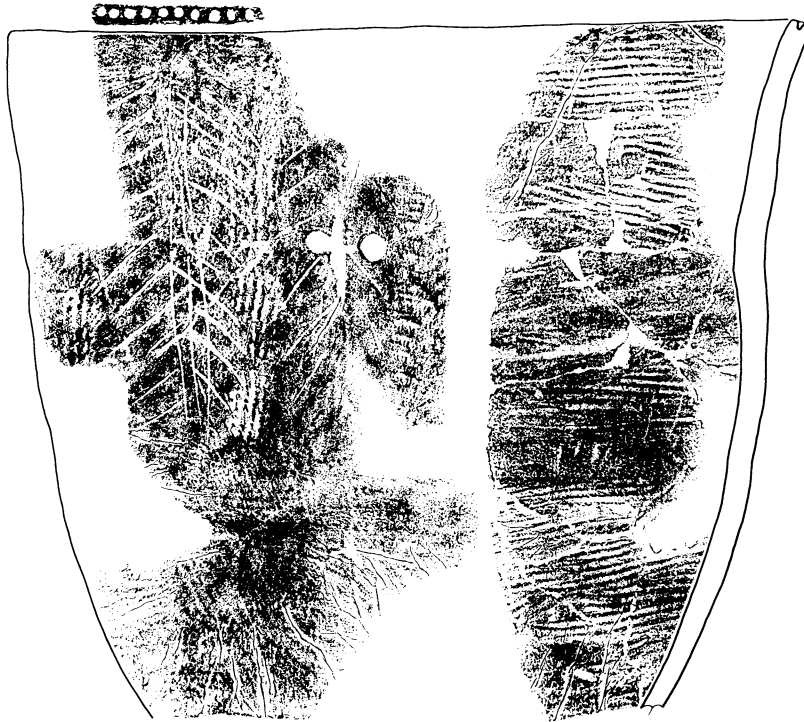
第28图 Ⅲ層（前期）出土土器実測图（6）



第29图 Ⅲ層（前期）出土土器実測図(7)



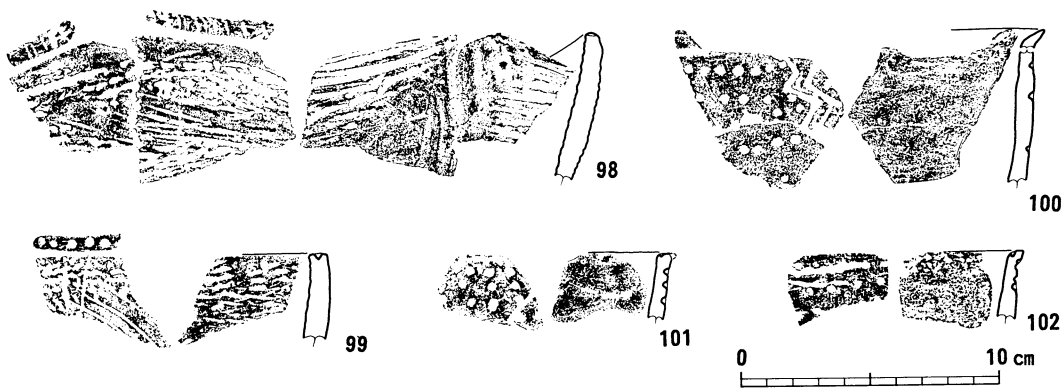
92



第30図 Ⅲ層（前期）出土土器実測図（8）



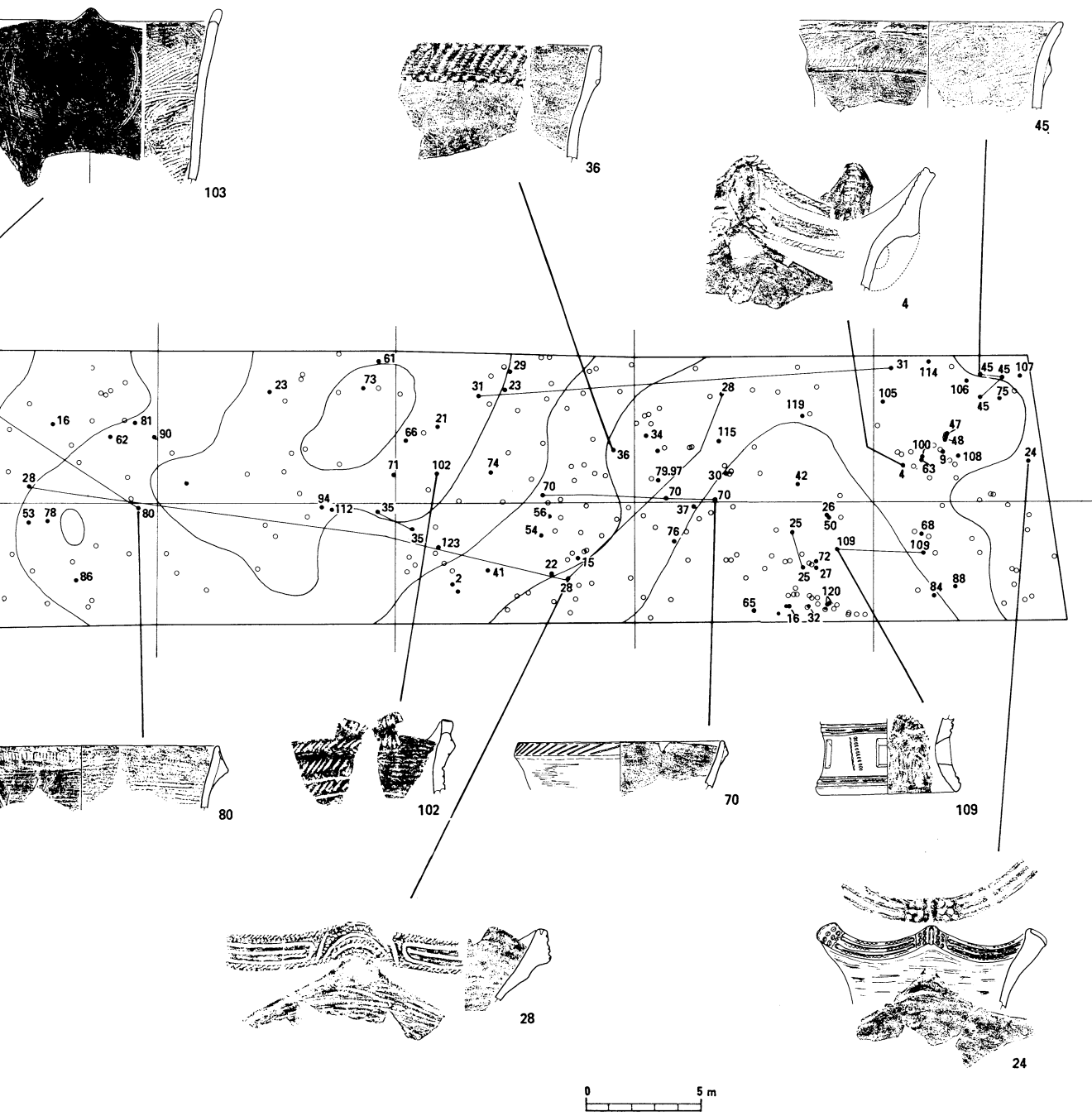
第31图 Ⅲ層（前期）出土土器实测图(9)



第32図 Ⅲ層（前期）出土土器実測図(10)

94～96は、器全面に貝殻押引連点文が施文されるタイプで、93と同様の文様と考えられる。94には補修孔がみられる。95・96の口唇部には貝殻施文具による刺突文が施される。97は双交弧文が施される胴部片である。98は波頂部分の破片であるが、内外面とも貝殻押引文が荒く施文され凹線文状になる。口唇部平坦面にはヘラ状の施文具の刻目が施文される。99は口縁部片で、口唇部平坦面に刺突文が施される。内面にも押引連点文が施文され、外面は上端に貝殻押引連点が横位に施文され、それ以下は沈線文が施文される。

100～102は、口唇部と口縁外面に刺突文を施文するタイプである。100は、口縁端部は短く外反して屈曲する。口縁部の器全面に刺突文を施すタイプであるが、その面に縦位の二本並行沈線で鋸歯状を施している。内外面とも丁寧なナデ整形で仕上げる。



第33図 縄文時代後期遺物出土状態

第4節 後期の出土遺物

Ⅲ層出土の後期該当の土器は、調査区のほぼ全面に万遍なく出土している。しかも、小破片が多く、土器型式数も少ない。

出土土器は、ほぼ同一型式の一群が主体を占め、他に二・三片の別型式の土器片がみられる程度である。底部は、一括した。出土土器は便宜的に下記のように分けた。

(1) 主体となる土器 (第34図—1～第38図—99)

口縁部が「く」字に屈曲し、その部分が肥厚して文様が施文される。いわゆる市来式土器に該当するものである。文様の組み合わせは、下記のように分かれる。1) 比較的太形の凹線文に、ヘラ状の刺突文・竹管状の刺突文・貝殻腹縁の刺突文を組み合わせるもの。2) 竹管状の刺突文・貝殻腹縁の刺突文を組み合わせるもの。3) 貝殻腹縁の刺突文やヘラ状の刺突文を単独に連続して施文するものに分かれる。

1) 比較的太形の凹線文に、ヘラ状及び竹管状や貝殻腹縁の刺突文を組み合わせるもの。(第34図—1～第36図—33)

肥厚口縁部の上、下段にヘラ状刺突文を施文し、その間に太形の凹線文を横位に施文する。口縁部は山形の波状を呈し、波頂部には刺突文や貝殻刺突文で主文様を施文する。4や20のように橋状把手を貼付するものもある。

2) ヘラ状及び竹管状や貝殻腹縁の刺突文を組み合わせるもの。(第36図—34～49)

肥厚口縁部の上、下段にヘラ状刺突文を施文し、その間に貝殻刺突文を斜位に連続して施文する。貝殻刺突文は、密に施文するものと間隔をあけて施文するものがある。

3) 貝殻腹縁やヘラ状での刺突文を単独に施文するもの。(第37図—50～第38図—99)

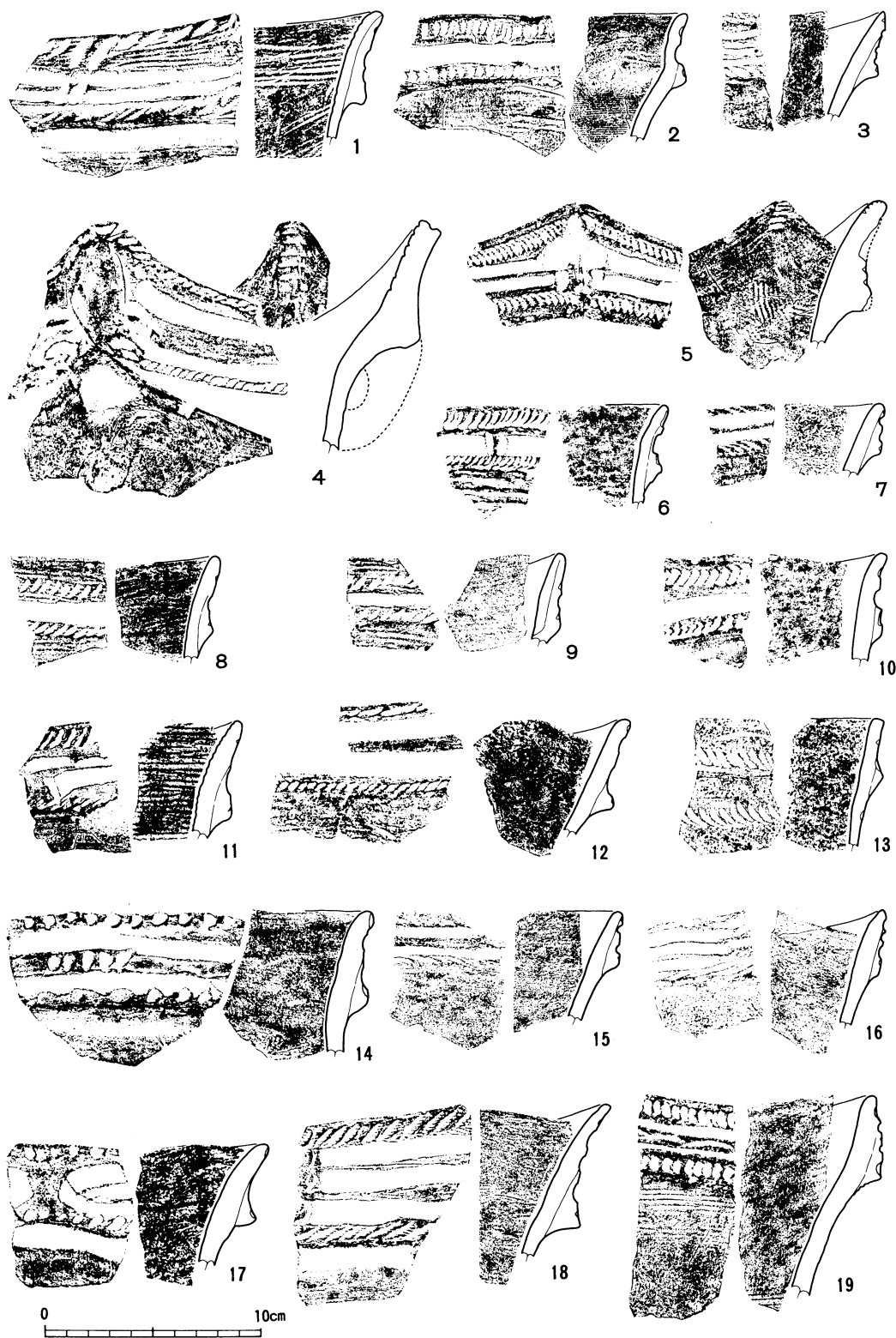
肥厚口縁部に連続して刺突文を施文するもので、貝殻腹縁刺突文は肥厚部全面に斜位の刺突文が施されるが、79のようにヘラ状の刺突文は中央に横位に連続して施文される。

(2) その他の土器 (第39図—100～108)

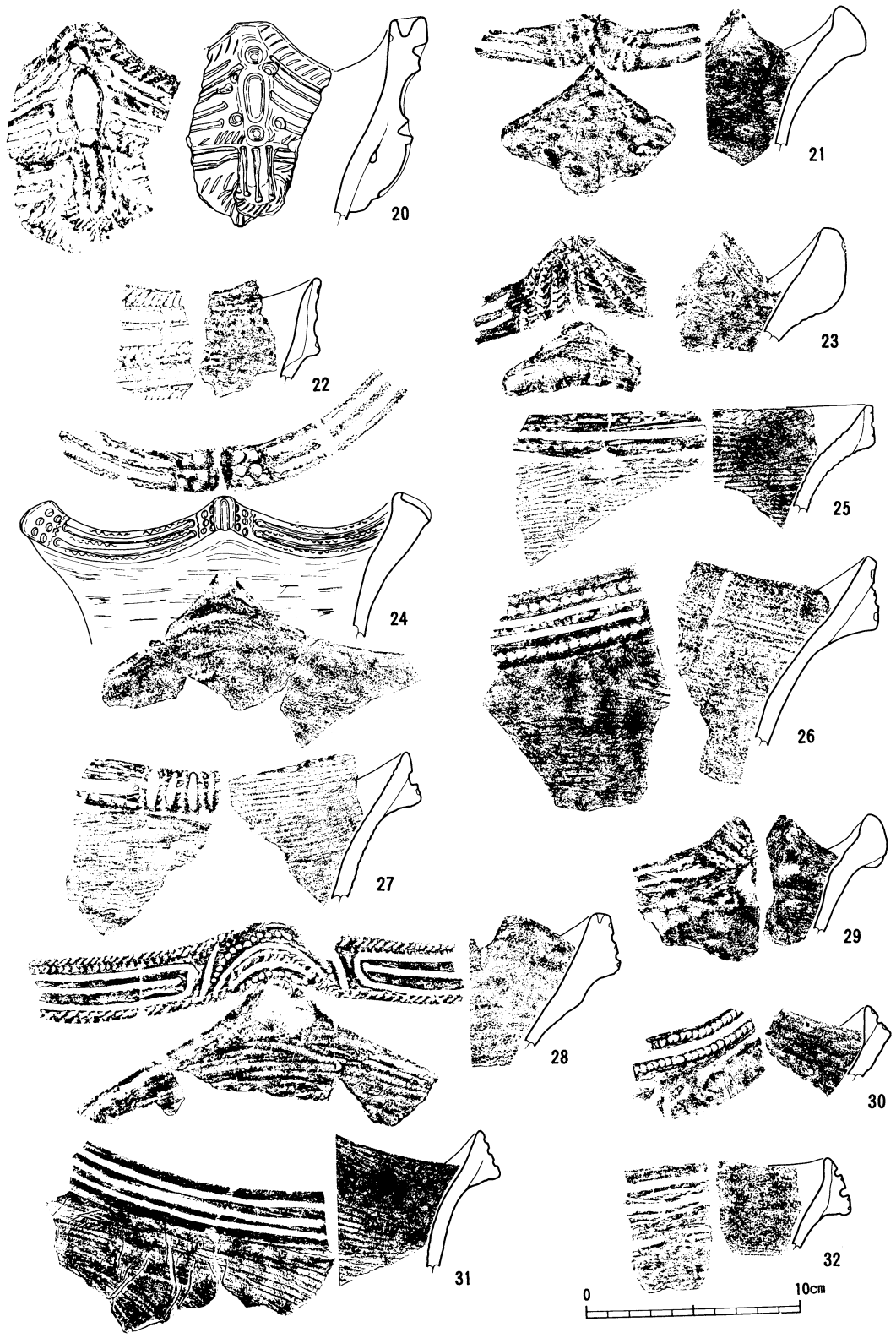
100・101は、口縁部が外反して僅かに肥厚する。地文(器面調整)は、条痕仕上げである。口縁部屈曲部付近に、貝殻刺突文を連続して施文するタイプである。102は、口縁部は外反し僅かに肥厚して断面三角形をつくる。地文(器面調整)は、条痕仕上げである。口唇部には突起が付く。器外面には、横位に巡るヘラ状の刺突文を数段に連続して施文する。ヘラ状刺突文は突起の上端の平坦面にも施文される。103は、無文土器である。胴部から口縁部へは外反気味に直行する。口唇部には三角の無文の突起が付く。器内面は条痕仕上げで、外面はナデ整形がみられる。104は、同様な無文土器であるが、頸部付近に部分的に弧状の沈線文を施す。105～107は、口縁部が丸みをもって肥厚し、その肥厚部に横位の沈線文を三条程度巡らせる。108は、大きく外反する口縁部で口唇部は丸みをもっておさめる。その口唇部面に沈線文を施文する。

5) 底部。(第40図—109～126)

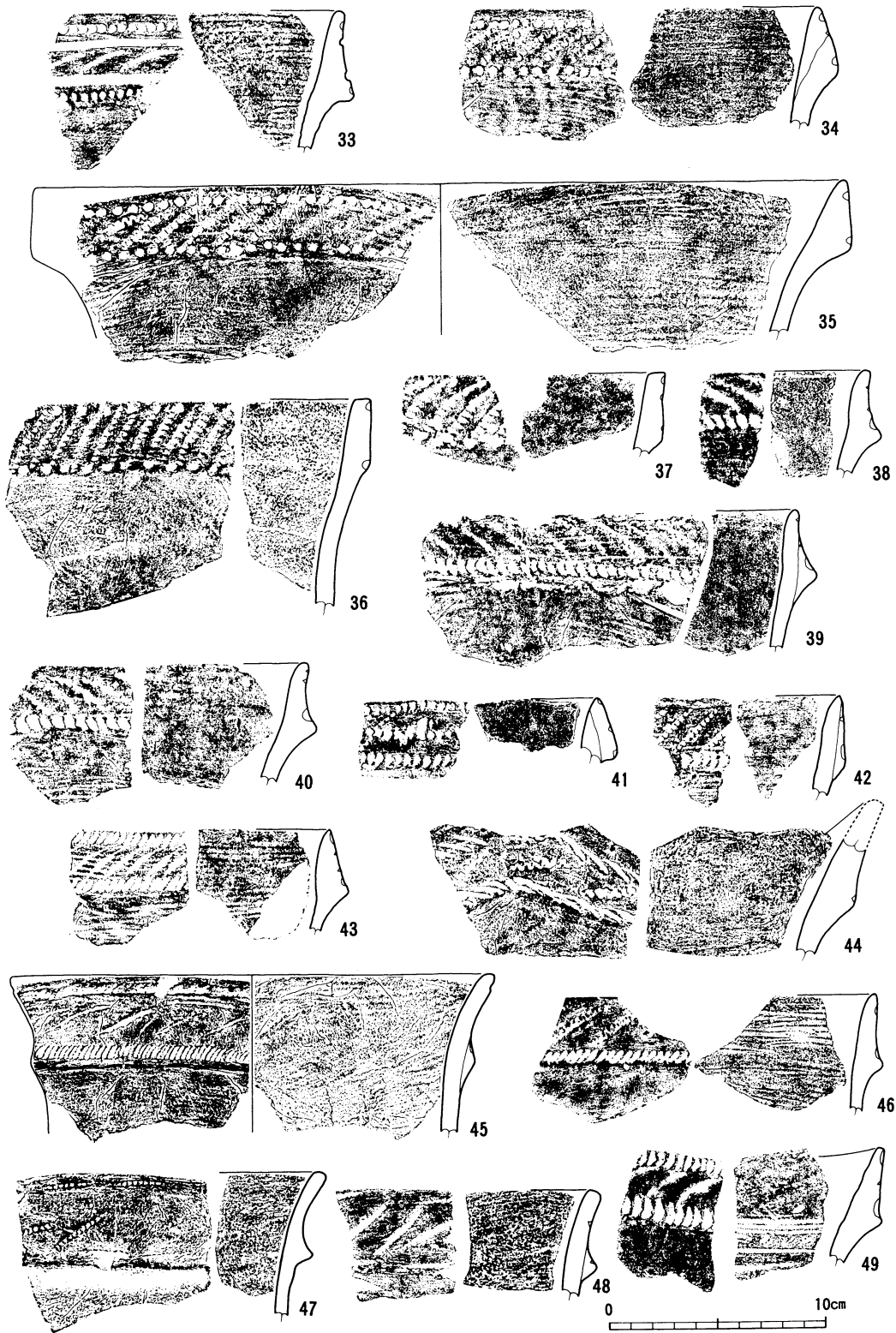
底部は脚台(109～112)と平底(113～126)に分かれる。



第34图 出土土器实测图(1)



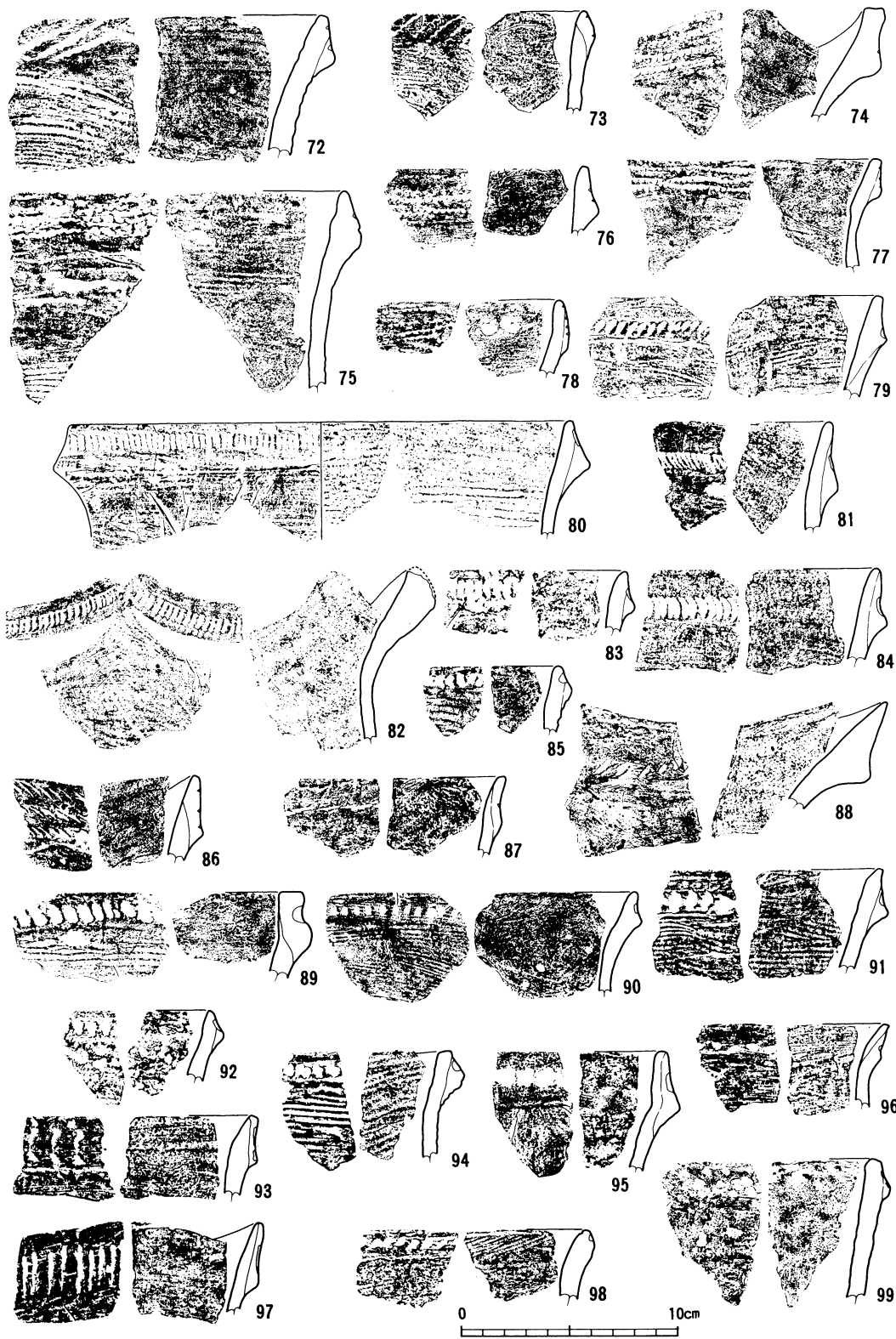
第35图 出土土器实测图(2)



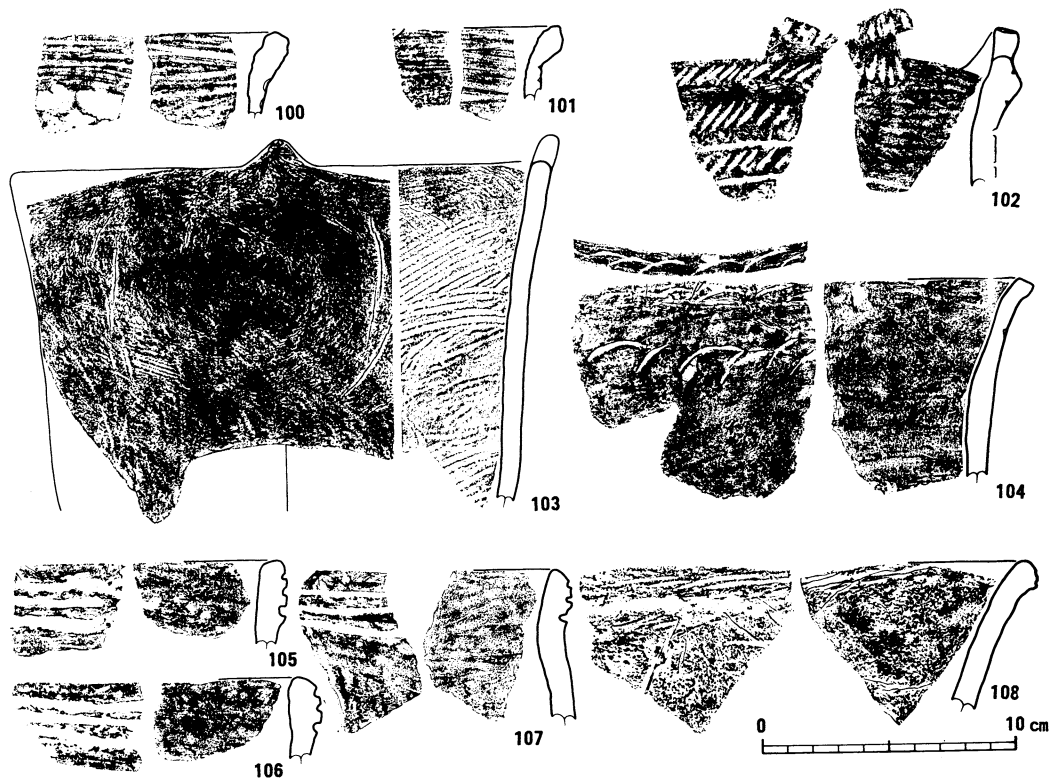
第36图 出土土器实测图(3)



第37图 出土土器实测图(4)



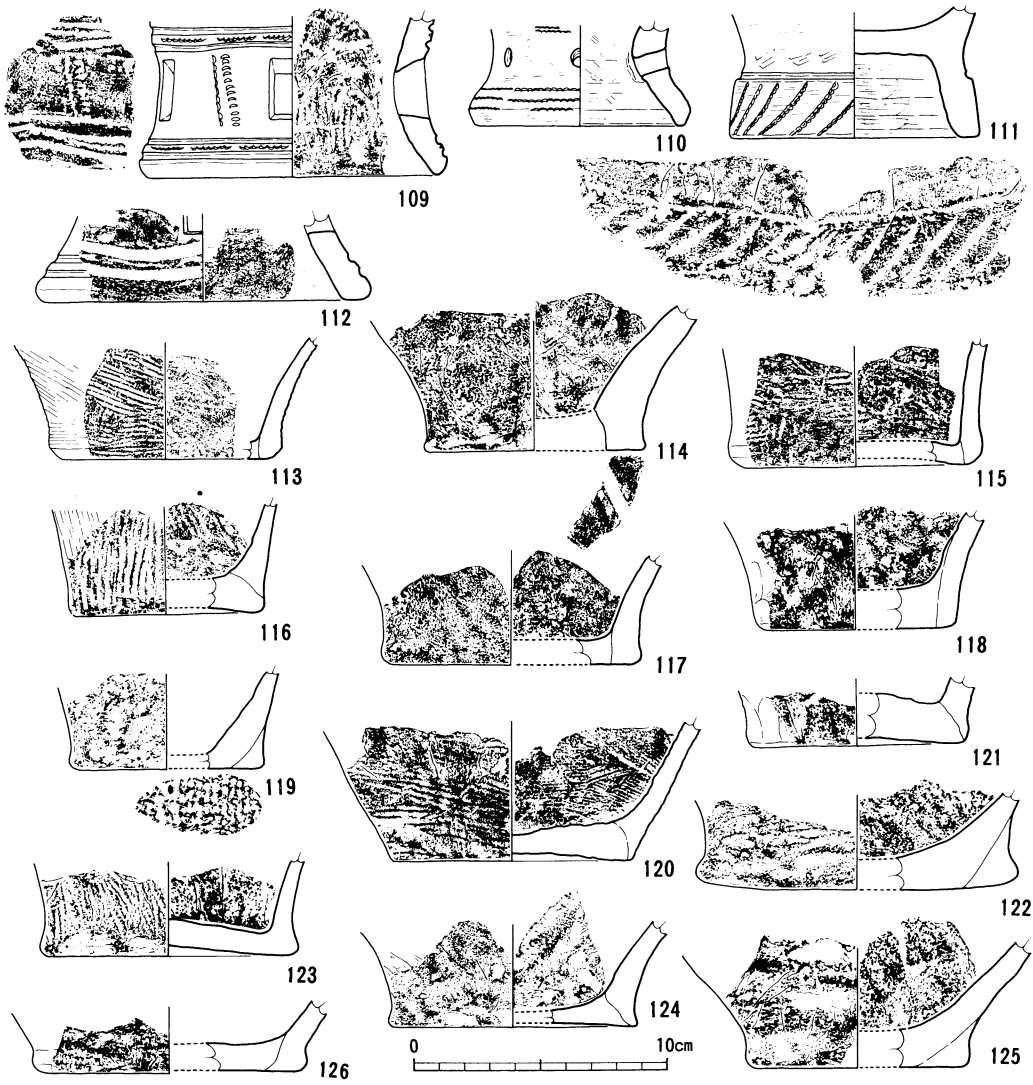
第38图 出土土器实测图(5)



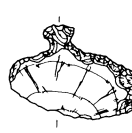
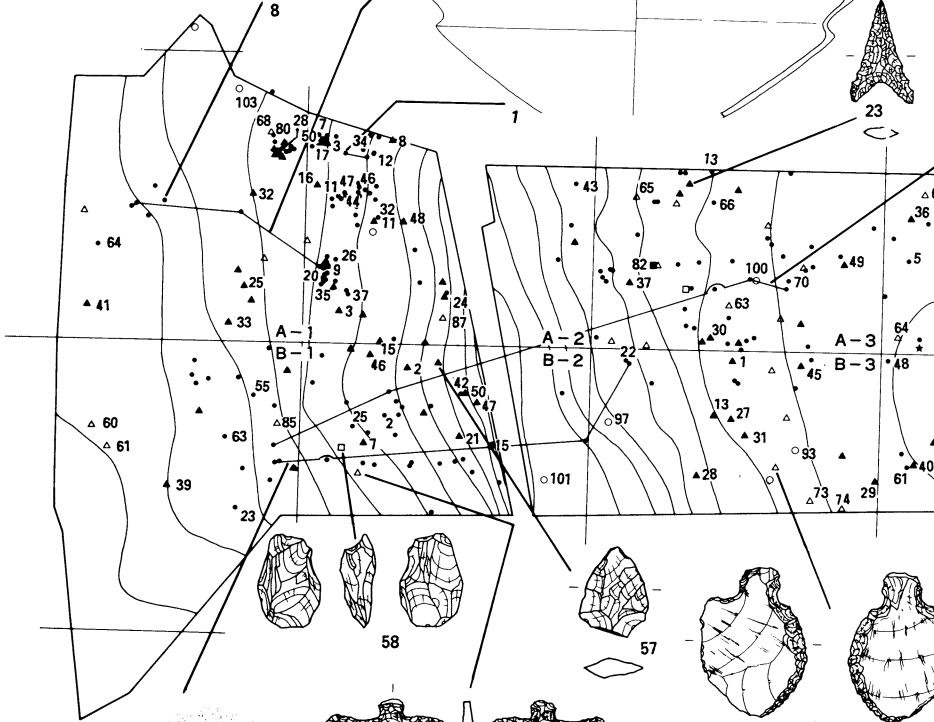
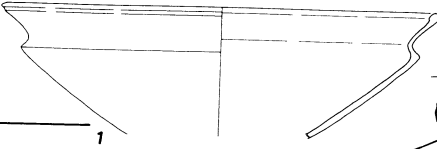
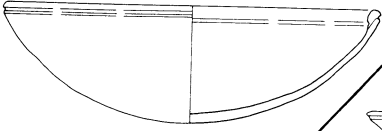
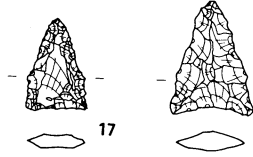
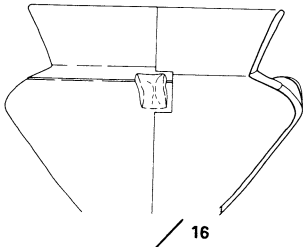
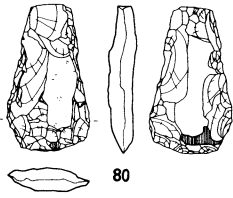
第39図 出土土器実測図(6)

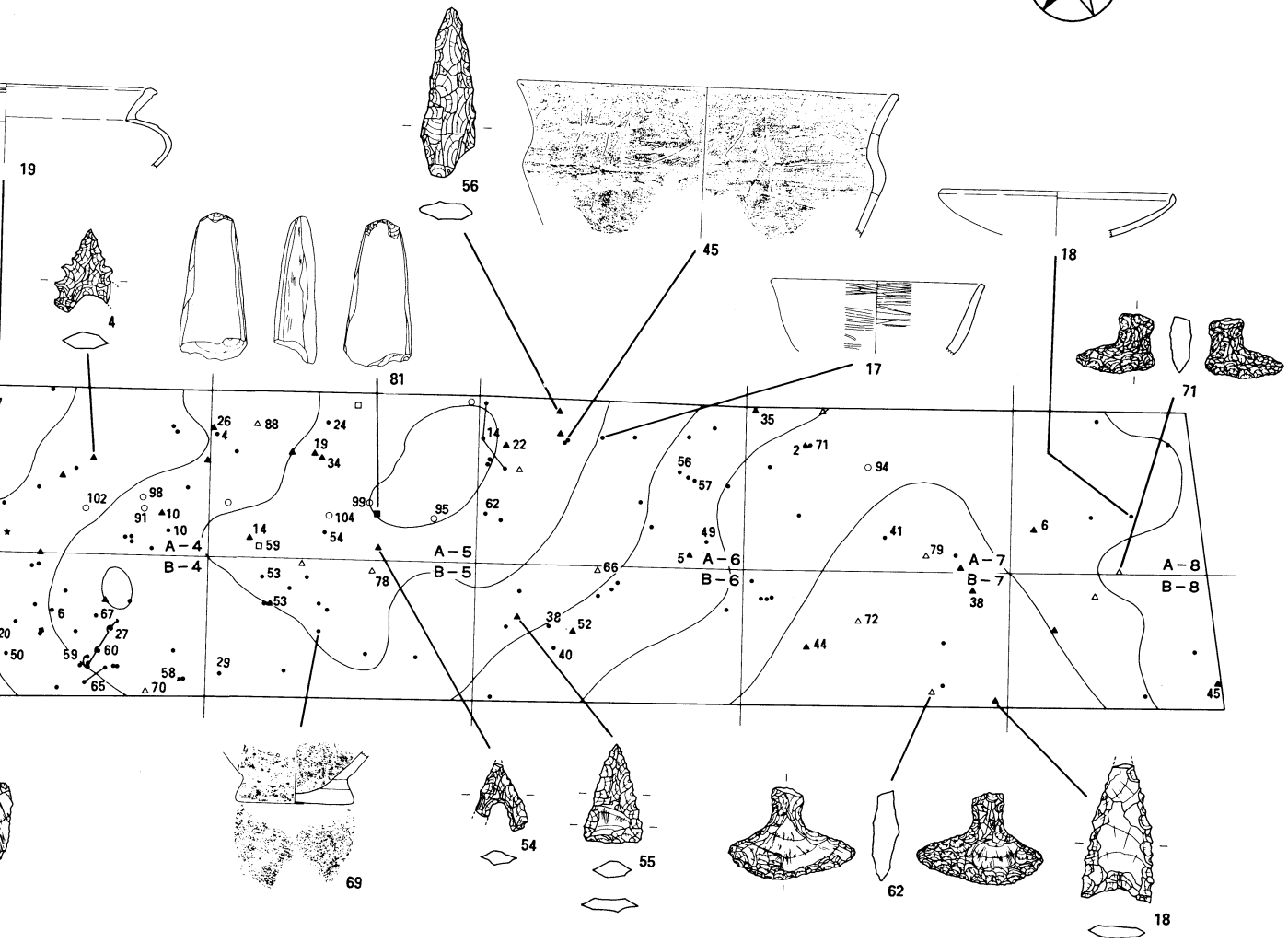
脚台の109は、脚部の上下に二条の凹線文を巡らせ、その間に方形の透かしを穿つ。凹線文間には貝殻刺突文を横位に施文し、方形の透かしと透かしの間には貝殻刺突文を縦位に施文する。110は脚部の上下に三条程度の貝殻刺突文を巡らせ、その間には円孔の透かしを穿つ。111は脚部下端を肥厚させ、その面に斜位の貝殻刺突文を施文する。112は109に類似するもので、方形状の透かしと凹線文を巡らせるタイプである。

平底は、底面から直線的に立ち上がり、外反して胴部へ続くタイプ(113~121)と底部外面が外側に張り出し、その上部で縮まりそこから外反して胴部に続くタイプ(122~126)がある。器内外面は、いずれも条痕の器面調整がみられる。114のように底面に凹線状の圧痕が確認されるもの(葉脈か)や、119のような網代の圧痕が確認されるものがある。



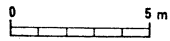
第40図 出土土器実測図(7)





～凡例～

- 縄文晩期土器
- ▲ 石鏃
- ビエス=エスキュー
- △ 石匙, スクレイパー
- 石斧
- 磨石・敲石
- ★ 軽石



第41図 縄文晩期土器出土状態

第5節 晩期の出土遺物

縄文晩期土器の出土状況は、前期及び後期の土器とあまり差異がみられず、これらの土器がかなり動いていると思われ、ほとんどが破片であった。ここでは、特徴のあるもの（特に口縁部と底部）を中心に取り上げた。

胎土に軽石が使用されるものがあり、今回の調査で軽石を削ったものが出土しているがこれが、粘土混和剤として使用されたとも考えられる。

1 土器

1) 精製土器 (第42図—1～24, 第43図—25～26・29・39・40)

①浅鉢 (第42図—1～13・15・17～24, 第43図—25・26・29)

1は口径が体部径よりも大きく、口縁部がやや外反し、体部に明瞭な稜をなすものである。

2～7は口縁部のみであるが、1と同様やや外反気味の口縁部である。2～4・6は外口縁端に沈線をもつ。

8は立面形が半円形（丸底）の浅鉢で、口縁部がわずかに立ち上がる。9も同一個体であると思われる。割れ方からみて、粘土を円盤状にし、底部を形成し、これに粘土板を貼り付け体部を成形したものと観察できうる。

10もやや内湾する口縁部をもち、口唇部に粘土を丸く貼りつける。

11～13は、口縁部がまっすぐのびるものである。いずれも口唇部を丸く成形している。

15は口縁部が外反気味に立ち上がるもので、これを口唇部を丸くしている。外口縁端に沈線をもつ。

17は厚手でやや開きながらわずかに外反するものである。

18は内湾気味の体部をもち、口唇部が立ち上がる。

19は口径より体部径が大きく、体部が丸く屈曲し稜をもたず、口縁部が開きながらのびるものである。橋状突帯様の装飾が付けられていたとおもわれる痕跡が体部に残る。体部に沈線が残り、そこをつなぎめにして成形していたと思われる。

20～24は19よりも口縁部が短い。20・21は外面に、22は内面に沈線をもつ。

25・26は口唇部にリボン状の装飾がつくものである。25は体部径が口径よりも大きく、口縁部が短く立つものである。一方26は口縁部が開くものであると思われる。

29は口縁部が口唇に向かって徐々に大きくなるものである。また、穿孔がみられる。

②中鉢 (第42図—14・16)

ここでは、精製土器の中で、浅鉢よりもやや器高の高いものを、粗製土器の深鉢とも比較する上でも仮に「中鉢」と呼ぶことにした。

14は口径が体部径よりも大きく最大体部径部分に稜を残すものである。口縁部はやや開きながらまっすぐのびる。

16は体部径が口径よりも大きく、体部は丸く屈曲する。体部上半に段をもち、そこに退化し

たと思われる、橋状突帯を1つもつ。口縁は開きながら立ち、底部は不明である。

③器種不明のもの(第43図—39・40)

39・40は器種不明である。39の外面はでこぼこが多く荒く仕上げている。40は外反する口縁で端部は丸く収める。

2) 粗製土器(第43図—27・28・30~39・41~43, 第45図—44~55, 第46図—56~71)

①マリ形(第43図—34・35・37・38)

34・35・37・38は体部が内湾し、口唇部が平坦なものである。調整は条痕・工具ナデ・ナデである。

②孔列文土器(第43図—36)

36は口縁部に孔列文を有すものである。破片のため2か所と1か所が割れ口に残っている。

③突帯文土器(第43図—41~43)

41は開きながら立つ口縁で口唇が丸く収まり、その外側に不明瞭な突帯を付ける。42は口縁がほぼまっすぐに立ち、その先端外側に断面三角形の突帯を付ける。43は、体部で傾きがはっきりしないが、外側に断面三角形の突帯を付け、丸い刻みを施している。

④深鉢(第43図—27・28・30~33, 第44図—44~55, 第45図—56~71)

27・28は体部破片である。リボン状の装飾が施されるのが特徴である。

30・31は体部の屈曲部分に一条の突帯をつけ、さらにヘアピン状の突帯をかさねてつけるものである。

32・33は内面のみにヘラミガキが施される、半粗製土器である。

44は口縁部が大きく開き、口径が体部径より大きく、体部に稜をなす。

45・48は口縁部が緩やかに外反しながら開くものである。体部には稜が見られない。

46・54は口縁部が大きく緩やかに外反しながら立つものである。条痕状の痕跡が残り、工具による調整が行われたことが窺われる。49~52も緩やかに外反する口縁部である。

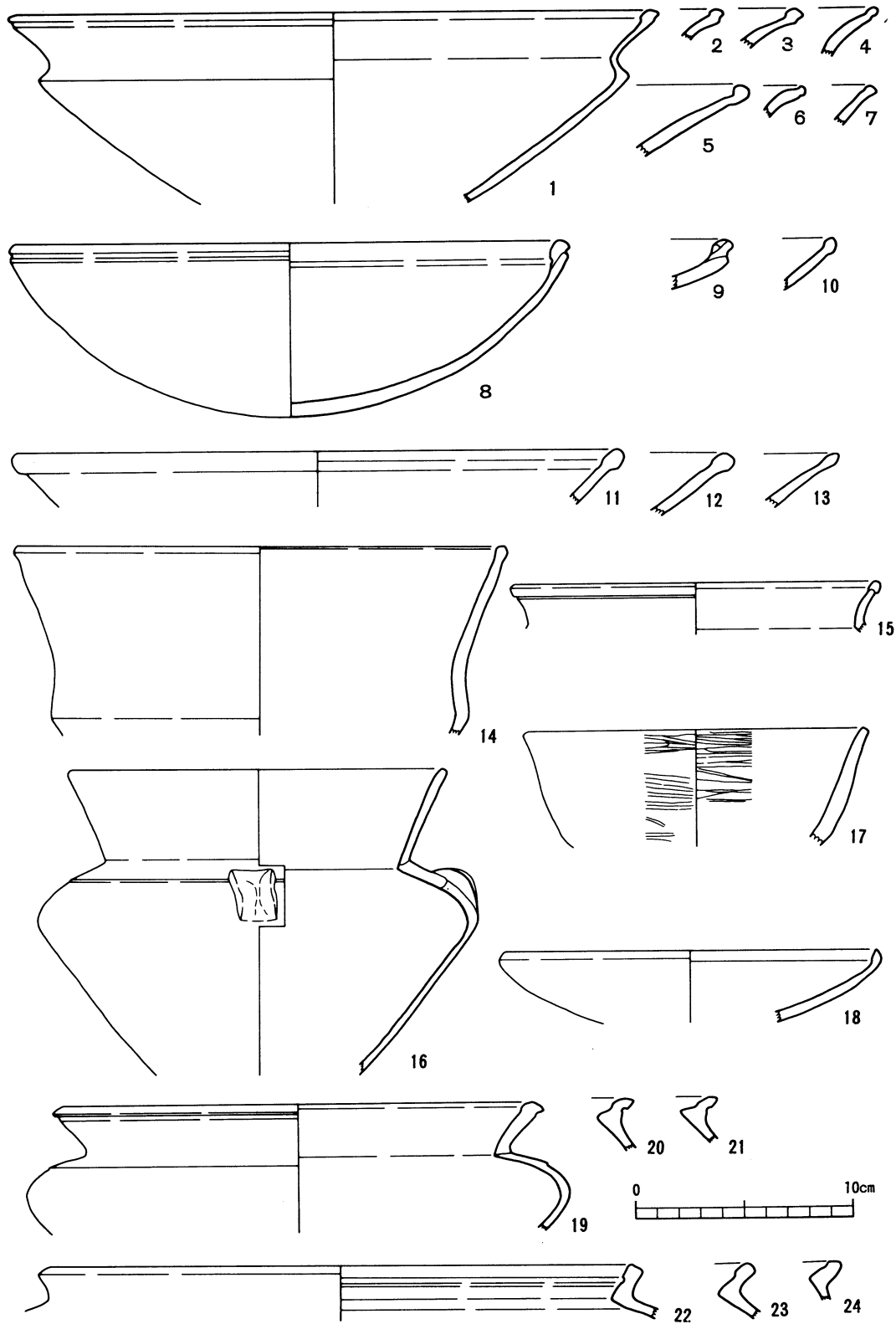
47・53・54も口縁部が大きいが、これは開きながら立つものである。これも条痕状の痕跡が残る。

56~59は体部に屈曲する部分をもたず、口縁部が開くものである。61~67も同様の口縁部である。56~58は口唇に楔状の装飾をつける。

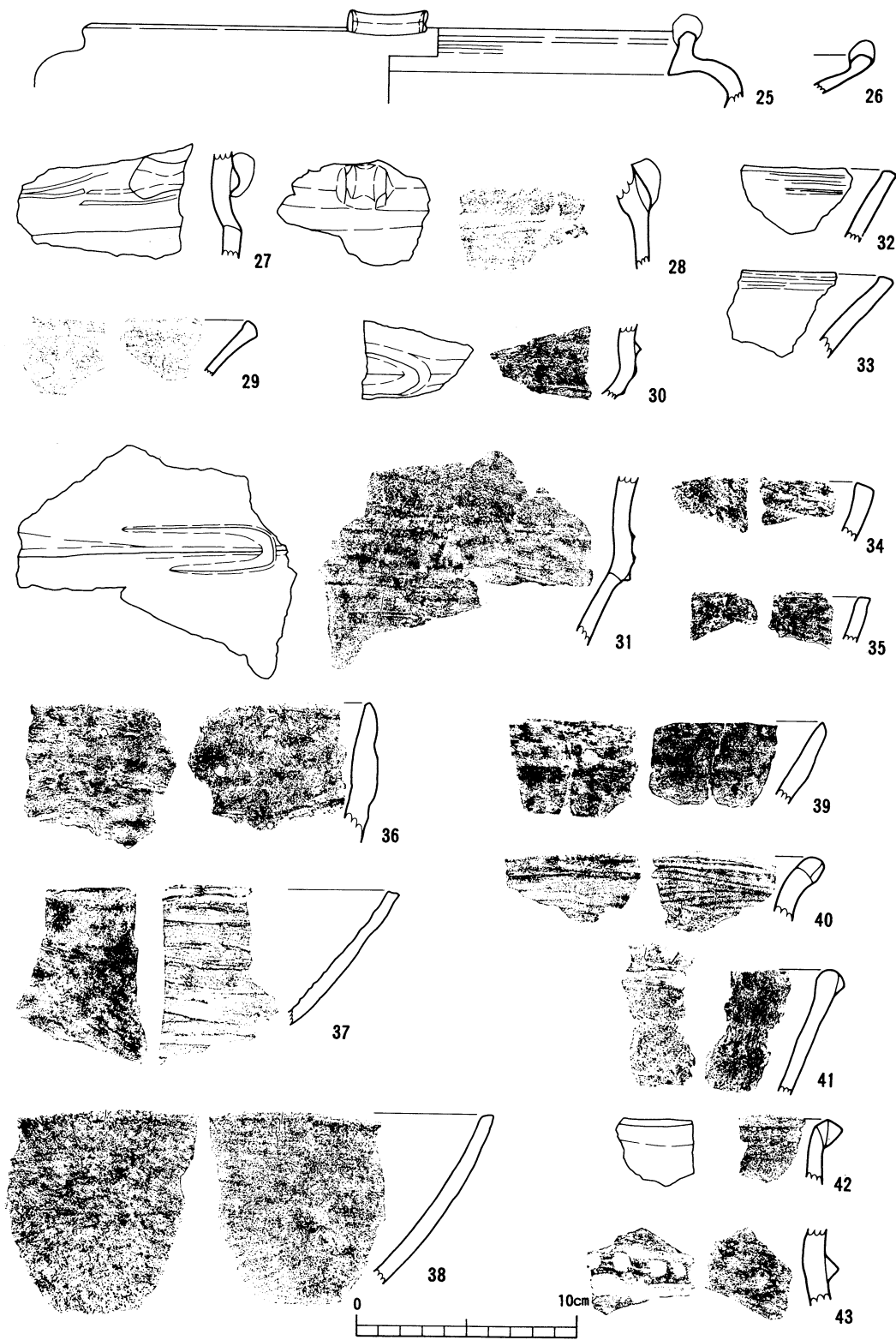
60は体部の形態が不明で、口縁部が大きく開くものである。復元口径は比較的小さい。

⑤底部(第45図—68~71)

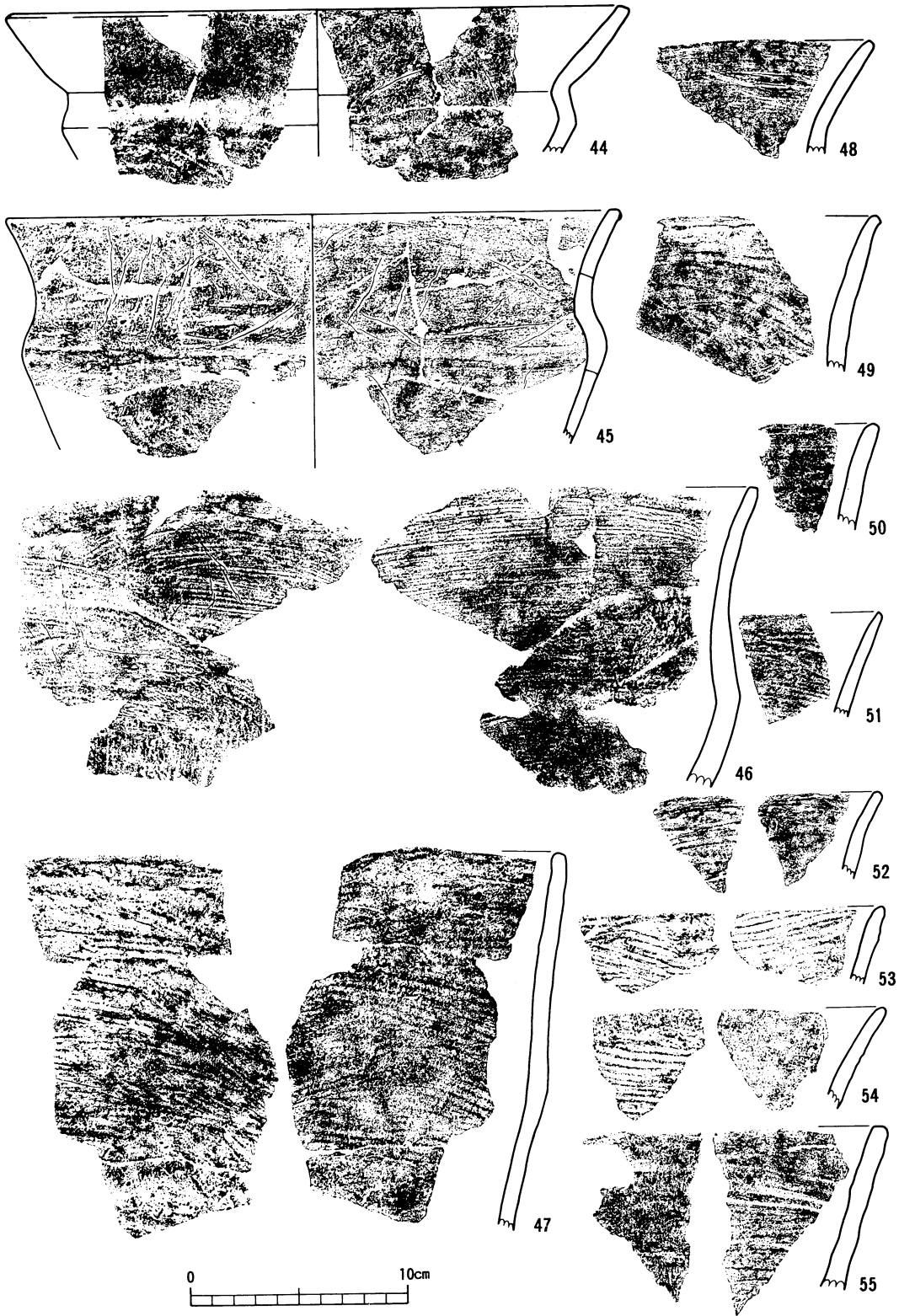
いずれも、底部端が張り出すもので、先端部は丸くなる。すべてナデ調整を施している。



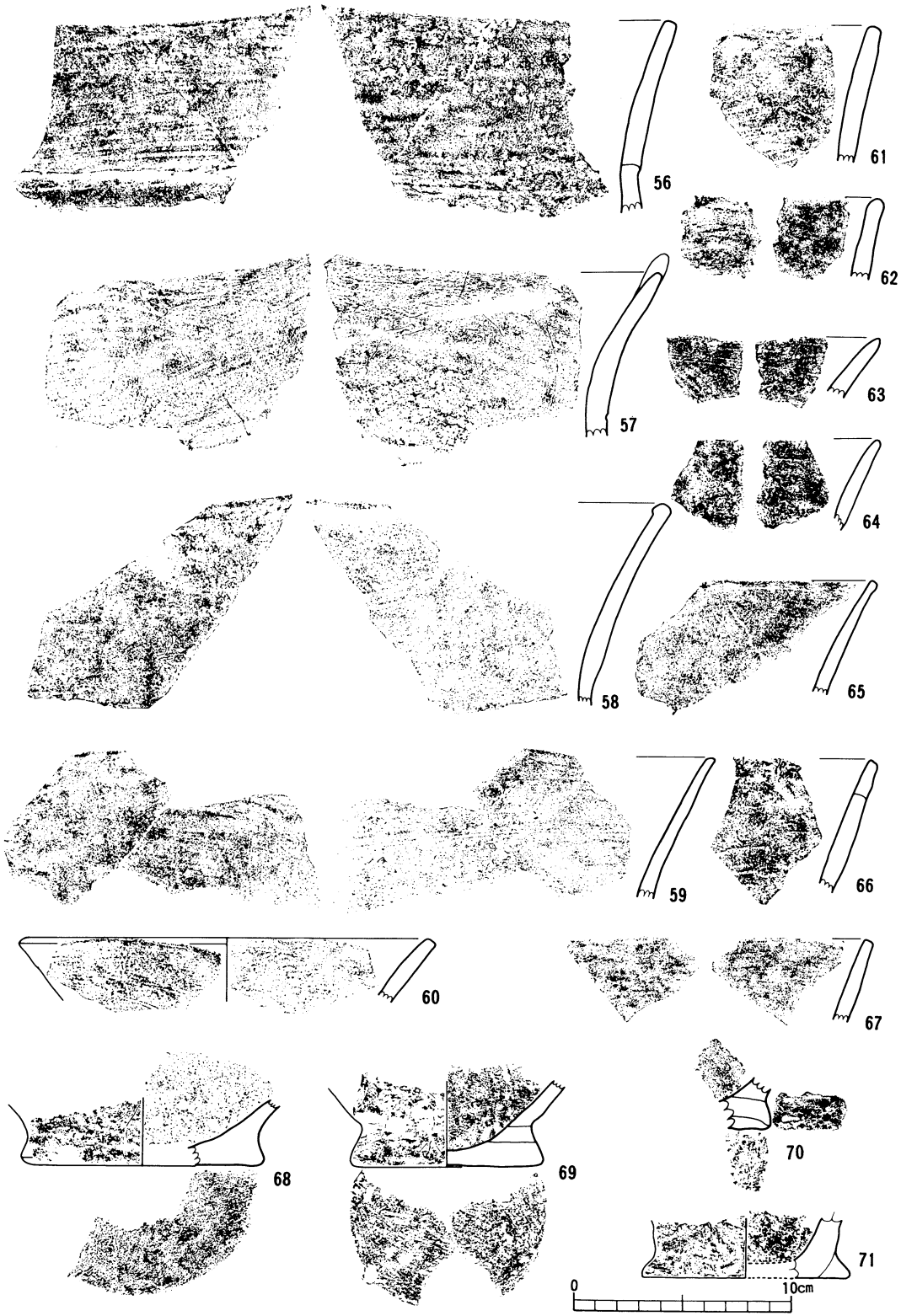
第42图 Ⅲ層（晚期）出土土器实测图(1) (1/3)



第43图 Ⅲ層（晚期）出土土器实测图(2) (1/3)



第44図 Ⅲ層（晚期）出土土器実測図(3) (1/3)



第45図 Ⅲ層（晚期）出土土器実測図(4) (1/3)

第6節 出土石器

Ⅲ層からは縄文時代前期・後期・晩期の土器が出土しているが、これらの土器と石器が時期の問題も含めて、どのように関係付けられるか知るには、その出土状態からして困難である。

①石鏃（第46図—1～37，第47図—38～57）

石鏃は、約90点ほど出土している。これらは、側辺や基部の形態に差異が見られ、これによって分類が可能である。ここでは特徴的なものを取り上げた。

1～6は側辺が鋸歯状を呈し、抉りが比較的深いものである。

7～17・21は側辺が五角形もしくはそれに近いものである。抉りは割合浅い。

19・20は側辺が不規則な五角形をなすものである。20は抉りが深い。

22～30は側辺がほぼまっすぐで三角形を呈するもので、抉りの深いものである。

31～36もほぼ三角形を呈するが、長さが短く抉りがやや浅い。

18・37～41は側辺が外湾するものである。37は逆刺が鋭く、抉りがやや深い。38～41は逆刺が鈍く、抉りが深い。

42～44はやや内湾気味の側辺をもつものである。42は薄く、やや内湾気味の三角形をなす側辺が逆刺が丸く、抉りが深い。43は両脚が横に広がり、抉りがやや深い。44は側辺の製作法が異なり、両足の形状が異なる。

45～50はやや外湾気味の三角形をなす側辺で、抉りの浅いものである。

51・52・55は平基で基部に細かい調整剝離を施してあるものである。

53は側辺に細かい調整剝離を施してあるものである。先端と基部が欠損している。

54は逆刺が丸く、抉りが極めて深いものである。

56・57は尖基である。56は長いもので、57は短いやや幅がある。

②ピエス＝エスキーユ（第47図—58・59）

58は姫島産黒曜石製で、六角形をなす。2点とも大きな剝離によって使用面を作っている。

③石匙（第48図—61～79）

石匙はチャートを素材としたものが多く、ついでタンパク石が多い。黒曜石はわずかに1点である。横長のものが14点、縦長のものが5点出土している。

61～74は横長のものである。61は刃部の両端が欠損しているが、両面をよく調整している。刃部は直線である。62・63も両面をよく調整し、刃部は外湾である。64・65は刃部の調整を片面だけに施し、外湾する刃部である。66・67は三角形をなす。66は片面のみの刃部調整であるのに対し、67は刃部の調整はなされていない。68・74はつまみが横方向からついている。片面のみに刃部調整がなされている。69はやや横に長く、両面に調整が施され、刃部は内湾である。70は細かいつまみがつき、片面に刃部調整がなされる。71・72は割り合い大きなつまみがつき、刃部が小さい。71には細かい調整が施され、72には片面のみに刃部調整が施される。ともに外湾する刃部である。73は極めて大きなつまみがつくものである。刃部は狭く、細かい調

整が施されている。

75～79は縦長のものである。75は片側にのみ調整がなされ、もう一方には自然面を残す。つまみが割り合い大きい。76は極めて大きなつまみがつく。刃部調整は片面のみである。77はやまらみを帯びた形態で、片側に両面から刃部調整がなされる。78はかなり欠損しているが、細かいつまみに、直線的な刃部をもつ。79は細かいつまみで、片側に片面のみの刃部調整がなされる。

④石斧（第49図—80～82）

石斧は3点出土したが、完形品は1点であった。石材には安山岩・ホルンフェルスがある。

80は完形品で、縁辺部から調整を加え、両面に自然面を残す。刃部付近にわずかに擦痕が見られる。81・82はともに刃部が欠損している。81は磨製によって丁寧に仕上げているが、82は打製で自然面を残している。

⑤スクレイパー（第47図—60，第49図—83～88）

60は使用部に比較的細かい調整がなされ、断面が三角形である。83は鉍石製で、基部の両面と使用部の片面に調整を施し、使用部の片面は自然面を残す。84～88は安山岩製である。大きな剝離によって、薄い剝片をつくり、使用部に細かい剝離が残っているものである。細かい剝離は片面のみのもの、両面に残るものがある。

⑥磨石・敲石（第50図—91～104）

91～95は磨石と敲石の兼用品である。図の網かけ部分が磨ってある面である。側辺には敲打痕が残る。94は縦に長く、やや薄い。これ以外はほぼ正円に近く厚さもある。

96は磨石である。ほぼ球形である。

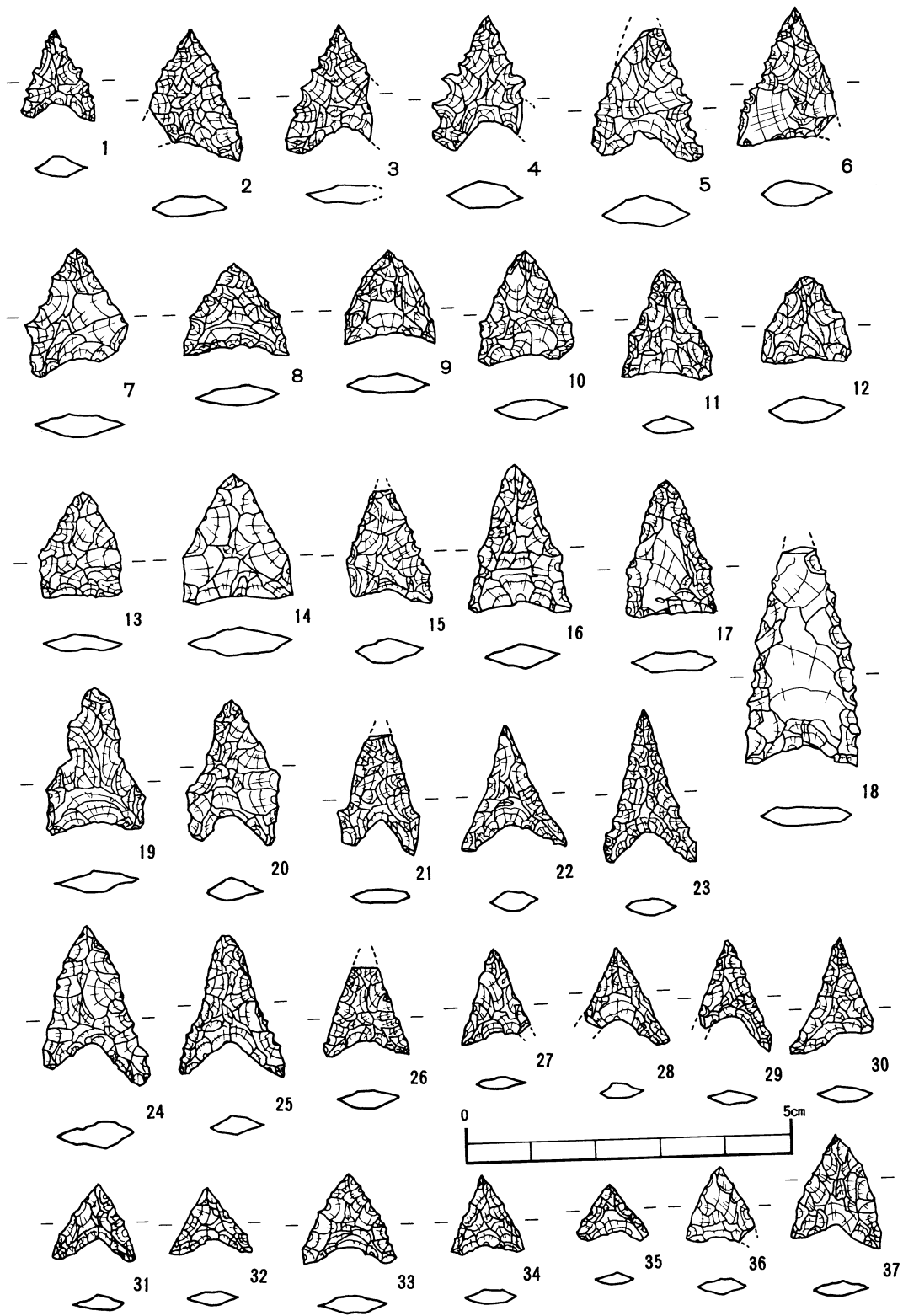
97～101は敲石である。97～99は側辺に敲打痕が残る。平面形が97が円形であるのに対し、ほかは楕円形である。98は面形成を行っている。100・101はやや小さく明瞭な敲打痕は残らないが面形成を行い、形態が類似するのでここに分類した。

102～104は小さく、球に近いが敲打痕が残るものである。

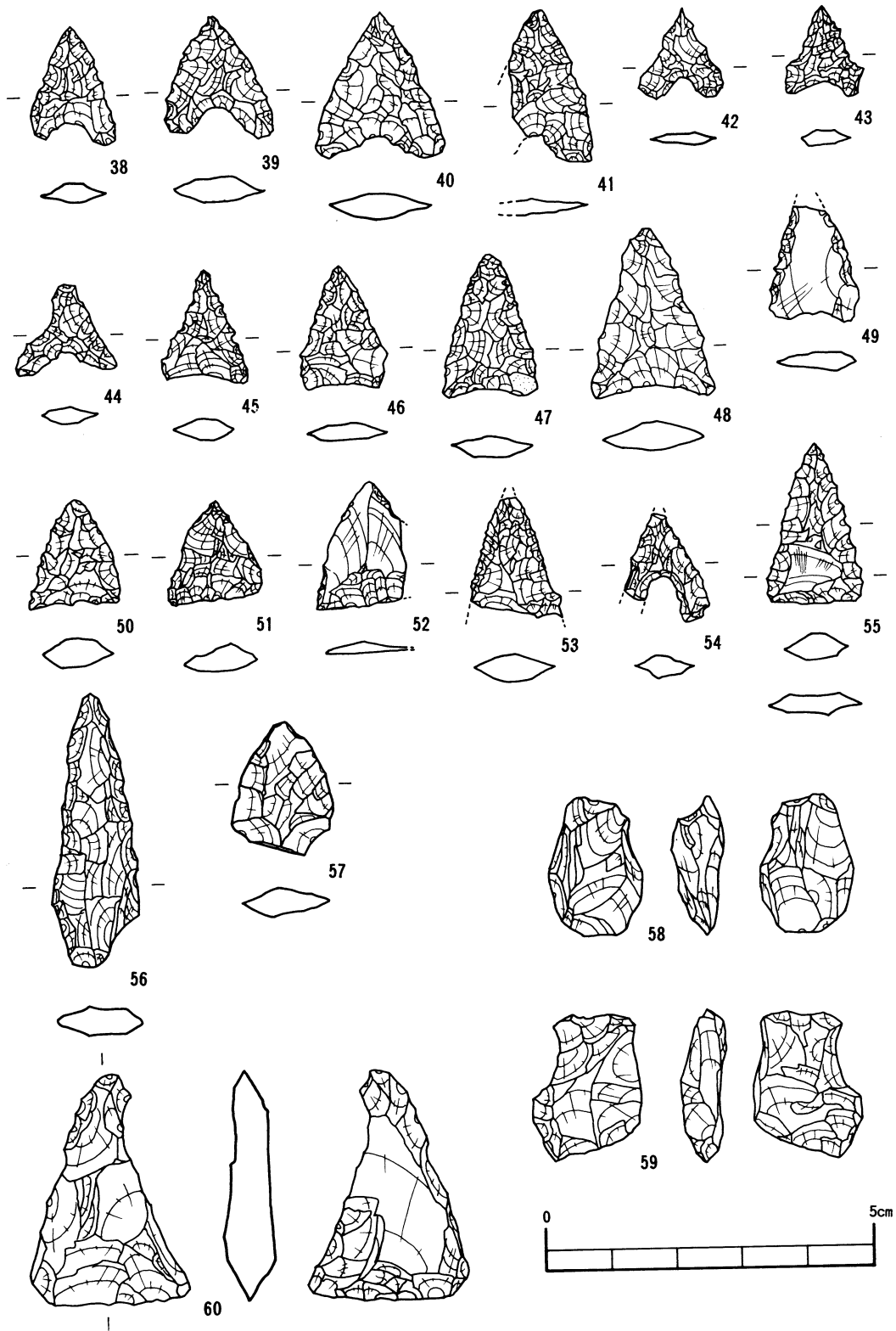
第7節 土製品

①円盤型土製品（第49図—89・90）

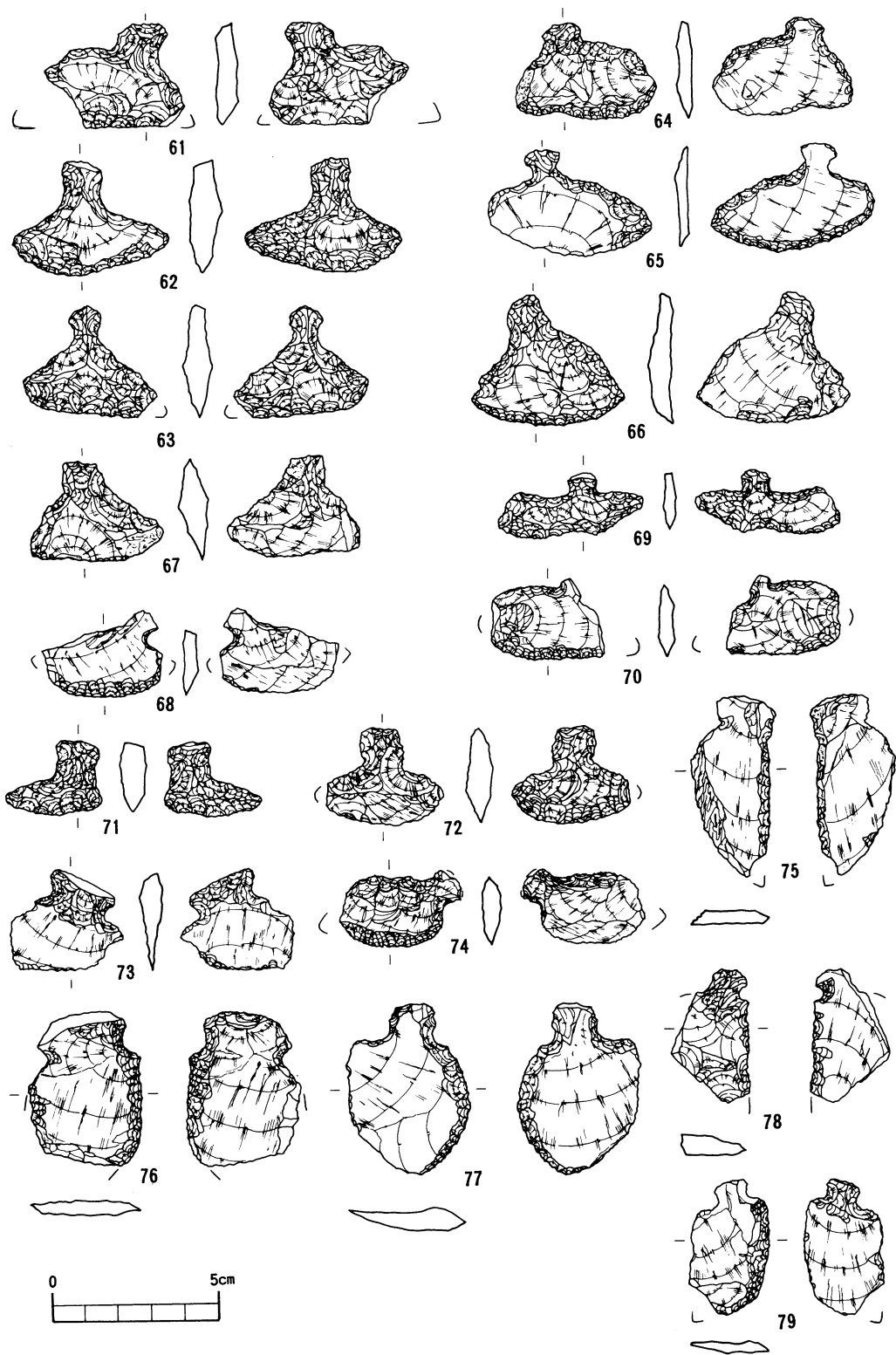
89・90は縄文後期土器の体部を再利用した、円盤形土製品である。径は5cm、厚さ0.8cm程度である。茶褐色を呈する。



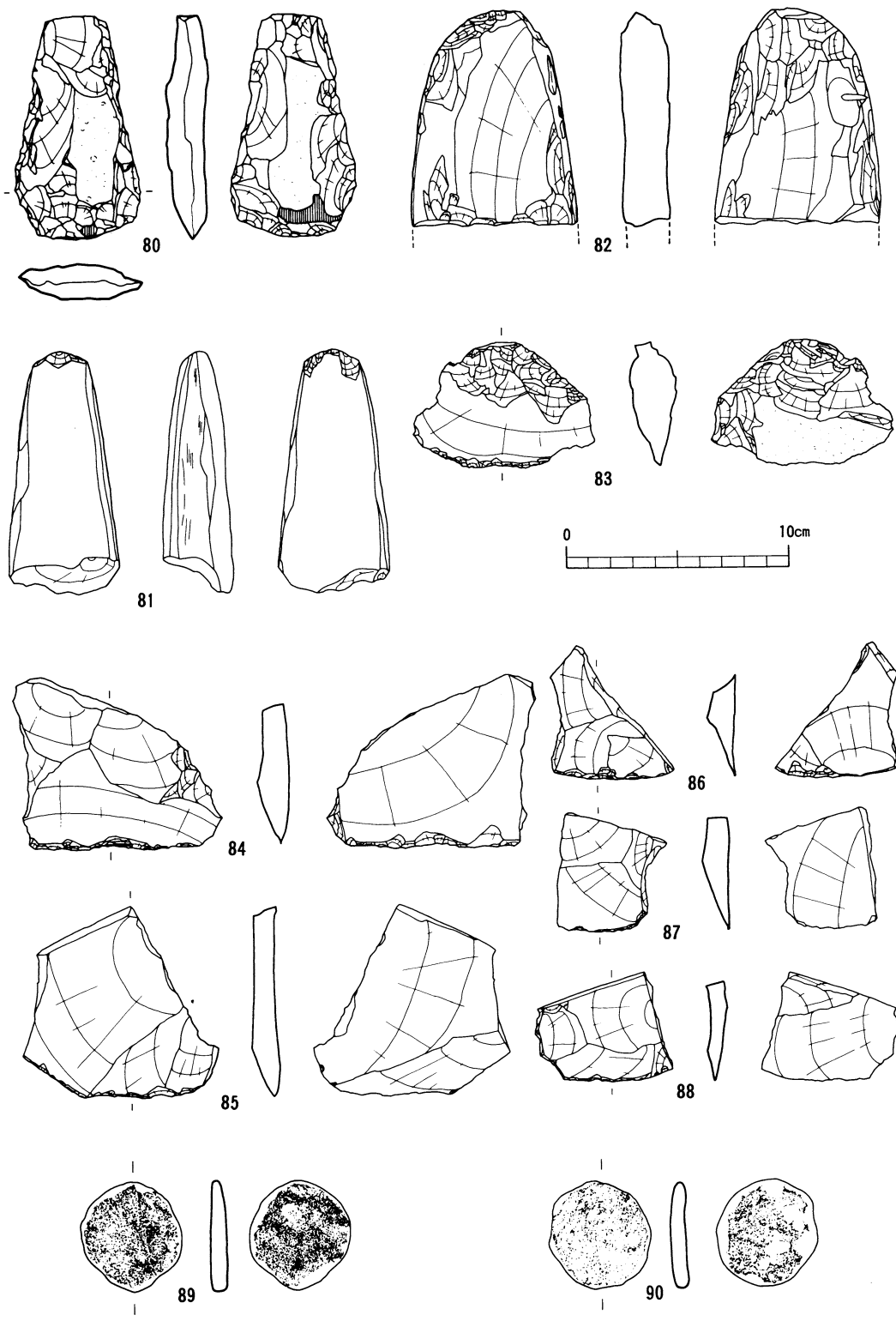
第46图 Ⅲ層出土石器实测图(1) (1/1)



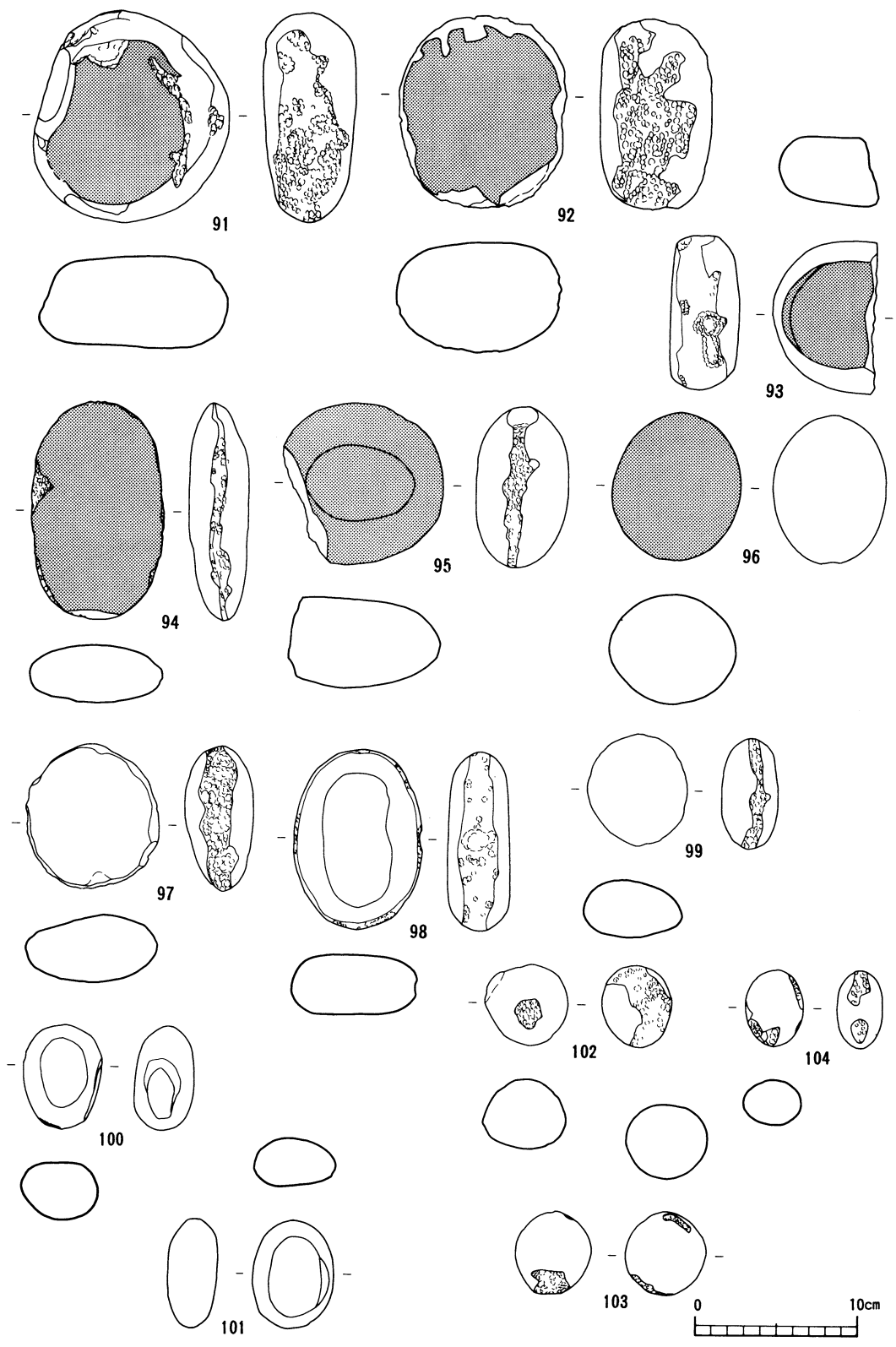
第47图 Ⅲ層出土石器实测图(2) (1/1)



第48图 Ⅲ層出土石器実測図(3) (1/2)



第49図 Ⅲ層出土石器(4)及び縄文後期土製品実測図 (1/3)



第50图 Ⅲ層出土石器实测图(5) (1/4)

第Ⅶ章 II層の調査

第1節 調査の概要

II層は土層そのものが、後世の水田耕作等によって削平を受けており、残りの悪い状態であった。遺物はII層下部～III層との境界部分に出土し、その分布はA・B—4区を中心にA・B—3～5区に集中する。

遺構は土壇・焼土などが検出された。土壇は2基検出されたが、遺物を伴わずその時期は不明である。特にB—3区のもの埋土がI層と類似しII層出土遺物とは時期が異なる物と思われる。

遺物としては土師器・黒色土器A類・墨書土器・紡錘車・棒状土錘・須恵器が出土した。

第2節 出土遺物(第51～53図)

①土師器(1～4, 23～27)

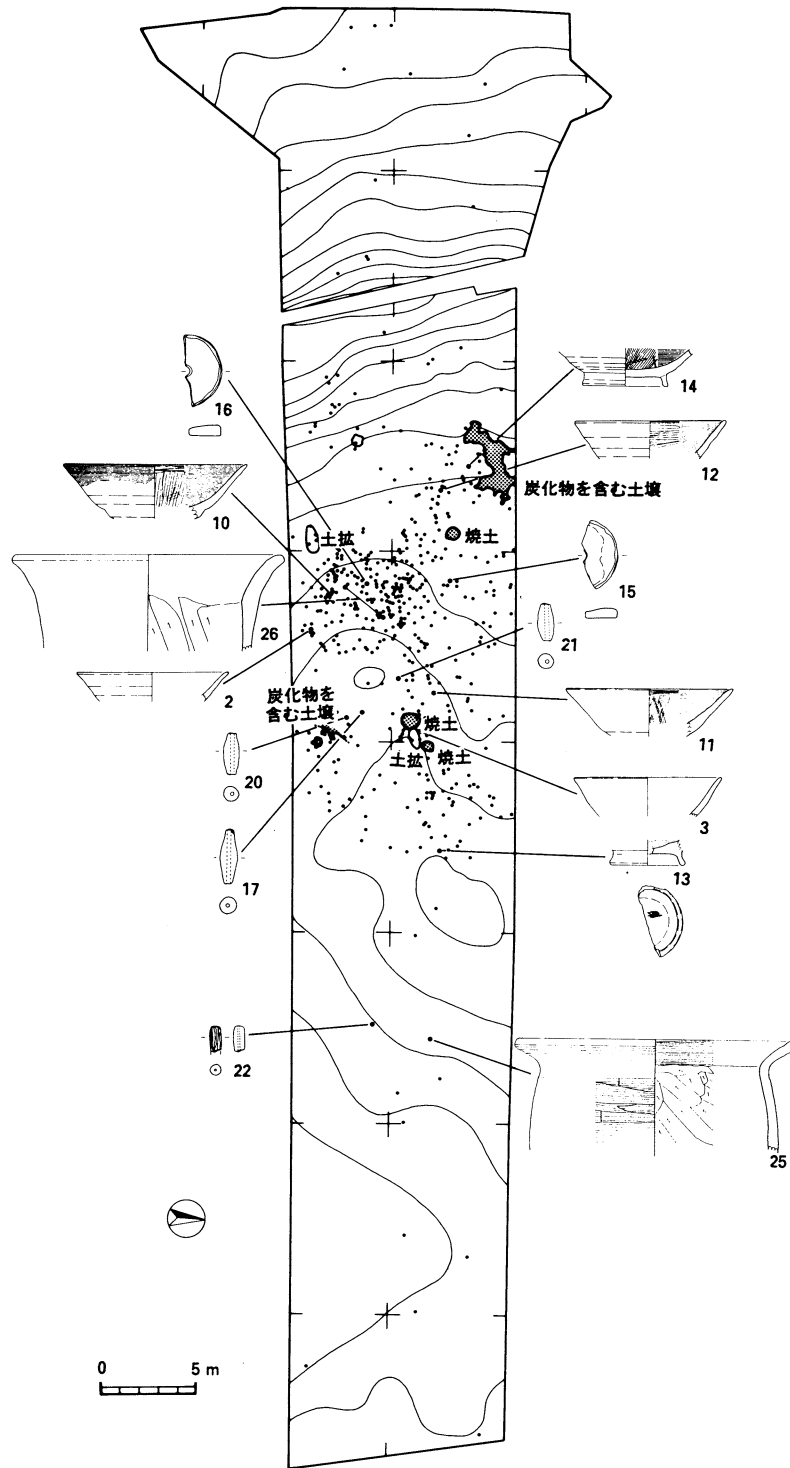
1・2は体部が真直に伸び、口縁部がわずかに外傾するものである。1の内面にヘラミガキが施され、ほかは1・2ともヨコナデ調整である。復元口径はそれぞれ13.6, 12.8cmである。胎土には石英・金雲母・砂粒が含まれ、茶褐色を呈する。3はやや内湾する体部をもち、ヨコナデ調整を施す。胎土は不純物の少ない精良土を用い、乳茶褐色を呈する。復元口径は12.5cmである。4は内湾する体部をもつが、口径のわりに器高が低く、皿であると思われる。外面はヨコナデであるが、内面はヘラの単位が不明確なほど丁寧なヘラミガキが施される。胎土には砂粒が含まれる。外面は淡茶褐色、内面は赤茶褐色を呈する。復元口径は13.4cmである。6は底部で、体部の立ち上がりにケズリ痕が残る。その上位にはヨコナデ調整が、内面は丁寧なヘラミガキが施される。底面は回転ヘラ切り後ナデているほか、繊維痕も見られる。胎土には砂粒を多く含み、茶褐色を呈する。復元底径は6.8cmである。7～9は、円盤状の底部をもつものである。ヘラ切り後ナデ調整を施す。9にはヘラ痕が残る。体部外面は3つともヨコナデで内面は7がナデ、8がヨコナデ、9がヘラミガキである。胎土は石英・金雲母・砂粒などが含まれる。9は乳茶褐色を呈し、ほかは茶褐色を呈する。復元底径はそれぞれ6.6, 6.8, 5.9cmである。23～26は甕である。23, 24は口縁部が大きく「く」の字状に外反する胴部外面に縦方向、また口縁部内面は横方向の刷毛目を施す。胴部内面は左上りのヘラケズリを施す。口縁部外面はヨコナデと刷毛目を併用する。胎土には砂粒を多く含み、茶褐色を呈する。25は口縁部がやや鋭角的に「く」の字状に外反し、胴部が張る。胴部外面と口縁部内面に回転を利用した横方向の刷毛目を施す口縁部外面はヨコナデであるが、煤が付着している。胴部内面はヘラケズリである。胎土には砂粒を多く含み、外面は赤茶褐色、内面は茶褐色を呈する。26は口縁部が緩やかにかつ大きく外反する。外面から口縁部内面までヨコナデを、胴部内面はヘラケズリを施す。ヘラケズリを施していない部分もあり、この調整法がヨコナデよりも後からなされて

いるとも考えられる。
胎土は砂粒を多く含み茶褐色を呈する。27は甕に付く把手と思われる。3 cm程度の厚さがありナデ調整を施す。胎土は甕同様砂粒を多く含み、茶褐色を呈する。

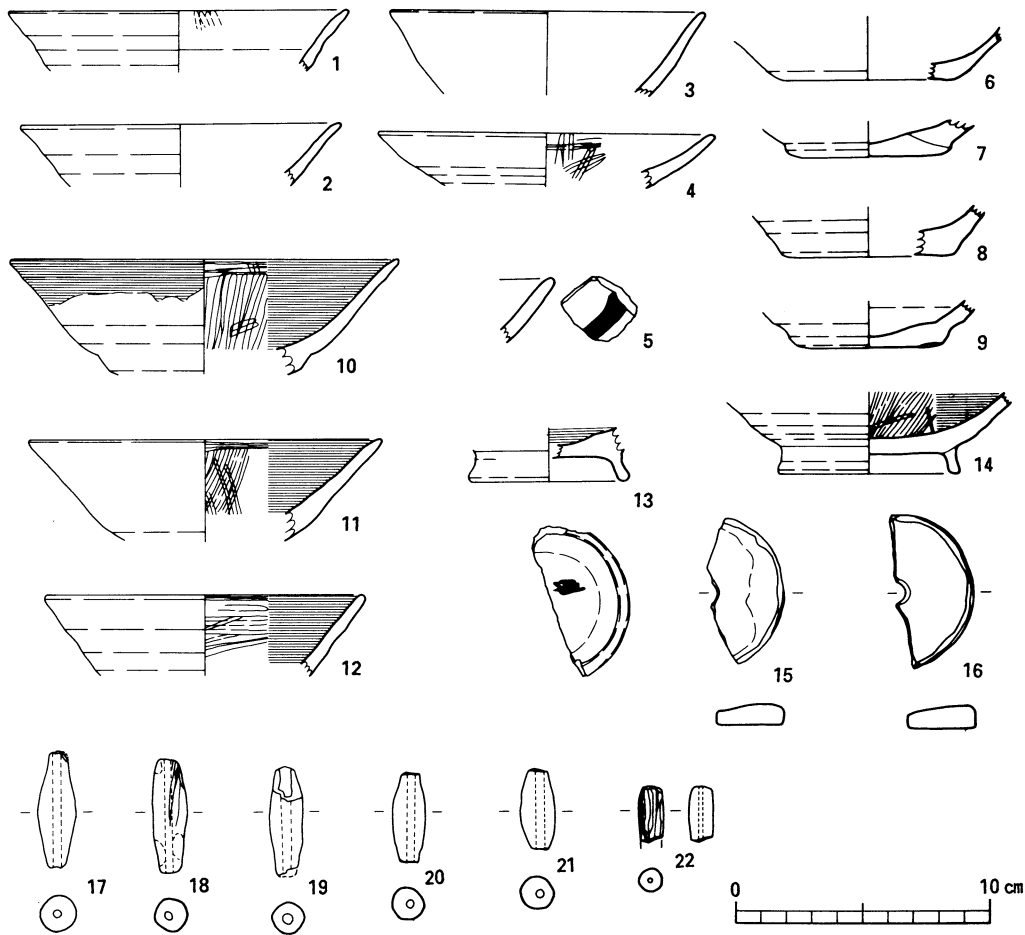
② 黒色土器 A 類

(10~12・14)

10はやや内湾する体部をもち、口縁部がやや外傾する。内面は口縁付近が横方向、体部が縦方向のヘラミガキを施し、漆黒色に炭素を吸着させる。外面も口縁付近は炭素が付いている。外面の調整はヨコナデである。胎土は石英・金雲母他砂粒をわずかに含む。復元口径は15.4cmである。
11はまっすぐな体部をもつ。内面は1.5mm程度の幅のへらを使い、口縁付近は横方向、体部は右上りと左上りのヘラミガキを交差させる。外面はヨコナデである。胎土には石英や金雲母が含まれる。復元口径は14.0cm。12もまっすぐな体部をもつ



第51図 II層遺物出土分布図 (1/400)



第52図 II層出土遺物実測図(1) (1/3)

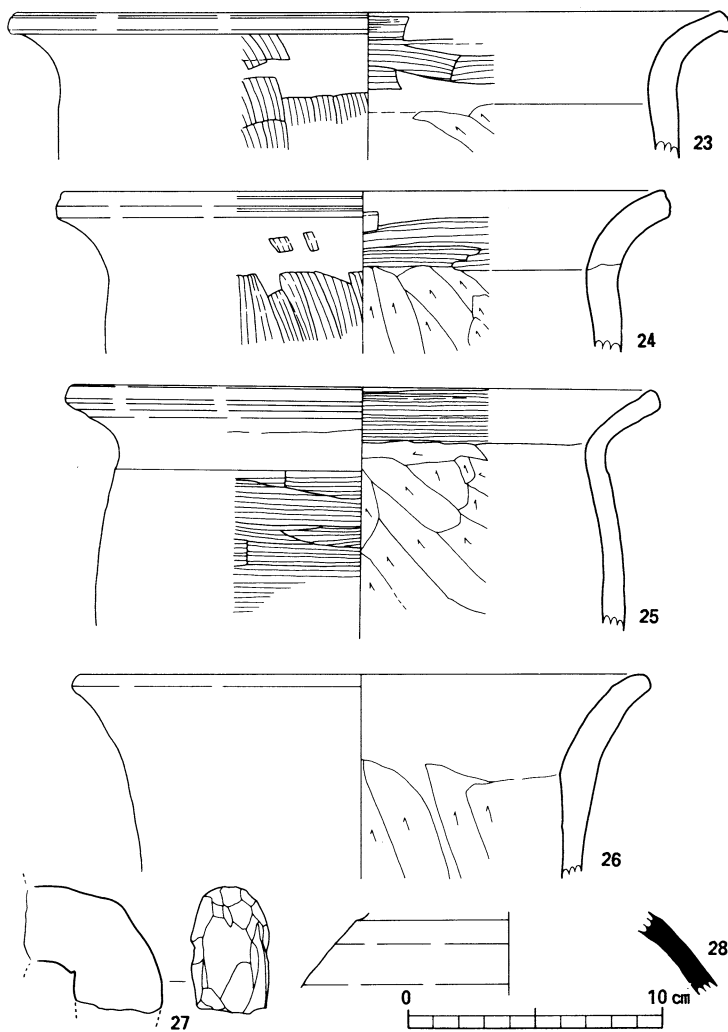
が、内部は大旨横方向のヘラミガキを施す。外面はヨコナデ。断面で輪積み痕が観察できる。胎土には石英や砂粒をわずかに含む。復元口径は12.8cmである。14は高台部分で、わずかに「ハ」の字状に開く高台である体部内面はやや右上りのヘラミガキを施す。外面はヨコナデで、外底面はヘラ切り痕を残している。胎土には石英や砂粒を少し含む。高台径は6.9cmである。

③墨書土器 (5・13)

5は土師器口縁付近に墨書されたものであるが、文字そのものは不明である。7mm程度の線の太さがある。土師器は内外面ともにヨコナデが施され、石英を含み、乳茶褐色を呈する。13は黒色土器A類の高台部分、外底面に墨書が施されている。文字そのものの調査はしていないが、花押のような雰囲気のある文字である。高台は「ハ」の字状に開き、端部は丸みをもつ。復元高台径は6.4cmである。

④紡錘車 (15・16)

15・16は土師器の円盤状の底部を再利用した紡錘車である。共に半分程度しか残存していない。15は下面・側面・上面の外側から半分に研磨を施している。16は側面のみに研磨を施す。



第53図 II層出土遺物実測図(2) (1/3)

⑤棒状土錘 (17~22)

17はやや欠損しているが長さ4.7cm, 最大径1.5cm, 重さ8.4gを残す。18はヘラミガキを施し指頭圧痕を残すが, 長さ4.5cm, 最大径1.4cm, 重さ7.5gを測る。19はかなり欠損している。20は長さ3.6cm, 最大径が1.4cm, 重さ6.1gを測る。21は長さ3.2cm, 最大径が1.3cm, 重さ5.7gを測る。以上は胎土に石英や金雲母を含み茶褐色を呈し, 18を除き, ナデ調整を施す。内径は3mm程度である。

22は欠損しているが, 径2.3cm, 内径1.5mmで, 全面にヘラミガキを施す。胎土には石英, 金雲母, 砂粒を含み, 黒褐色を呈する。

⑥須恵器 (28)

須恵器は破片で4点しか出土しなかったが, これらはすべて同一個体であると思われる。28は壺の肩部であると思われる。外面はカキ目とナデが, 内面はヨコナデが施される。外面上端には自然釉が見られる。胎土は石英・長石他砂粒がわずかに含まれ, 灰褐色を呈する。

星塚遺跡出土土器に付着した赤色顔料について

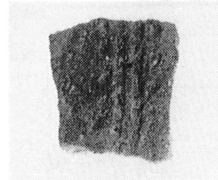
(分析者 大久保浩二)

星塚遺跡出土の深浦式系土器（縄文時代前期）2点に、赤色顔料の付着が認められるものがあった。その顔料について粒子の形状の観察と成分の分析を行い、顔料の種類の手配を試みた。その結果、2点とも酸化鉄を主成分とするベンガラであると思われるが、粒子の形状はパイプ状と粉末状をしていることがわかった。

分析に使用した機器は、鹿児島県立埋蔵文化財センター所蔵の日本電子製走査型電子顕微鏡（低真空タイプ・LV-SEM）とエネルギー分散型X線分析装置（EDS）である。X線分析は加速電圧20KV、有効時間100秒、取り出し角度20.2°、作動距離20.0mmの測定条件で行った。

試料

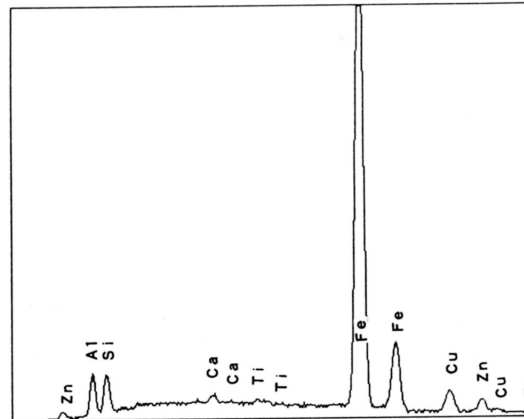
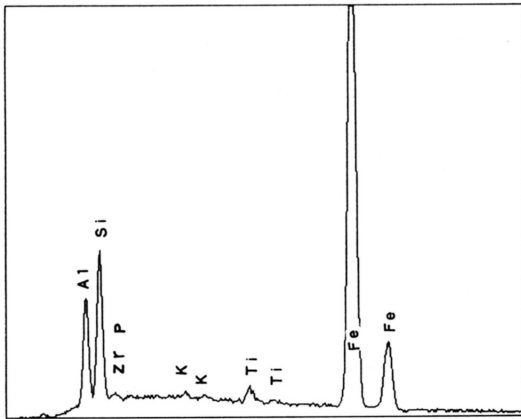
試料1・2とも深浦式系土器の外面上に付着した赤色顔料（試料1は本文第30図No.90の土器、試料2は右に示した写真の土器片に付着していたものである。）



X線スペクトル図

試料1

試料2

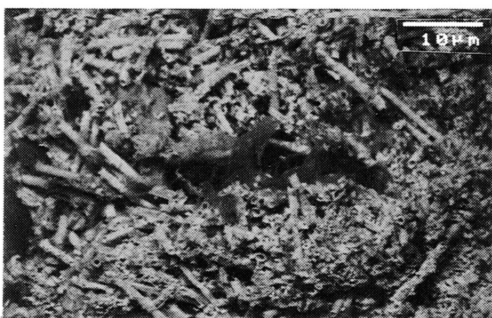


Feの顕著なピークが検出された。Al, Siはコンタミネーション（汚染）と思われる。

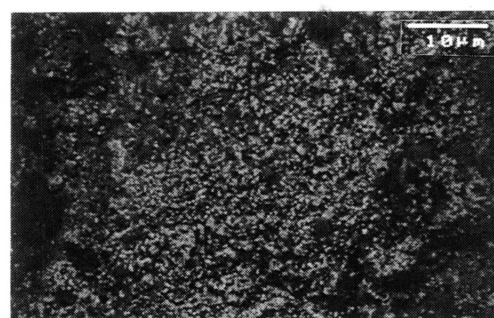
走査電子顕微鏡像

試料1

試料2



パイプ状粒子



粉末状の粒子

第Ⅷ章 発掘調査のまとめ

第1節 遺跡の概要

星塚遺跡は、現県道が横切る部分が最高所で、天降川に向かって傾斜している。現県道や宅地造成で削平は受けているが県道の北西へは丘陵が続き、遺跡付近は天降川を眼前にして東南に開けた絶好の立地となっている。遺跡での営みは、断片的ではあるが旧石器時代終末期の細石器から、縄文時代早期・前期・後期・晩期と続き、9世紀後半から10世紀頃に再び生活痕跡を残している。なかでも、狭い調査範囲にもかかわらず縄文早期と前期では、集石遺構や完形に近い土器等が多量に出土しており、この時期が本遺跡の中心であったことが窺われる。

第2節 旧石器時代

薩摩火山灰層（約11,000年前）下層のⅥ層から、旧石器時代の細石器が出土した。最も高所部分のAB1区～AB2区を中心に分布する旧石器時代終末期の段階の遺物である。これまで横川町では中尾田遺跡で細石核の出土が1点知られており、これに次ぐものである。特に、今回出土した畦原型の細石核は宮崎・鹿児島以南九州に限定して分布する独特の細石器技法であり、これまでの出土例では逸品である。本県では、鹿児島市加治屋園遺跡・同市加栗山遺跡・川内市成岡遺跡・志布志町中原遺跡などで出土している。

第3節 縄文時代早期

縄文時代早期は、アカホヤ火山灰層（Ⅲ層下部）の下のⅣ層に該当し、AB2区とAB6区の間を以て中心に遺物が出土した。そのうちのAB1区～AB2区には集石遺構が5基検出された。特に1号集石は、径120cmの円形プランで深さ40cmの掘り込みをもつ大形の集石遺構である。また掘り込みの下面に沿って比較的大型の石を敷石状に配置し、その中には小礫を総数386個投入した本格的な集石遺構である。他の集石は傾斜面に存在し、ほとんどが流出している。集石に伴う土器はⅢ類土器が比定されるが、手向山式土器に該当するものである。

早期出土土器は、Ⅰ類～Ⅲ類に類別された。Ⅰ類土器は、貝殻文系円筒土器で前平式土器に比定される。Ⅱ類は純粋な押型文土器の三点の出土であり、Ⅰ類土器同様に少量であり、遺跡の中心は用地外に求められる。Ⅲ類土器は本遺跡の早期では主体となる土器で、手向山式土器に該当する。手向山式土器は同町内の中尾田遺跡で多種多量に出土してほぼ形態が把握されたが、ミミズバレ隆帯文を除き、断片的ではあるがほぼ類似のものが出土している。さらに、形状から壺形土器と認定されるものも確認された。石器は、石鏃等と共に石匙二個が出土している。

第4節 縄文時代前期

前期該当の土器は、Ⅲ層上面から後期該当の土器と混在して出土している。そのため、形態

的に前期該当の土器を抽出する作業を行った。石器については時期が確定できないため、Ⅲ層出土として一括して取り扱った。

前期該当の土器は、Ⅰ類～Ⅲ類土器に区分された。そのうち、Ⅰ類とⅡ類土器は形態上は類似し、Ⅲ類土器とは区分される。Ⅰ類とⅡ類土器は滑石の有無で区分したが、形態上は類似する。そのうち、Ⅰ a類は曾畑式土器に先行するとされる野口式土器に酷似し、Ⅰ b類は文様構成上は滑石を含むⅡ b類に類似して曾畑式土器に比定される。Ⅱ a類は文様構成が第一文様帯に凹線文を巡らせ、それ以下に複合鋸歯文帯と凹線文帯を交互に施文し、下端に弧状の凹線文を連続施文し、胴部下半は底部まで無文である。複合鋸歯文は、曾畑式土器特有の折帯文とは異なる。胴部以下が無文で放置される点は曾畑式土器の古い段階とも考えられる。その結果、「Ⅰ a類（野口式）→Ⅱ b類（含滑石＝複合鋸歯文）→Ⅰ b類（無滑石）＝Ⅱ b類（含滑石）＝曾畑式土器の古い段階」の組列の可能性もある。Ⅱ b類の複合鋸歯文が曾畑式土器の文様要素に加わるものか、あるいはⅠ a類の中にも複合鋸歯文がみられるところからこれを繋ぐ一型式と独立する可能性も考えられる。いずれにせよ断片的な資料で初例のため今後の資料の増加をまって検討したい。

Ⅲ類土器は、その出土状態が特徴的であった。Ⅰ類およびⅡ類土器が遺跡全面に拡がって分布しているのに対し、Ⅲ類土器は5個体以上のものがそれぞれ分布を異にし、形態が把握できる状態の完形品に近い形で出土がみられた。いずれも、前期の深浦式系土器に該当する土器である。個体毎にはそれぞれ様相が異なる部分もみられるが、基本的には同一系統の土器として注目される。共通する器形は、口縁部は外反し、胴部は少し膨らみ、底部は尖底に近い丸底を呈する。さらに共通する文様は、曾畑式土器の前・後の論争をもつ尾田式土器の特徴とされる押引連点文（帯状列点文）を各個体に施文している。押引連点文のみで文様を構成しているものに91・93があり、89は刻目突帯文を口縁部に5条巡らせ胴部には押引連点文を施文する。90と92は押引連点文の文様間に沈線文を付加し、文様効果をあげている。さらに、押引連点文とともに双交弧文（96・97）も確認できる。また、これらすべてが、口縁内面に押引連点文を施文するという特徴をもつ。今のところ深浦式土器の形態の把握自体が流動的なところから、今回出土のⅢ類土器は深浦式土器の型式概念を求めるための好資料となることは間違いない。最後に、曾畑式土器との前後関係であるが、同一層内の出土であり層位的には判断は難しい。が、曾畑式土器が拡散した状態の出土に対し、Ⅲ類土器（深浦式系土器）は現位置を留めた状態での出土が確認されたことである。さらに、本遺跡出土のⅢ類土器が、曾畑式土器で定着した口縁内面施文の手法を受け継いでいる点などから曾畑式土器よりは後出の土器型式ではないかと理解している。

縄文時代後期該当で主体となる土器は市来式土器に該当し、ほぼ調査区の全面に出土しているが、比較的細片でまとまった出土はみられない。口縁部が「く」字に屈曲し、その部分が肥厚して文様が施文されるタイプである。文様の組み合わせは、大きく3種類に分けられる。1) 太形の凹線文にヘラや竹管状および貝殻腹縁の刺突文を組み合わせたもの。2) 竹管状と貝殻

腹縁の刺突文を組み合わせるもの。3) 貝殻腹縁やヘラ刺突文を単独に施文するものに分かれる。市来式土器以外の土器は少ないが、従来草野式土器とされるタイプ(100・101)や納曾式土器の口縁に類似するタイプ(105~107)もみられる。なお、後期該当の土器で市来式土器に伴って磨消縄文土器が1点もみられなかったのも本遺跡の特徴の一つといえる。

晩期の土器をここでは精製と粗製に分けたが、これらをひっくめて形態的特徴として口径が体部径より大きく、体部最大径部分に稜をもつものと、口径が体部径よりも小さく体部最大径部分に稜をもたず丸みをもつものが存在する。

前者は河口貞徳氏のいう「入佐式」に類似するが、口縁部分の外反が緩やかである点に差異がみられる。このうち、口縁部が極めて短い浅鉢8は宮之城町田間田遺跡に同様の形態のものを見出せる。

後者は河口氏のいう「黒川式」に当たると思われる。16を「中鉢」としたが、体部の属性が19と同様であり、この二者は同一様式の2形式としてとらえられる。16に類似したものを鹿屋市榎崎B遺跡にみることができる。

この他、孔列文土器、突帯文土器などがあつた。

これを考慮して、当遺跡の縄文時代晩期は「入佐式」の新段階から突帯文土器の時期に営みがなされ、「黒川式」に盛行するものであると考えたい。分布状態からしてAB1区・AB2区がその中心であつたと思われる。

Ⅲ層出土の石器には、石鏃・ピエス=エスキュー・石匙・スクレイパー・石斧・磨石・敲石があつた。これらがどの時期に属するものか層位的には不明であつた。石鏃は100点ほど出土しているが、側刃の形態に差異をみることができる。石材には黒曜石・タンパク石・チャート・安山岩・砂岩などが主であるが、ピエス=エスキューに大分県姫島産の黒曜石を素材とするものがあつた。この他、わずかではあるが付近の山ヶ野金山から採取されたとされる鉍石製のスクレイパー等もあり、素材に身近な地域で採取できるものを使用する場合や、遠方との交流によるものなどもあることを知ることができる。しかし、タンパク石や黒曜石は原産地が付近に存在することが知られておりほとんどの場合は周辺地域で採取できるものであろう。

Ⅱ層の遺物はAB4区に集中する。出土数は比較的少ない。出土遺物には土師器・黒色土器A類・紡錘車・土錘・須恵器などがある。土師器には完形品ではないが碗・甕などの器種があつた。碗は体部がまっすぐのびるものである。甕は外面の調整に刷毛目を施しているものである。黒色土器A類には高台が短くまっすぐ立つものであり、これには外底面に墨書が施してあつた。須恵器はわずかに1点の出土であつた。また、土錘の出土が割り合い多い点や、紡錘車の出土などから付近を流れる天降川での漁撈を想像させる。

南九州の歴史時代の土器の編年的研究はまだ不十分ではあるが、Ⅱ層の時期を検討すると、土師器碗の体部の形態や甕の調整法、黒色土器の形態、須恵器との量的関係、すなわち須恵器が減少しつつある時期である点から9世紀後半代の時期を与えたいと考える。

第2表 出土土器観察一覧(1)

種別	番号	出土区	層	標高	色調	焼成	胎土	外面調整	内面調整	
第12区	1	A3	Ⅲ		暗黄褐色	良好	長石・角閃石	条痕	ナデ	
	2	B1	Ⅳ	153.3	茶褐色	"	"	"	"	
	3	B4	"	150.94	"	"	"	"	"	
	4	B1	"	153.575	"	"	"	"	"	
	5	"	"	"	黄褐色	"	"	"	"	
	6	"	"	153.59	"	"	"	"	"	
第13区	7	A2	"	152.068	"	"	長石・角閃石・石英	山彩文(縦)	ケズリ	
	8	B2	Ⅲ	153.48	"	"	長石・角閃石	"	ナデ	
	9	"	"	153.385	"	"	"	ナデ	"	
第14区	10	"	"	153.265	"	"	長石・角閃石・石英	凹線文	ケズリ・ナデ	
	11	B1	"	153.415	"	"	長石・石英	"	ナデ	
	12	B2	Ⅳ	152.33	黒褐色	"	長石・石英・角閃石	"	"	
	13	A2	"	152.885	"	"	長石・金雲母	(斜位)	燃糸文	
	14	"	"	153.17	"	"	"	"	"	
	15	B2	Ⅱ下	153.62	"	"	長石・金雲母・石英	"	ナデ	
	16	A1	Ⅳ	153.23	灰褐色	"	"	条痕	条痕原体	
	17	A3	"	151.745	"	"	"	ナデ	"	
	18	A2	"	152.675	"	"	長石	条痕文	ナデ	
	19	A3	"	151.845	黒褐色	"	"	"	"	
第15区	20	A2	"	153.025	灰褐色	"	"	"	"	
	21	"	"	152.635	"	"	"	"	"	
	22	B2	Ⅲ	153.13	暗褐色	"	長石・石英	変形燃糸文	ヘラ削り	
	23	A1	Ⅳ	153.395	灰褐色	"	"	"	ナデ	
	24	B2	"	153.085	"	"	"	"	ヘラ削り	
	25	A1	"	153.215	"	"	"	"	ナデ	
	26	B3	"	151.85	"	"	"	"	削り	
	27	A6	"	150.495	赤褐色	"	長石	燃糸文	"	
	28	"	"	150.7	"	"	"	"	燃糸文・ナデ	
	29	"	"	150.49	"	"	"	"	"	
第16区	30	"	"	150.63	"	"	"	"	"	
	31	"	"	150.395	"	"	"	"	"	
	32	"	"	150.51	"	"	"	"	"	
	33	"	"	150.505	"	"	"	"	ナデ・凸凹あり	
	34	"	"	150.49	"	"	"	"	燃糸文・ナデ	
	35	"	"	150.36	"	"	"	"	"	
	36	B3	"	151.125	黒褐色	"	長石・石英	"	燃糸文	
	37	B5	"	151.185	灰褐色	"	長石・角閃石	"	"	
	38	A6	"	150.83	"	"	"	"	ナデ	
	39	B6	"	150.685	"	"	長石・雲母・石英	変形燃糸文	不明	
第17区	40	B2	"	152.215	黄褐色	"	"	"	削り	
	41	B5	"	150.995	"	"	"	"	ナデ	
	42	"	"	150.59	"	"	長石・角閃石	縄文押圧	"	
	43	A1・A2	"	153.245	暗褐色	"	長石・雲母・石英	山彩押型	山彩押型	
	44	A5	"	151.085	茶褐色	"	長石・石英	"	ナデ	
	第18区	45	A2	Ⅳ	152.37	茶褐色	良好	長石・石英・角閃石	山彩文	山彩口縁端部
		46	A8	"	150.06	"	"	長石・金雲母	"	ナデ
		47	A6	"	150.705	"	"	長石・石英・角閃石	"	山彩文
		48	A2	"	152.365	"	"	長石・石英	"	ナデ
		49	"	"	152.275	"	"	長石・金雲母・角閃石	"	"
50		A5	"	151.005	"	"	長石・金雲母	"	"	
51		B5	"	150.985	"	"	"	"	"	
52		A3	"	151.4	黒褐色	"	"	"	無文ナデ	
53		A1	"	153.26	"	"	"	"	"	
54		A3	"	151.43	"	"	長石・角閃石	"	ナデ	
第19区	55	A2	"	152.68	黄褐色	"	長石	"	山彩文	
	56	A1	"	153.33	茶褐色	"	長石・金雲母	"	ナデ	
	57	B6	"	150.495	"	"	"	山彩文(縦)	"	
	58	A3	Ⅴ	151.415	暗褐色	"	長石	"	"	
	59	B5	Ⅲ		灰褐色	"	"	"	山彩文	
	60	"	Ⅳ	150.965	黄褐色	"	長石・角閃石	山彩文(縦)	"	
	61	A2	"		暗褐色	"	長石・金雲母	山彩文	無文ナデ	
	62	"	"	152.915	茶褐色	"	"	"	山彩文	
	63	A6	"	150.59	"	"	長石・角閃石	山彩文(縦)	ナデ	
	64	B6	"	150.755	灰褐色	"	長石	"	"	
第20区	65	B1	"	153.64	茶褐色	"	長石・金雲母	"	"	
	66	"	"	153.655	黄褐色	"	長石	"	"	
	67	B5	"	151.095	"	"	長石・金雲母	"	"	
	68	A6	"	150.495	赤褐色	"	長石・角閃石	山彩文(横)	"	
	69	A2	"	152.365	茶褐色	"	長石・金雲母	山彩文	ナデ(指紋)	
	70	B2	"	152.795	"	"	長石・角閃石	菱彩文	ナデ	
	71	B3	"	151.78	黄褐色	"	長石・石英	山彩文(縦)	ナデ(ひれあり)	
	72	A6	"	150.83	"	"	長石	"	ナデ	
	73	"	"	150.635	茶褐色	"	長石・チャート	"	"	
	74	B2	Ⅲ	150.405	"	"	長石・金雲母・角閃石	山彩文	"	
第21区	75	A2	Ⅳ	152.27	"	"	"	山彩文(縦)	"	
	76	B5	Ⅲ	152.265	"	"	長石・角閃石	"	"	
	77	"	Ⅳ	151.125	黄褐色	"	"	"	"	
	78	A6	"	150.77	"	"	"	"	"	
	79	B4	"	150.98	茶褐色	"	長石・金雲母	山彩文	"	
	80	A6	"	150.965	褐色	"	長石	山彩文(縦)	"	
	81	B6	"	150.71	茶褐色	"	長石・金雲母	菱彩文	剥離	
	82	B2	Ⅲ		暗褐色	"	長石・石英	山彩押型	ナデ	
	83	A1	Ⅳ	153.37	茶褐色	"	長石・金雲母	山彩文(縦)	"	
	84	B6	"	150.725	明茶褐色	"	"	"	菱彩文	
第22区	85	B2	"	152.65	茶褐色	"	"	山彩文(縦)	"	
	86	B3	"	151.78	黄褐色	"	長石	"	山彩文(縦)	
	87	A2	"	152.94	茶褐色	"	長石・金雲母	菱彩文	ナデ	
	88	B6	"	150.715	明茶褐色	"	"	"	ナデ・剥離	

第3表 出土土器觀察一覽(2)

掘出	番号	出土区	層	標高	色調	焼成	胎土	外面調整	内面調整	掘出	番号	出土区	層	標高	色調	焼成	胎土	外面調整	内面調整
第18区	88	A 1	Ⅳ	153.32	茶褐色	良好	長石・金雲母	山形文	ナデ	第25区	28	A 3	Ⅳ	151.79	灰褐色	良好	長石・石英	ナデ	ナデ
	89	B 6	Ⅴ	151.78	明茶褐色	"	"	山形・菱形	"		29	A 4	Ⅲ	152.28	"	"	長石・角閃石	"	"
	90	A 6	Ⅳ	150.69	茶褐色	"	"	山形・菱形	" (剥離)		30	B 2	"	153.185	"	"	長石・石英・角閃石	"	"
	91	B 2	"	151.055	黄褐色	"	"	"	"		31	"	"	153.585	"	"	"	"	"
	92	"	"	151.193	茶褐色	"	"	"	"		32	A 3	"	152.305	"	"	"	"	"
	93	A 3	"	152.075	黄褐色	"	長石	山形文(縦)	"		33	B 6	"	151.885	"	"	"	"	"
	94	A 2	"	152.87	"	"	長石・角閃石	山形文	"		34	A 5	"	152.17	茶褐色	"	長石・石英	"	"
	95	B 6	"	150.83	茶褐色	"	長石・金雲母	ナデ	"		35	B 5	"		灰褐色	"	長石・角閃石	"	"
	96	B 2	"	153.015	褐色	"	長石	不明	"		36	A 5	"	152.17	黒褐色	"	長石	"	"
	97	B 5	"	151.01	灰褐色	"	長石・金雲母	山形・菱形	" (剥離)		37	A 7	"	152.22	灰褐色	"	長石・石英	"	"
第19区	98	B 6	"	150.43	暗褐色	"	長石・石英	山形文(縦)	" (")	38	B 3	"	152.415	暗褐色	"	長石・石英・角閃石	"	"	
	99	A 2	"	151.915	茶褐色	"	"	ナデ	ナデ	39	B 2	"	153.495	茶褐色	"	長石・角閃石	"	"	
	100	"	"	152.4	暗褐色	"	長石・金雲母	"	"	第26区	40	A 1	Ⅲ下	153.426	黄褐色	"	長石	"	"
	101	"	"	152.01	茶褐色	"	長石・角閃石	山形文	"		41	B 1	Ⅲ	153.47	"	"	"	"	
	102	"	"	152.725	暗褐色	"	長石・金雲母	ナデ	"		42	B 2	"	153.285	暗褐色	"	長石・角閃石	工具ナデ	"
	103	"	"	151.935	黒褐色	"	長石	"	"		43	B 3	"	152.375	"	"	"	"	
	104	"	"								44	B 1	"	153.89	黒褐色	"	長石	ナデ	"
	1	B 2	Ⅲ	153.6	暗褐色	良好	長石・角閃石	ナデ	ナデ		第27区	45	A 3	"	152.445	灰褐色	"	"	"
2	A 3	"	152.16	黄褐色	"	長石	"	工具ナデ	46			"	"	152.1	暗褐色	"	"	"	
3	B 3	"	152.305	茶褐色	"	長石・角閃石	"	ナデ	47			"	"	152.06	灰褐色	"	長石・角閃石	"	"
4	B 2	"	153.6	暗褐色	"	"	"	"	48	B 3		"	152.585	暗褐色	"	長石	"	"	
5	A 5	"	152.335	灰褐色	"	長石	"	"	49	B 4		Ⅱ		明褐色	"	"	"	"	
6	B 6	"	151.975	暗褐色	"	"	"	"	第28区	50		A 7	Ⅲ	151.96	茶褐色	"	石英	"	"
7	A 3	"	152.175	"	"	"	"	"		51		B 1	Ⅲ上	154.05	"	"	長石・角閃石	"	"
8	B 3	"	152.285	茶褐色	"	"	"	"		52		A 7	Ⅲ	152.03	黄褐色	"	長石・石英	"	"
9	B 1	"	153.89	"	"	"	"	"		53	B 3	"	152.09	黒褐色	"	"	"	"	
10	B 3	"	152.55	暗褐色	"	長石・角閃石	"	"		54	A 6	"	152.02	"	"	長石・角閃石	"	"	
11	"	"	152.475	黄褐色	"	"	"	"		55	A 2	"	152.575	"	"	長石・石英	ナデ	ナデ	
12	B 7	"	152.075	黒褐色	"	長石	"	"		56	"	"	152.22	赤褐色	"	滑石	"	"	
13	B 5	"	152.335	"	"	"	"	"		第29区	57	A 3	"	152.2	茶褐色	"	長石・金雲母	"	"
14	A 2	"	152.82	"	"	長石・石英	"	"	58		B 2	"	153.59	"	"	"	"		
15	A 3	"	152.415	灰褐色	"	長石・角閃石	"	"	59		B 3	"	152.29	"	"	長石・金雲母・滑石	"	"	
16	B 2	"	152.765	"	"	"	"	"	60		B 6	"	152.1	"	"	長石・角閃石・滑石	"	"	
17	A 3	"	152.23	黄褐色	"	"	"	"	61		A 3	"	152.455	"	"	長石・金雲母	"	"	
18	B 2	"	153.175	灰褐色	"	"	"	"	62		A 2	"	153.51	"	"	滑石	"	"	
19	A 1	"	153.955	褐色	"	"	"	工具ナデ	63		B 3	"	152.605	"	"	"	"	"	
20	A 3	"	152.245	灰褐色	"	"	"	ナデ	第30区		64	B 4	Ⅱ		"	"	"	"	"
21	B 3	"	152.45	"	"	"	"	"		65	B 3	Ⅲ	152.68	"	"	"	"	"	
22	A 6	"	152.02	暗褐色	"	"	"	"		66	一般	"		"	"	"	"	"	
23	A 3	"	152.305	黄褐色	"	"	"	"		67	A 5	"	152.2	褐色	"	滑石・金雲母	"	"	
24	B 2	"	153.47	茶褐色	"	長石	"	"		68	"	"	152.065	茶褐色	"	長石・金雲母	"	"	
25	"	"	152.91	"	"	長石・石英	"	"		69	B 6	"	152.1	"	"	長石・角閃石・滑石	"	"	
26	A 2	Ⅳ	152.605	灰黄褐色	"	長石	"	"		70	B 4	"	152.38	"	"	滑石	"	"	
27	"	Ⅲ	152.832	暗褐色	"	"	"	"		71	"	"	152.18	褐色	"	長石・滑石	"	"	

第4表 出土土器観察一覽(3)

種別	番号	出土区	層	標高	色調	焼成	胎土	外面調整	内面調整	
第27区	72	B4	Ⅲ	152.155	茶褐色	良好	長石・角閃石・滑石	ナデ	ナデ	
	73	"	"	152.48	暗茶褐色	"	長石・滑石・金雲母	"	"	
	74	"	"	152.145	"	"	"	"	"	
	75	"	"	152.035	"	"	"	"	"	
	76	A3	"	152.29	茶褐色	"	"	"	"	
	77	A6	"	151.935	褐色	"	褐色	"	"	
	78	A5	"	152.455	暗茶褐色	"	長石・石英・金雲母	"	"	
	79	"	"	152.285	"	"	"	"	"	
	80	A6	"	152.13	"	"	"	"	"	
	81	"	"	152.1	"	"	"	"	"	
第28区	82	B6	"	152.11	"	"	長石・滑石・金雲母	"	"	
	83	B8	"	152.21	"	"	"	"	"	
	84	B5	"	152.285	"	"	"	"	"	
	85	A3	"	152.23	明茶褐色	"	"	"	"	
	86	B5	"	151.895	"	"	"	"	"	
	87	B2	"	153.415	"	"	"	"	"	
	88	A4	"	152.19	"	"	"	"	"	
	第30区	89	A6	"	152.085	"	"	長石・石英	"	"
		90	B3	"	152.385	暗灰褐色	"	"	"	"
		91	A6	"	152.16	暗褐色	"	"	"	"
92		A7	"	152.06	"	"	"	"	"	
93		A3	"	152.145	茶褐色	"	"	"	"	
94		B4	"	152.135	明茶褐色	"	"	"	"	
95		"	"	152.225	"	"	"	"	"	
96		"	"	152.235	"	"	"	"	"	
97		"	V	152.26	"	"	"	"	"	
98		A8	Ⅲ	152.12	"	"	"	条痕	条痕	
第33区	99	B7	"	152.14	灰茶褐色	"	"	ナデ	ナデ	
	100	B6	"	151.94	"	"	"	"	"	
	101	A6	"	152.06	"	"	"	"	"	
	102	B6	表		"	"	"	"	"	

第35区	1	A3	Ⅲ	152.625	暗茶褐色	良好	長石・石英	ナデ	条痕
	2	B6	"	152.15	"	"	長石	工具ナデ	工具ナデ
	3	A3	"	152.23	茶褐色	"	"	ナデ	ナデ
	4	A8	"	151.825	暗褐色	"	長石・石英	"	ヘラ削り
	5	表	"		茶褐色	"	長石・角閃石	"	ナデ
	6	B7	"	152.065	黄褐色	"	長石	"	"
	7	A3	"	152.495	茶褐色	"	"	"	"
	8	A1	"	153.73	暗褐色	"	"	"	"
	9	A8	"	152.07	茶褐色	"	"	"	"
	10	B3	Ⅱ	152.64	赤褐色	"	"	"	"
	11	A4	Ⅲ	152.29	黒褐色	"	"	"	工具ナデ
	12	A1	"	153.97	暗褐色	"	"	"	工具ナデ

種別	番号	出土区	層	標高	色調	焼成	胎土	外面調整	内面調整
第35区	13	A3	Ⅲ	152.535	暗褐色	良好	長石・金雲母	工具ナデ	ナデ
	14	"	"	152.71	"	"	長石・角閃石	"	"
	15	B7	"	152.175	黒褐色	"	長石・石英	ナデ	"
	16	A4	"	152.36	"	"	長石	"	"
	17	B1	"	154.015	暗赤褐色	"	"	工具ナデ	"
	18	A2	"	152.945	暗茶褐色	"	長石・石英	ナデ	"
	19	B2	"	153.67	暗褐色	"	"	条痕	条痕
	20	A2	"	153.635	茶褐色	"	"	ナデ	ナデ
	21	A6	"	152.165	暗褐色	"	"	"	"
	22	B6	"	152.095	茶褐色	"	長石・金雲母	"	"
第36区	23	A5	Ⅱ	152.46	"	"	長石	工具ナデ	工具ナデ
	24	A8	Ⅲ	152.14	"	"	長石・石英	ヘラ磨き	ナデ
	25	B7	"	152.11	暗黄褐色	"	長石	工具ナデ・条痕	工具ナデ・条痕
	26	"	"	152.285	茶褐色	"	長石・石英・金雲母	工具ナデ	工具ナデ
	27	"	"	152.09	黄褐色	"	長石	条痕	条痕
	28	A7	"	152.27	茶褐色	"	長石・石英	工具ナデ	ナデ
	29	A6	"	152.025	暗褐色	"	"	ナデ	"
	30	B8	"	151.755	茶褐色	"	長石	"	"
	31	A8	"	152.25	"	"	長石・石英	工具ナデ・条痕	工具ナデ・条痕
	32	B7	"	151.945	"	"	長石	ナデ	ナデ
第37区	33	A3	"	152.31	"	"	長石・石英	"	"
	34	B7	"	152.08	"	"	"	工具ナデ	工具ナデ
	35	B6	"	152.215	"	"	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ
	36	A6	"	152.52	黒褐色	"	長石・角閃石	"	"
	37	B7	"	152.19	黄褐色	"	"	"	"
	38	A2	"	153.52	茶褐色	"	長石・金雲母	"	"
	39	A3	"	153.705	"	"	長石・石英・金雲母	"	"
	40	A2	"	153.675	"	"	長石・金雲母	工具ナデ	工具ナデ
	41	B6	"	152.13	"	"	長石	ナデ	ナデ
	42	A7	"	151.675	"	"	長石・石英	工具ナデ	工具ナデ
第38区	43	A2	"	152.8	暗茶褐色	"	長石	"	"
	44	B3	"	152.37	暗褐色	"	長石・石英・角閃石	ナデ	ナデ
	45	A8	"	152.25	"	"	長石	"	"
	46	B1	"	153.965	灰褐色	"	"	"	"
	47	A8	"	152.16	黒褐色	"	"	"	"
	48	"	"	152.1	"	"	長石・石英	"	"
	49	B2	"	153.55	暗褐色	"	"	"	"
	50	B7	"	152.285	茶褐色	"	長石・金雲母	工具ナデ	工具ナデ
	51	A4	"	152.29	黄褐色	"	長石	"	"
	52	B2	"	153.39	暗褐色	"	"	"	"
第38区	53	B5	"	152.3	茶褐色	"	"	"	"
	54	B6	"	152.185	"	"	"	"	"
	55	B2	"	152.24	"	"	長石・石英	条痕	ナデ
	56	B6	"	152.09	褐色	"	長石	ナデ	"

第5表 出土土器観察一覽(4)

種別	番号	出土区	層	標高	色調	焼成	胎土	外面調整	内面調整	種別	番号	出土区	層	標高	色調	焼成	胎土	外面調整	内面調整
第38区	57	A1	Ⅲ	153.655	褐色良	好	長石	ナデ	ナデ	第40区	101	AB5	Ⅲ	153.97	茶褐色良	好	長石	工具ナデ	工具ナデ
	58	A3	"	152.335	茶褐色	"	長石・石英	"	"		102	A6	"	152.21	暗褐色	"	"	ナデ	ヘラナデ
	59	B2	"	153.515	"	"	長石	工具ナデ	工具ナデ		103	"	"	152.17	黒褐色	"	"	工具ナデ	工具ナデ・条痕
	60	A1	"	153.795	"	"	"	"	"		104	A3	"	152.515	暗褐色	"	長石・金雲母	ナデ	工具ナデ
	61	A5	"	"	黄褐色	"	長石	ナデ	ナデ		105	A8	"	152.23	明褐色	"	長石	"	ナデ
	62	A4	"	152.155	"	"	"	"	"		106	"	"	152.21	茶褐色	"	"	"	"
	63	A8	"	151.97	"	"	"	"	"		107	"	"	152.27	"	"	"	"	"
	64	A5	"	152.41	黒褐色	"	"	"	"		108	"	"	152.14	褐色	"	長石・石英	"	"
	65	B7	"	152.095	茶褐色	"	"	"	"		109	B7	"	152.01	黄褐色	"	長石	"	"
	66	A6	"	152.25	明褐色	"	"	"	"		110	B3	"	"	"	"	"	"	"
第39区	67	A3	"	152.44	黄褐色	"	"	条痕	条痕	第41区	111	A1	"	153.96	"	"	"	"	"
	68	B8	"	151.975	茶褐色	"	長石・金雲母	ナデ	工具ナデ		112	B5	"	152.27	赤褐色	"	長石・石英	"	"
	69	B2	"	153.52	"	"	長石・石英	"	ヘラ削り		113	A2	"	152.88	茶褐色	"	長石	条痕	工具ナデ
	70	A6	"	152.005	黒褐色	"	"	"	ナデ		114	A8	"	152.12	明褐色	"	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ
	71	A5	"	152.26	暗黄褐色	"	"	"	工具ナデ		115	B7	"	152.17	茶褐色	"	長石	条痕	工具ナデ
	72	B7	"	152.11	黒褐色	"	長石	条痕	"		116	A1	"	153.675	赤褐色	"	"	"	ナデ
	73	A5	"	152.18	茶褐色	"	"	工具ナデ	ナデ		117	B3	"	152.62	黄褐色	"	"	"	"
	74	A6	"	152.21	"	"	"	ナデ	"		118	"	"	152.785	茶褐色	"	"	"	"
	75	A8	"	152.25	暗褐色	"	長石・角閃石	工具ナデ	工具ナデ		119	A7	"	152.22	褐色	"	長石・石英	"	"
	76	B7	"	152.115	茶褐色	"	長石	ナデ	ナデ		120	B7	"	151.485	黄褐色	"	"	工具ナデ	工具ナデ
第40区	77	B8	"	152.555	暗褐色	"	長石・石英	"	"	121	A2	"	153.585	暗褐色	"	長石	ナデ	ナデ	
	78	B4	"	152.305	茶褐色	"	長石	"	"	122	"	"	153.65	茶褐色	"	長石・石英	"	"	
	79	B7	"	152.16	黄褐色	"	"	工具ナデ	工具ナデ	123	B6	"	152.14	"	"	"	"	工具ナデ	
	80	B4	"	142.325	茶褐色	"	"	"	"	124	B7	"	152.12	灰褐色	"	長石	工具ナデ	"	
	81	A4	"	152.22	"	"	"	"	ナデ	125	A2	"	153.69	茶褐色	"	長石・角閃石	ナデ	ナデ	
	82	A1	"	154.009	"	"	"	"	"	126	A1	"	154.005	黄褐色	"	長石	"	"	
	83	B2	"	152.845	灰褐色	"	"	ナデ	"										
	84	B8	"	152.02	茶褐色	"	長石・金雲母	"	"										
	85	B4	"	"	暗褐色	"	長石	工具ナデ	"										
	86	"	"	152.32	"	"	長石・石英	ナデ	"										
第41区	87	A3	"	152.735	"	"	長石	工具ナデ	"										
	88	B8	"	151.98	黒褐色	"	"	ナデ	"										
	89	A2	"	153.6	"	"	長石・金雲母	工具ナデ	"										
	90	A4	"	152.295	黄褐色	"	長石	工具ナデ・条痕	"										
	91	A3	"	152.585	"	"	"	工具ナデ	工具ナデ										
	92	B2	"	152.88	茶褐色	"	"	ナデ	"										
	93	B4	"	152.315	"	"	長石・石英	工具ナデ	ナデ										
	94	B5	"	152.375	赤褐色	"	長石	"	工具ナデ										
	95	A1	"	153.531	茶褐色	"	"	ナデ	ナデ										
	96	B3	"	152.545	"	"	"	"	"										
第42区	97	B7	"	152.16	黄褐色	"	"	工具ナデ	工具ナデ										
	98	A3	"	152.27	茶褐色	"	"	ナデ	"										
	99	A2	Ⅱ	153.0	"	"	"	"	ナデ										
	100	A8	Ⅲ	151.98	"	"	"	工具ナデ	工具ナデ										

第6表 出土土器観察一覧(5)

種別	番号	出土区	層	色調	胎土	調整(外)/(内)	備考
第43	1	A-2	Ⅱ	黒褐・茶褐	石英・長石・砂粒	ヘラミガキ/ヘラミガキ	
	2	B-2	Ⅲ	乳茶褐	石英・精良土	ヘラミガキ/ヘラミガキ	
	3	A-2	Ⅱ	黒褐	石英・金雲母・長石	ヘラミガキ/ヘラミガキ	
	4	A-5	Ⅱ	灰褐・淡茶褐	金雲母・石英・精良土	ヘラミガキ/ヘラミガキ	
	5	A-4	Ⅱ	乳茶褐	長石・石英・金雲母	ヘラミガキ/ヘラミガキ	
	6	B-4	Ⅱ	黒褐	石英・金雲母・精良土	ヘラミガキ/ヘラミガキ	
	7	A-2	Ⅱ	黒褐	精良土	ヘラミガキ/ヘラミガキ	
	8	A-1	Ⅲ	淡茶褐	石英・金雲母・精良土	ヘラミガキ/ヘラミガキ	
	9	B-1	Ⅱ	淡茶褐	石英・金雲母・精良土	ヘラミガキ/ヘラミガキ	
	10	A-4	Ⅱ	赤茶褐	石英・角閃石・長石・金雲母	ヘラミガキ/ヘラミガキ	
	11	A-2	Ⅱ	灰茶褐	角閃石・石英・金雲母・砂粒	ヘラミガキ/ヘラミガキ	
	12	A-2	Ⅱ	黒褐	角閃石・金雲母・長石・石英	ヘラミガキ/ヘラミガキ	
	13	A-3	Ⅲ	乳茶褐・灰褐	石英・軽石・精良土	ヘラミガキ/ヘラミガキ	
	14	A-5・6	Ⅱ	黒褐・暗茶褐	石英・金雲母・砂粒	ヘラミガキ/ヘラミガキ	
	15	B-2	Ⅲ	乳茶褐・黒褐	金雲母・角閃石・精良土	ヘラミガキ/ヘラミガキ	
	16	A-1	Ⅲ	黒褐	石英・精良土	ヘラミガキ/ヘラミガキ	
	17	A-6	Ⅲ	黒褐・茶褐	石英・金雲母・砂粒	ヘラミガキ/ヘラミガキ	
	18	A-8	Ⅲ	乳茶褐	石英・金雲母・小礫・精良土	ヘラミガキ/ヘラミガキ	
	19	A-38-1	Ⅰ	灰褐	長石・角閃石・金雲母・精良	ヘラミガキ/ヘラミガキ	
	20	A-2	Ⅱ	黒褐	角閃石・金雲母・石英・精良	ヘラミガキ/ヘラミガキ	
	21	A-3	Ⅱ	茶褐・灰褐	角閃石・金雲母・石英	ヘラミガキ/ヘラミガキ	
	22	B-1・3	Ⅱ	黒褐・灰茶褐	長石・金雲母・精良土	ヘラミガキ/ヘラミガキ	
	23	B-1	Ⅲ	黒灰褐	長石・精良土	ヘラミガキ/ヘラミガキ	
	24	A-5	Ⅱ	茶褐	石英・長石・金雲母・角閃石	ヘラミガキ/ヘラミガキ	
25	B-2	Ⅱ	茶褐・灰褐	石英・角閃石・金雲母・礫	ヘラミガキ/ヘラミガキ		
26	A-2	Ⅱ	茶褐	石英・金雲母・精良土	ヘラミガキ/ヘラミガキ		
27	B-4	Ⅲ	茶褐・黒褐	石英・長石・角閃石	ナデ・棒状工具痕/ナデ		
28	A-1	Ⅲ	茶褐・黒褐	石英・軽石・角閃石	工具ナデ/工具ナデ・ナデ		
29	B-4	Ⅱ	黒褐	角閃石・金雲母・精良土	ヘラミガキ/ヘラミガキ	穿孔有り	
30	一般	-	黒褐・茶褐	雲母・石英	ナデ/ナデ		
31	一般	-	茶褐	雲母・石英	ナデ/ナデ		
32	A-2	Ⅱ	暗茶褐	石英・角閃石・金雲母	ナデ/ヘラミガキ		
33	A-4	Ⅱ	黒褐・暗茶褐	雲母・砂粒	ナデ/ヘラミガキ		
34	A-2	Ⅱ	黒褐・暗茶褐	石英・角閃石・礫	工具ナデ/工具ナデ		
35	A-2	Ⅱ	黒褐・暗茶褐	長石	工具ナデ/工具ナデ		
第44	36	A-2	Ⅲ	暗茶褐	金雲母・砂粒	ナデ/ナデ	孔列文
	37	A-2	Ⅲ	黒褐・淡茶褐	石英・雲母	ナデ/工具ナデ	
	38	B-6	Ⅱ	黒褐・茶褐	金雲母・角閃石	条痕/条痕	
	39	A-1	Ⅲ	暗茶褐	角閃石・石英・金雲母	ヘラミガキ/ヘラミガキ	
	40	B-6	Ⅱ	黒褐・赤茶褐	石英・雲母	ヘラミガキ/ヘラミガキ	
	41	A-7	Ⅲ	黒褐・茶褐	石英・砂粒	ナデ/ナデ	突帯文
	42	B-2	Ⅱ	黒褐・茶褐	石英・雲母	ナデ/ナデ	突帯文
	43	A-2	Ⅱ	黒褐・乳茶褐	石英・軽石・砂粒	ナデ/ナデ	突帯文
	44	A-2	Ⅲ	暗茶褐	石英・金雲母	工具ナデ/ナデ	
	45	A-6	Ⅲ	黒褐・淡茶褐	石英・雲母	工具ナデ/ナデ	
	46	A-2	Ⅲ	黒褐・淡茶褐	砂粒多い	条痕文/条痕文	
	47	A-2	Ⅲ	黒褐・茶褐	石英・雲母・砂粒	条痕文・工具ナデ/条痕文・工具ナデ	
	48	B-4	Ⅱ	灰褐・茶褐	石英・角閃石	ナデ/ナデ	
	49	A-6	Ⅲ	暗茶褐・黒褐	石英・角閃石・金雲母	工具ナデ/ナデ	
	50	B-4	Ⅱ	暗茶褐・黒褐	石英・金雲母・角閃石	ナデ/ナデ	
	51	A-1	Ⅲ	黒褐・灰褐	石英・礫	工具ナデ/工具ナデ	
	52	A-6	Ⅲ	黒褐	角閃石・金雲母・軽石	工具ナデ/ナデ	
	53	B-5	Ⅲ	茶褐	石英・雲母・礫	工具ナデ/工具ナデ	
	54	A-5	Ⅲ	黒褐・茶褐	石英・雲母・角閃石・砂粒	工具ナデ/ナデ	
	55	B-1	Ⅲ	暗茶褐	石英・雲母	工具ナデ/工具ナデ	
	56	A-6	Ⅲ	黒褐・淡茶褐	石英・雲母・砂粒	ナデ・工具ナデ/ナデ・工具ナデ	
	57	A-6	Ⅲ	黒褐・淡茶褐	雲母・石英・角閃石・砂粒	工具ナデ/ナデ	
	58	B-4	Ⅲ	暗茶褐・灰褐	角閃石・雲母・石英	ナデ/ナデ	
	59	B-4	Ⅲ	黒褐・茶褐	石英・角閃石・金雲母	ナデ/ナデ	
60	B-4	Ⅲ	灰褐・茶褐	石英・雲母	工具ナデ/ナデ		
61	B-4	Ⅲ	黒褐・茶褐	石英・雲母・角閃石・礫	ナデ/ナデ		
62	A-6	Ⅲ	黒褐・淡茶褐	石英・金雲母・砂粒	ナデ/ヘラミガキ		
63	B-1	Ⅲ	暗茶褐	石英・雲母	工具ナデ/工具ナデ		
64	A-1	Ⅲ	黒褐・暗茶褐	石英・角閃石	ナデ/ナデ		
65	B-4	Ⅲ	黒褐・淡茶褐	石英・角閃石・長石・礫	ナデ/工具ナデ		
66	A-3	Ⅲ	黒褐・淡茶褐	金雲母	工具ナデ/ナデ		
67	B-4	Ⅲ	黒褐	雲母・角閃石・石英・礫	工具ナデ/工具ナデ		
68	B-1	Ⅲ	黒褐・淡茶褐	石英・角閃石・砂粒	ナデ/内面不明		
69	B-5・6	Ⅲ	黒褐・淡茶褐	石英・雲母	ナデ/ナデ		
70	B-3	Ⅲ	灰褐・茶褐	石英・雲母・砂粒	ナデ/ナデ		
71	A-5	Ⅲ	茶褐	長石・長石・礫	ナデ/ナデ		

第7表 出土石器法量表

種別	番号	出土区	層	石 材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	
第47図	1	B-3	Ⅱ	タンバク石	1.4	1.1	0.4	0.3	
	2	A-7	Ⅱ	チャート	2.1	(1.4)	0.3	(0.7)	
	3	A-2	Ⅱ	黒曜石	2.0	(1.4)	0.3	(0.6)	
	4	A-4	Ⅱ	黒曜石	2.1	(1.5)	0.4	(0.6)	
	5	A-6	Ⅱ	黒曜石	(2.1)	1.8	0.5	(1.2)	
	6	A-8	Ⅱ	黒曜石	2.2	(1.5)	0.4	(0.9)	
	7	B-2	Ⅱ	チャート	2.0	1.6	0.4	0.9	
	8	A-2	Ⅱ	頁岩	1.5	1.7	0.3	0.6	
	9	A-2	Ⅱ	チャート	1.4	1.4	0.3	0.6	
	10	A-4	Ⅱ	チャート	1.8	1.5	0.4	0.9	
	11	A-2	Ⅱ	頁岩	1.8	1.4	0.4	0.6	
	12	A-4	Ⅱ	頁岩	1.4	1.4	0.4	0.7	
	13	B-3	Ⅱ	チャート	1.7	1.3	0.3	0.6	
	14	A-5	Ⅱ	タンバク石	2.1	1.6	0.4	1.2	
	15	A-2	Ⅱ	頁岩	(1.8)	1.3	0.4	(0.7)	
	16	A-2	Ⅱ	タンバク石	2.3	1.6	0.4	1.0	
	17	A-2	Ⅱ	チャート	2.1	1.4	0.3	1.0	
	18	B-7	Ⅱ	タンバク石	(3.5)	1.8	0.4	(2.1)	
	19	A-5	Ⅱ	頁岩	2.3	1.6	0.4	0.9	
	20	B-4	Ⅱ	頁岩	2.2	1.5	0.4	0.8	
	21	B-2	Ⅱ	タンバク石	(1.9)	1.3	0.3	(0.4)	
	22	A-6	Ⅱ	タンバク石	1.9	1.6	0.4	0.5	
	23	A-3	Ⅱ	タンバク石	2.4	1.4	0.3	0.5	
	24	A-2	Ⅱ	タンバク石	2.6	1.7	0.4	0.6	
	25	A-1	Ⅱ	タンバク石	2.3	1.6	0.4	0.7	
	26	A-5	Ⅱ	黒曜石	(1.4)	1.4	0.3	(0.4)	
	27	B-3	Ⅱ	タンバク石	1.5	(1.1)	0.2	(0.2)	
	28	B-3	Ⅱ	チャート	1.6	(1.2)	0.3	(0.3)	
	29	B-3	Ⅱ	チャート	1.8	(1.1)	0.3	(0.2)	
	30	B-3	Ⅱ	チャート	1.8	1.2	0.3	0.3	
	31	B-3	Ⅱ	タンバク石	1.2	1.3	0.3	0.3	
	32	A-1	Ⅱ	チャート	1.1	1.3	0.2	0.2	
	33	A-1	Ⅱ	チャート	1.4	1.4	0.3	0.5	
	34	A-5	Ⅱ	黒曜石	1.2	1.1	0.3	0.2	
	35	A-7	Ⅱ	チャート	0.9	1.1	0.2	0.1	
	36	A-4	Ⅱ	チャート	1.2	(1.1)	0.2	(0.2)	
	37	A-3	Ⅱ	タンバク石	1.8	1.5	0.3	0.5	
第48図	38	B-7	Ⅱ	タンバク石	1.9	1.3	0.3	0.5	
	39	B-1	Ⅱ	チャート	1.8	1.7	0.4	1.0	
	40	B-4	Ⅱ	チャート	2.3	2.0	0.4	1.4	
	41	A-1	Ⅱ	タンバク石	2.4	(1.3)	0.3	(0.7)	
	42	B-2	Ⅱ	タンバク石	1.4	1.3	0.2	0.2	
	43	B-3	Ⅱ	黒曜石	1.4	1.2	0.3	0.3	
	44	B-6	Ⅱ	黒曜石	(1.4)	1.6	0.3	(0.3)	
	45	B-8	Ⅱ	黒曜石	1.8	1.3	0.3	0.5	
	46	B-2	Ⅱ	頁岩	1.9	1.4	0.4	0.6	
	47	B-2	Ⅱ	タンバク石	2.2	1.5	0.4	1.1	
	48	A-2	Ⅱ	チャート	2.7	1.9	0.5	1.6	
	49	A-3	Ⅱ	頁岩	(1.8)	1.5	0.3	(0.6)	
	50	A-2	Ⅱ	チャート	1.3	1.4	0.5	1.0	
	51	B-2	Ⅱ	黒曜石	1.7	1.5	0.5	0.9	
	52	B-6	Ⅱ	頁岩	2.0	(1.4)	0.2	(0.5)	
第49図	53	B-5	Ⅱ	タンバク石	(1.8)	(1.4)	0.5	(0.3)	
	54	A-5	Ⅱ	チャート	1.7	(1.3)	0.4	(0.5)	
	55	B-6	Ⅱ	タンバク石	2.5	1.5	0.4	1.1	
	56	A-6	Ⅱ	チャート	4.3	1.2	0.5	2.6	
	57	B-2	Ⅱ	頁岩	2.1	1.6	0.5	1.4	
	58	B-2	Ⅱ	鮫島黒曜石	2.1	1.5	0.8	2.0	
	59	A-5	Ⅱ	チャート	2.3	1.7	0.7	2.7	
	60	B-3	Ⅱ	チャード	3.6	2.5	0.8	6.5	
	第50図	61	B-1	Ⅱ	タンバク石	3.1	(4.3)	0.9	(10.6)
		62	B-7	Ⅱ	タンバク石	3.5	4.8	1.0	9.2
		63	A-3	Ⅱ	チャート	3.4	(4.1)	0.9	(7.7)
		64	A-4	Ⅱ	タンバク石	2.9	4.3	0.7	8.2
		65	A-3	Ⅱ	チャート	3.2	5.0	0.6	7.2
		66	B-6	Ⅱ	チャート	4.0	4.7	0.9	13.3
67		A-4	Ⅱ	チャート	3.0	4.0	0.9	7.8	
68		A-1	Ⅱ	チャート	2.6	(3.5)	0.6	(5.2)	
69		B-2	Ⅱ	チャート	1.9	4.5	0.4	3.4	
70		B-4	Ⅱ	チャート	2.4	(3.4)	0.6	(5.0)	
71		A-8	Ⅱ	タンバク石	2.1	2.8	0.8	4.0	
72		B-6	Ⅱ	チャート	3.0	(3.6)	0.9	(6.9)	
73		B-3	Ⅱ	チャート	3.1	3.4	0.7	5.4	
74		B-3	Ⅱ	黒曜石	2.3	(3.7)	0.7	(5.5)	
第51図	75	-	Ⅱ	チャート	(5.5)	2.4	0.7	(7.9)	
	76	B-3	Ⅱ	チャート	(4.7)	(3.5)	0.8	(12.8)	
	77	B-3	Ⅱ	タンバク石	5.2	3.8	0.7	13.4	
	78	A-5	Ⅱ	タンバク石	(4.1)	2.4	0.7	(6.3)	
	79	A-6	Ⅱ	チャート	4.2	2.4	0.6	4.7	
	80	A-1	Ⅱ	安山岩	10.2	5.8	2.0	148.0	
	81	A-5	Ⅱ	ホルンフェルス	(11.1)	(5.1)	3.1	(237.0)	
	82	A-3	Ⅱ	ホルンフェルス	(9.7)	(5.6)	2.2	(260.0)	
	83	A-5	Ⅱ	鉱石	5.8	8.3	2.3	78.0	
	84	B-2	Ⅱ	安山岩	8.9	9.5	1.5	116.0	
	85	B-1	Ⅱ	安山岩	8.7	9.0	1.2	104.0	
	86	A-2	Ⅱ	安山岩	6.2	5.6	1.4	33.7	
	87	B-3	Ⅱ	安山岩	5.9	5.1	1.3	40.5	
	88	A-5	Ⅱ	安山岩	5.0	6.3	1.1	31.3	
第52図	91	A-4	Ⅱ	安山岩	13.0	12.2	5.9	1,420.0	
	92	A-5	Ⅱ	安山岩	11.9	10.3	6.9	1,010.0	
	93	B-3	Ⅱ	砂岩	9.6	(6.3)	4.2	(413.0)	
	94	A-7	Ⅱ	安山岩	13.5	8.3	3.6	500.0	
	95	A-5	Ⅱ	砂岩	10.0	(9.9)	5.5	(804.0)	
	96	A-1	Ⅱ	安山岩	9.2	7.9	6.8	710.0	
	97	B-3	Ⅱ	安山岩	9.0	8.4	4.2	330.0	
	98	A-4	Ⅱ	安山岩	11.1	8.0	3.8	555.0	
	99	A-5	Ⅱ	安山岩	6.2	7.0	3.5	190.0	
	100	A-3	Ⅱ	安山岩	6.5	4.9	3.7	170.0	
	101	B-2	Ⅱ	安山岩	6.8	5.0	3.1	122.0	
	102	A-4	Ⅱ	砂岩	5.0	5.2	4.2	127.0	
	103	B-1	Ⅱ	安山岩	5.2	5.0	4.7	172.0	
	104	A-5	Ⅱ	砂岩	4.8	3.5	2.9	67.4	

版 圖



星塚遺跡遠景（南から・航空写真）



星塚遺跡遠景（南西から）



- 表層 = 耕作土
- ← II 層 = 黒色火山灰腐植土層
- ← III a 層 = 暗黄褐色土層（アカホヤ火山灰腐植土層）
縄文時代前期・後期・晩期包含層
- ← III b 層 = 明黄褐色土層（アカホヤ火山灰層）
- ← III c 層 = 混バミス黄褐色土層（アカホヤ火山灰層）
- ← IV a 層 = 黒色土層（縄文時代早期包含層）
- ← V 層 = 明黄色含バミス層（薩摩火山灰）
- ← VI 層 = 黒褐色土層（旧石器時代・細石器包含層）
- ← VII 層 = 二次シラス層

星塚遺跡の層位



1. 星塚遺跡の土層遠景 (B3区～B6区付近)

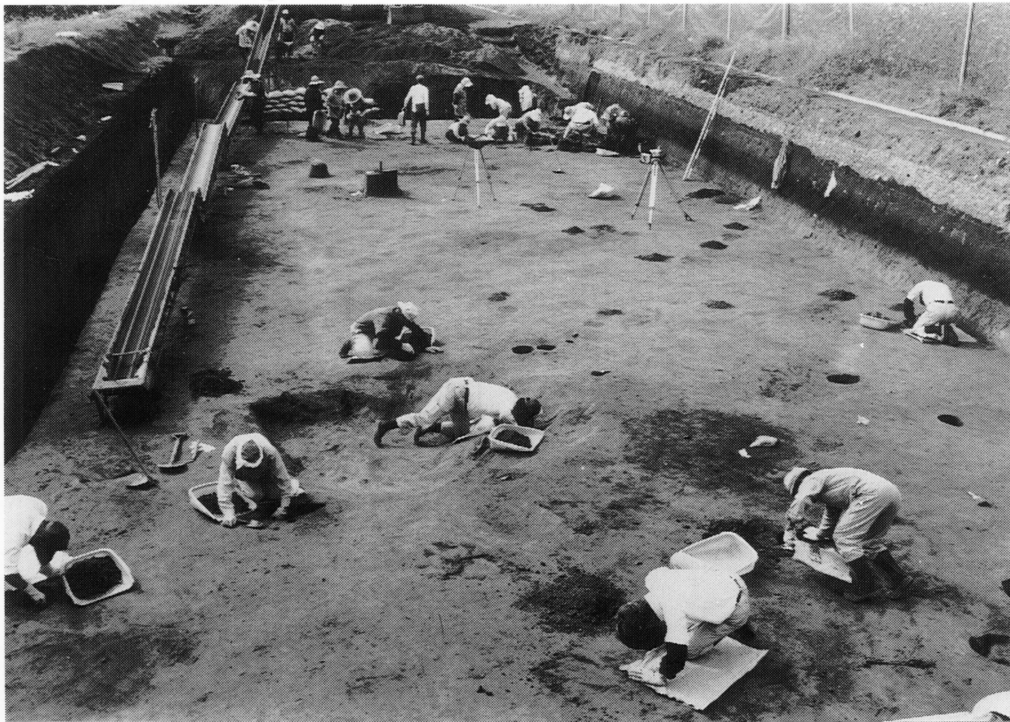


2. 細石器出土状態 (A1区・B1区付近)

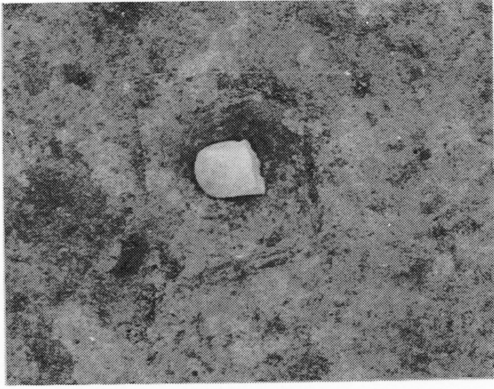
図版 4



1. 縄文時代前期と早期の調査風景（AB6区～AB8区付近）



2. III層調査風景（AB6区～AB8区付近）



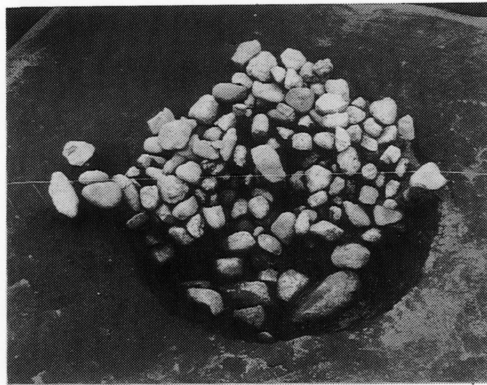
1. 細石器出土状態



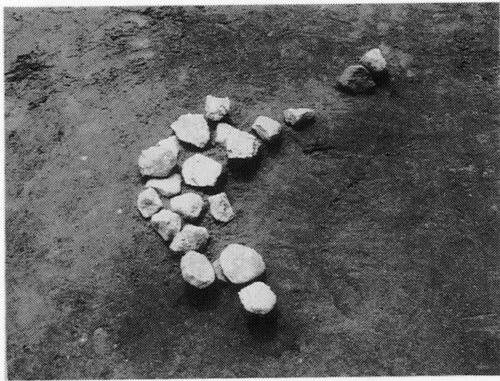
2. 集石 1号



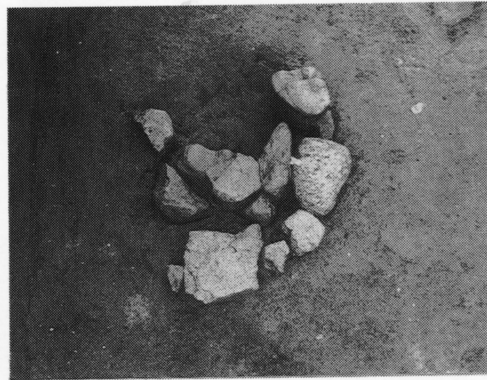
3. 集石 4号



4. 集石 1号

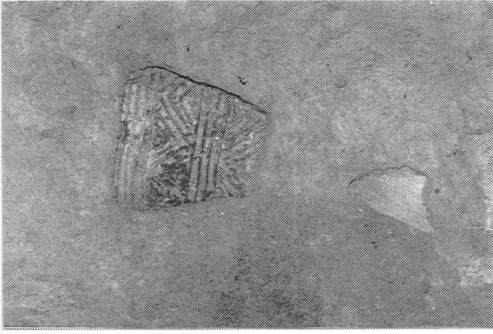


5. 集石 2号

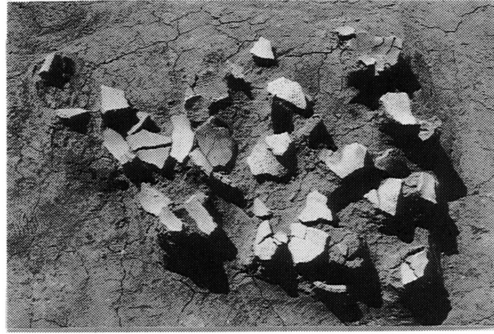


6. 集石 5号

図版6



1. 土器 (56) 出土状態



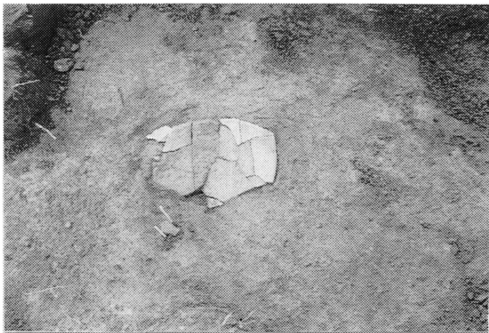
2. 遺物 (90) 出土状態



3. 土器 (60) 出土状態



4. III層調査風景

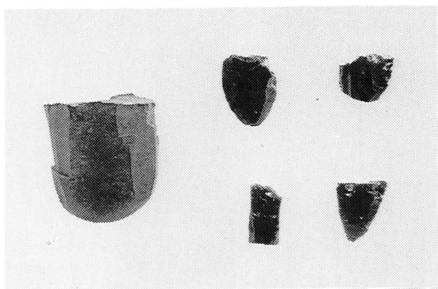


5. III層遺物 (晩期8) 出土状態

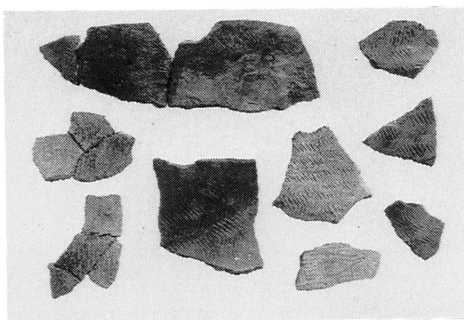


6. 佐々木小学校発掘体験学習風景

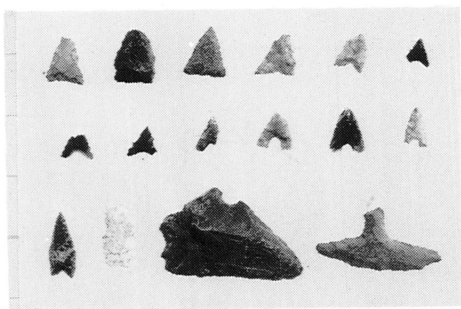
図版 7



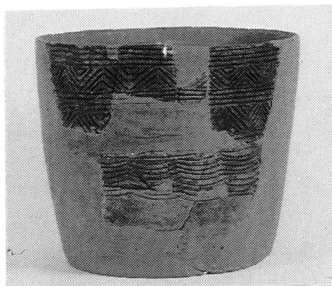
1. VI層細石器（細石核）



2. IV層縄文早期土器
（手向山式土器）



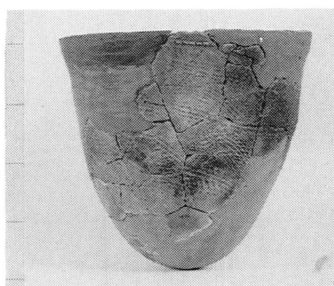
3. IV層縄文早期石器



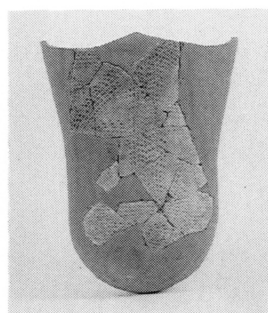
前期（56）



前期（27）



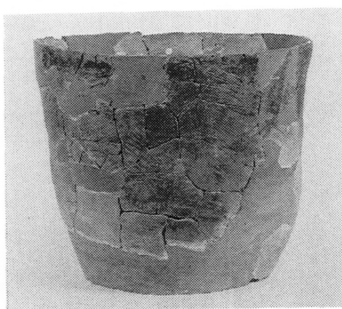
前期（90）



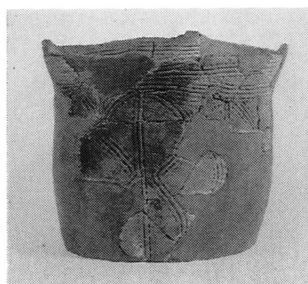
前期（93）



前期（89）



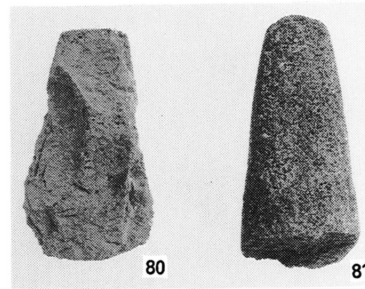
前期（92）



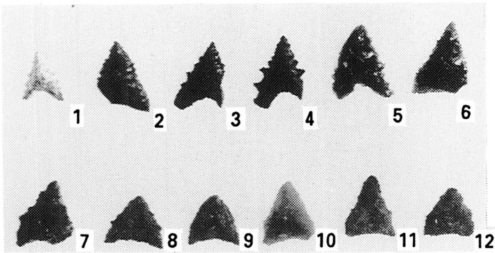
前期（91）



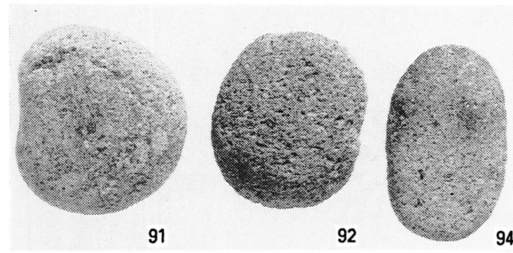
後期土器 (60)



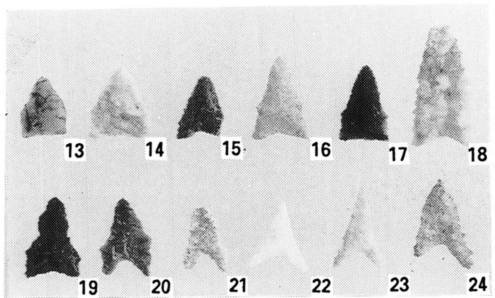
Ⅲ層石器 (石斧)



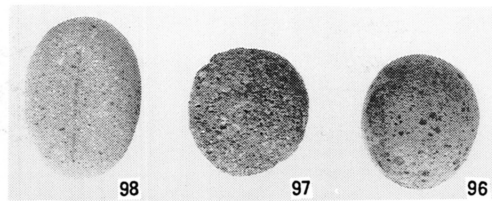
Ⅲ層石器 (石鏃)



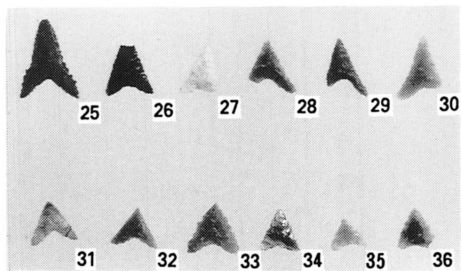
Ⅲ層石器 (磨石・敲石)



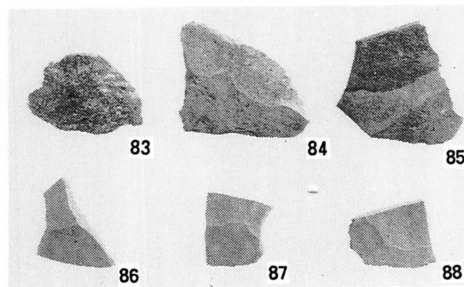
Ⅲ層石器 (石鏃)



Ⅲ層石器 (磨石・敲石)

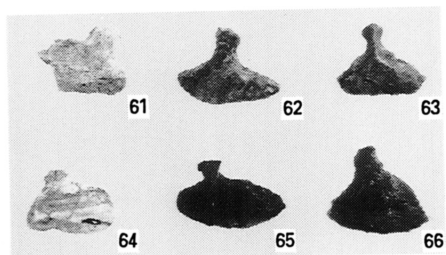


Ⅲ層石器 (石鏃)

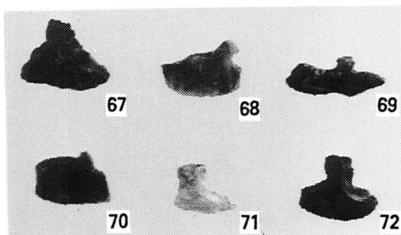


Ⅲ層石器 (スクレイパー)

图版 9



Ⅲ層石器 (石匙)



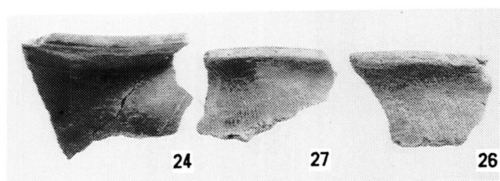
Ⅲ層石器 (石匙)



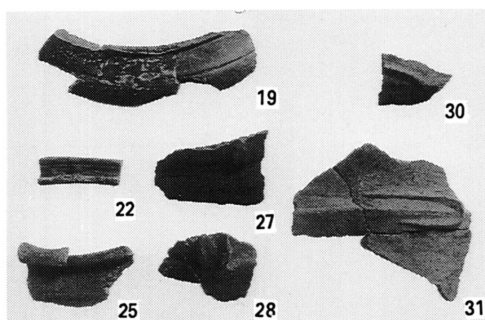
晚期土器 (8)



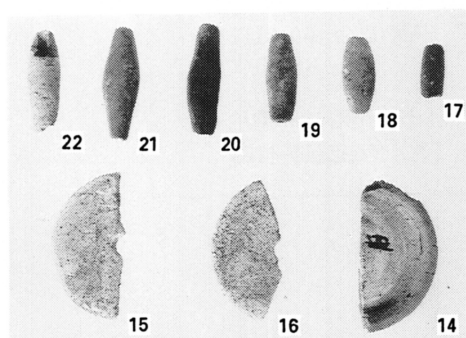
晚期土器 (16)



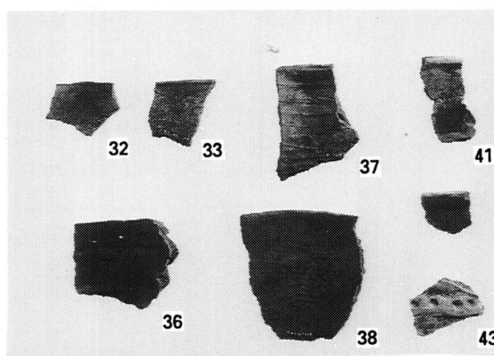
Ⅱ層出土遺物



晚期土器



Ⅱ層出土遺物



晚期土器

星塚遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書

星 塚 遺 跡

平成5年3月31日発行

発行 鹿児島県立埋蔵文化財
〒899-56 鹿児島県始良郡始良町平松6252
TEL (0995) 65-8787 FAX (0995) 65-8117

印刷 (有)こだま印刷
〒892 鹿児島県鹿児島市下田町1899番地
TEL (0992) 44-4118 FAX (0992) 44-4169